

彼等は祭日には、全く泥酔して、時々群をなしてほつつき歩いてゐる。彼等は笑ふべき場所にゐて、他の通行人を押し倒す。其は彼等が人々を困らせやうと特に望んでゐる爲ではない。自分の擦れ違ふ散歩人と衝突するのを避けるやうに、酒飲みが濫費を慎しむと言ふことは何處にもあるまい。女や子供が聞いてゐるにも頓着せず、彼等は大きな聲をして不潔なことを言ふ。『破廉恥と思つてはいけない。酔ばらひと言ふものは、卑猥なことを言ふ要求を感じてゐるのだ。彼は自然と喉を鳴らして物を言ふ。』
のは、卑猥なことを言ふ要求を感じてゐるのだ。彼は自然と喉を鳴らして物を言ふ。多くの時代が彼に猥褻なる言葉を與へたとすれば、其を作り上げる必要があるのだ。私は冗談を言つてゐるのではない。泥酔した人間は、すばしつこい言葉を發することが出来ない。同時に、彼は普通の状態に於ては感じない無限の感覺を感ずるものである。そこで、如何言ふ譯か知らないが、卑しい言葉が最も容易に口をすべり出し、非常に生々しくなるのである。そこで……

彼等が最も多く用ゐる言葉の一つは、久しき以前から、全ロシアに於て用ゐられてゐる。其只一つ悪いことは、辭書に見出すことの出来ないことであるが、其は、多く

の長點を以て此僅かな不便を償うものである。其言葉に含まれてゐるいろいろの矛盾せる意味の十分の一を表はす他の語を私に見付けさせ給へ。日曜の午後、私は酔はらつてゐる百姓の一群を通らなければならなかつた。其は十五歩の所であつたが、此十五歩あるいてゐる間に、私は、此語のみが、然り、此單純なばかりでなく馬鹿に短い言葉で以て、凡ての人間の印象を表はすことが出来ると言ふ信念を得た。

男らしい力を以て其語を發音する活快な人間がある。其語は否定的で破壊的のものとなる。隣りの者が、こん度は、其語の否定の意味に不眞面目があるのを信じて始めて口にしたものゝ頭に其語をあびせかけ、言ひ返へす。其口論を彼は埃の中にまみれさせて了ふ。第三の者が又第一の者に對して怒り出し、會語の中に飛び込み、又其言葉を叫び出す。其言葉は怒りに満ちた罵詈訛となつた。こゝで、第二の者が第三の者につゝかゝつて彼に其言葉をあびせる。其語は急に明瞭に次の意味となる。『貴様は俺つちを馬鹿にするな。何で貴様は餘計な御せつかいをするのだ。』第四の者がよろめきたら近よつてくる。彼は其まで何も言はなかつたのだ。彼は自分の仲間を不和ならしめ

た紛擾に解決を見出さんと考へ込み乍ら、自分の意見を控へてゐた。彼は見出した。彼はアルシメードアルシメード（譯者曰、シラキューズの昔の哲學者の名）の如く、Eureka と叫び出すと、諸君は勿論思ふだらう。そんなことはない。其場合を明かにするのは、例の名だゝる言葉である。第五人目のものも熱心に其を繰り返す。彼はかの幸福な探求者をほめる。然し、六番目のものは、重大問題を軽々しく打ち切るのを見るを好まず、陰氣な聲で何かつぶやく。其は慥に、下のやうな意味である。「貴様は餘り腹を立て過ぎるのが早い。貴様は喧嘩の表つ面しか見ないのだ。」そこで、此言葉は只一つの語につづめることが出来る。何であるか。然し、此語、無限なる此語は、關係者を含んだ凡て全く異なる七つの承認を持つてゐるのである。

私は非常に悪るいことには、憤慨するやうなことをした。

——卑しい奴だ。（と俺はどなつた。）俺は君の近所には數秒間ゐたばかりなのに、君は既に七度も、其言葉……を言つた。（私は其短い名詞を繰り返す。）七度も。恥づべきことだ。君は君自身に愛憎をつかさないか。

凡てのものは私を呆然と眺めた。私は一瞬間、彼等が私に打つてかゝるか、何かするかと思つた。彼等は何もしなかつた。最も若いものが私の所へやつて来て、柔しく私に言つた。

——若しお前さんが、其言葉を汚い……と思ひなら、何故、お前さんは八度目に……其語を繰り返したんだね。

其言葉は凡ての争ひを御了ひにした。そして、群衆は最早私には構はずにあらへよるめいて行つた。

その三

否、他の日より、殊に日曜に私が悲しく思つたのは、酔どれの言葉や風俗の爲ではなかつた。否、最近に、私の非常に驚いたことは、ペテルブルグには絶対に酒を飲まない百姓や、労働者や、つまらない職業の人々があることを知つたのであつた。殊に私を驚かしたことは、酒の魅力に動かされない人々の數である。さて、此等の禁酒し

てゐる人々を見給へ。私は、酔どれよりも此等の人々を見て悲しむ。彼等は恐らく形の上から見れば嘆くべきことではなからうが、彼等に出合ふと何故いつも私がぼんやりした考案る悲しい考に引き入れられるのか、私は言ふことが出来ないのである。日曜の、夕方頃（何故と言ふに、労働日には彼等に決して會ふことは出来ないので）全週苦しんでゐた是等の人々は、町に現はれる。彼等が散歩に出かけたことは解り切つたことである。然し、どんな散歩と思ふか。彼等が決して、ニースキイ塵場や上品な道を往來しないことを私は氣がついた。否、彼等は自分の住んでゐる區内に向つて行つて、屢々、隣人の家へ訪問に戻つてくる。彼等は重々しくぶらり／＼と歩いてゐる。彼等の顔付は、散歩と言ふよりも全く外の事をしてゐるかのやうに、心配さうな様子である。夫と妻の間には、極少しか話をしない。彼等の日曜の着物は色が褪せてゐる。妻は屢々、油ぬきをしたり、洗濯したり、場合によつては、こすつたと思はれるつぎはぎした着物を着けてゐる。ある人々は未だ我國風の着物をきてゐるが、多數は西洋風な着物を着て、注意して髻を剃つてゐる。最も私に苦みを與へることは、

彼等が日曜を陰氣な嚴かな日と見做してゐるやうに思はれることである。彼等は此日を樂しまうと思つてゐるが、常に楽しむことが出来ないのである。彼等は此非常に悲しいことを散歩に結びつけてゐる。此廣い塵埃の多い街、日が暮れても尙埃の立つ街を、斯うして散歩した所が、何の樂みがあらうか。彼等は私には病みほうけた氣の狂つた人のやうな印象を與へる。彼等は屢々一緒に子供をつれてくる。ペテルデルグには澤山の子供がある。そして、統計は彼が非常に澤山死亡することを報らせてゐる。人々の出會ふ凡ての是等の惡戯子は、尙非常に少く、彼等が既に歩いてゐても、やつと歩き始めたばかりである。彼等は、大きくなるのを見ることが出來ずに、殆ど凡て小い中に死んで了ふのではなからうか。

私は腕に抱くべき妻もなく歩いてゆく一人の労働者に氣がついた。然し、彼は一所に小い男の子を連れてゐた。二人共、孤獨者のやうな悲しい面持をしてゐた。其労働は三十許りの年頃であつた。彼の顔は、不健康な色で褪せてゐた。彼は日曜服を着、仕立ての摩り切れた、切れのなくなつたボタンをつけたフロッタコートを着てゐた。

着物の襟は油がついて居り、ズボンによく掃毛をかけられてゐたが、それでも、古着屋からの出物のやうに思はれた。高い形の帽子は、破れてゐた。此勢働者は私には印刷工のやうな印象を與へた。彼の顔の表情は、陰氣で、固く、殆ど意地悪るさうであつた。彼は手に子供を取り、子供は少し引きずられるやうに歩いた。此子は二才か其とも少し上か位の子供で、非常に青く、非常に疲せて、丸形チョッキと、赤筒の長靴と孔雀の羽のついてゐる帽子とをつけてゐた。父が此子に何か言ふ、多分、子供の歩みの遅いのを叱つたのであらう。子供は何も答へなかつた。そして、五歩尙進むと父はかゞんで、腕に抱いて連れて行つた。此子は嬉しいやうに見え、父の頸にしがみついた。斯うして一度場所が定まると、其子は私を認め、びつくりしたやうな好奇心で私を眺めた。私が頭で一寸合圖をしたが、其子は眉をひそめ、益々強く父の頸にしがみついた。此父子は互に非常に親み會つてゐたに違ひない。

街の中で、通行人を見守り、見知らぬ其顔をしらべて見、彼等がどんな人間であるかと探がし、如何して彼等は暮してゐるかを探がし、如何して彼等は暮してゐるか

想像し、生活の中で最も彼等を喜ばせるものは何であるかと思ふことを私は愛する。あの日、私は殊にあの父と其子ことを心の中に考へてゐた。妻で母であつた女は近頃死んで、残つた夫は一週の間工場で働き、其間、子供はある年老つた婦人の世話に見捨てゝおかなければならないのだと、私は想像した。彼等は地下室に住んでゐるに違ひない。其處で、彼は小さい室を借り、恐らくは只室の一隅を借りてゐるのが關の山であらう。そして、今日の日曜に、父は子供を親類の所、多分、死んだ妻の妹の所へ連れて行つたのであらう。餘り會はれない此叔母はある下士と結婚して、大きな兵營の地下室に、だが、難れた別室に住んでゐるものと思ふ。彼女は死んだ姉を思つて泣いたが、其は長いことではない。鰥夫は訪問してゐた間は少くとも大した悲みは見せなかつた。然し、彼は心配さうにしてゐて、口數も少く、只興味ある問題ばかり言ふ間もなく彼は黙り込んで了ふ。そこで、サモヴルが出る。人々は茶を飲む。子供は隅の長椅子の上に腰をかけて、荒々しげに不平の顔をし、眉をしかめてゐたが、遂々眠り込んで了ふ。叔母と其夫とは彼に大した注意を拂はない。人々は然し、彼にパン一

片と牛乳一杯をとつておく。下士は始めは黙つてゐたが、ある時が來ると、子供のこ
とを非常な愚弄をし始める。父は子供をきつぱりと叱る。幼児は直ぐに歸ると言ひ出
し、父は彼をリチエナヤのゴボルスカヤの家へ連れ歸る。

其翌日となると父は更に工場に行き、子供は老婦人に渡されるのだ。……

……そして、私はと言ふと、散歩を續け乍ら、絶えず心の中に、同じやうな澤山の
小景を思ひ浮べる。其は少しまづいものだが、私に興味を起し悲しませる。で、斯う
言で風だから、ペテルブルグの日曜は、私を愉快にしはしない。此都會は夏は世界中
で實際最も陰氣な町のやうに私に思はれる。

其他の日でも、人々は街で澤山の子供とすれ交ふ。然し、何故と言ふでもなく、私
は彼等に餘り注意を拂はない。日曜には十倍も多く子供があるやうに思ふ。そして、
人々が腕に抱いた子供は、殊に、何と言ふ小さい、瘦せた、青い、腺病的な悲しい顔を
してゐるであらう。もう一人で歩くやうになつたものも、非常に楽しいやうな様子を
してゐない。彼等の中で如何に多く、足が曲がり、彎曲しゐることだらう。多くの是

等の子供はさつぱりした着物を着てゐるが、然し、何と言ふ顔色をしてゐるのであら
う。

子供は春の樹に咲いてゐる花の如くに、或は、葉の如く生長しなければならぬ。彼
には空氣と光線が必要だ。強壯的の食料も必要だ。彼はペテルブルグで發育する爲に
何を見出してゐるか。夜になつて恐しき惡臭を發するクワッスとキツベツの入り交つ
た臭ひで腐敗した地下室、不健康な食料、永久に薄暗い所、蚤と南京虫のうよ／＼し
てゐて、濕氣が壁ににじんでゐる中に、彼は生活してゐるのだ。街の中でも、氣休め
をする爲に、彼は碎かれた煉瓦と乾いた泥の塵埃を呼吸してゐる。斯う言ふ風で、君
は、この子供が瘦せて鉛色をしてゐると言つて驚くのか。新しい着物を着た三つの
小さい女の子を見給へ。彼女は生々としてゐる。彼女は家の前庭に腰を下してゐる母親
の方へ走つてゆく。そして、近所の女の子を喜ばしげに話し合ふ。母親もお喋りをし
てゐるが、彼女は娘のことを心配してゐる。少しでも子供に誤ちがあれば、大急ぎで
救助に馳せつけてくる。

少女は母親が再び氣を外へ取られてゐるのを利用して、石を拾はうとしてかゝみ、裳で足をからみつけ、起き上がることが出来ない。私は幼女を抱き起して、腕の中にかゝへる。然し、母親はもう私の所へ來てゐる。私が少女の困つてゐるものを取り除いてやらうと手をかけやうとする中に、母親はからみついてゐる裳を拂ひのけてゐるのだ。彼女は非常に丁寧に私に御禮を言ふが、我にもあらず、彼女の眼は、「私があなたより先きに來なかつたことを少し嫌に思ふ」と言つてゐる。子供の方はと言ふと、すばしく私の腕を逃れて、母親の首へ飛んで行くのだ。

然し、私はもう一人他の少女を見た。彼女の母が腕にかゝへて、車馬の往來の烈しい街の四つ角の土手の上に突然おいた。此母はある知合の人を認め、そこで、自分が友の方へ駆けつけさせる爲に、少女を放したのだ。長い髻をした老紳士が此急いでゆく婦人の腕を捉へて止めた。

——斯うしてお前さんは何處へ行くのだ。お前さんは子供を危い目にあはせておく。女は彼に馬鹿なことを返答せんとした。私は彼の顔を見た。彼女は折よく考へ直し

だ。彼女は知合と出會ふ爲めに、子供の手を引いて、不満さうな様子で去つて行つた。此が私の雑誌にさしはさむ、を憚つた少し素朴な小品である。これから、私はもつと眞面目になるやうにする。

嘘偽に	就いて	の感想
-----	-----	-----

何故我國では凡ての人々が嘘をつくのであらうか。

……私が斯う言ふと、凡ての人々は我を止めて斯う言ふことは慥かだ。「君は愚にも誇張してゐる。凡ての人なんてことはない。君は今日話題が付きたので、早卒に人氣取りの讒謗を我々にあびせかけ、同じやうに君の小品を作らうと思つてゐるのだ。」そんなことはない。私が今言つたことは、私がふだん考へてゐたことなのだ。只、如何してそう言ふことになるのかと言ふこと丈だ。我々は幾分かかゝる潜在的の信念を以て、五十年と生きた。そして、突然、五十年の終に當つて、此信念は如何言ふ譯か知らないが、意外の力を有するやうになつて、言はず、生々として現はれた。近頃になつて、何よりも私の心をうつものは、我國に於ては修養ある階級に於ても、嘘をつかぬものは殆どないと言ふ考である。非常に正直な人々の如く嘘をつく。他の國民にあつては、多くの場合に、眞實を

わざ／＼曲げ變へると言ふ狡猾兒は殆どゐないと信じてゐる。そして、彼等の嘘は利益に關係してゐる。我國に於ては、人は快衆の爲に嘘をつくのだ。屢々、ロシア人は……もてなしの爲、言はず、客を愉快ならしめる爲に嘘をつくのだらうと人々は認めるかも知れない。斯くして、我々は、對話者の人格の爲に、自分自身の人格を犠牲にするのだ。最も細心な人々が、私等の馬が斯う言ふ場合に幾エルスト（譯者曰、百〇六六米に當る）馳ける力を持つてゐたと滑稽にも誇張するのを、諸君は聞いた覚えがないか。其は聽いてゐる拍手を喜ばせる爲である。代り番子に彼を話さしめんと言ふ氣を起させる爲である。そして、實際、其ねらひは外れることはない。その訪問者に君達の嘘言に引きこまれて、直ちに、トロイカで鐵道を超えたのを見たことを思ひ出す。そして、彼は獵犬を澤山知つてゐた。君は、齒を金充填した巴里の醫者の技能や君の嘘のやうな病氣を治したポトキンの診察の恐しく迅速なことや、變つた話を語りつゞける。君は君の物語の半ば、信するやうになる。人が斯う言ふ方法でやつて行けば常にさう言ふ風になるものだ。後になつて、君が其場合を考へ、君に傾聽してゐる人

の面白さうだつた顔色を思ひ浮べた時に、君は、「あゝ、あんなことはなかつた。俺は可成嘘つき者だ」と思ふだらう。

此最後の例は餘りいゝものではない。何故と言ふと、自分が病氣を煩つた詳細のことを並べる時となると、殆ど常に嘘をつくと言ふことが人間の性質にあるからである。其は彼をば二度治すことになるのだ。

然し、今度は、君が外國から歸つて来て、君のゐた國に、君のゐた間に起つた凡ての出來事を、君は目のあたりで起つたことだと言ふやうなことは、今迄なかつたであらうか。私はまた例を選びそこなつた。君は哀れなロシア人が超人的のものであると如何して思つてゐるか。外國へ旅行しに行つた人が、奇抜な話を持つて歸らなかつたとしても、何であるか。もつとよく考へて見やう。君は生涯の中で、慥かに、自然科學に就いて、……銀行家の破産とか逃亡とかに就いて……新しい發見をしたに相違ない。そして、其は自然科學の一語も知らずに、銀行界の出來事も何等通曉することなくなされたのだ。君は少くとも一度位は、他人に關した物語を自分自身に起つたかの

如く物語つたことがあることは慥かだ。誰に君は其を話したか。其は、彼自身に逸事を物語つた主人公たる人だ。話際中に、如何して恐しい事實が君に現はれたか、君は忘れたのだ。恐らくは、其は、君に話をした君の聽者が、不可思議な眼付をしたからだ。それにも係らず君は話しつゞける。おゝ、何と言ふ困つたことだ。君は其話の終りをふつきらばうに言つて、突然、友を去る。如何言ふ風にして？ 全く、君の面白い話で、君は友に其の叔母の病狀を尋ねることを忘れたのだ。……君は階段まできて、始めて其を思ひ出す。君は急に質問を友に發する、友は答へもせず、戸を靜かに閉めるのだ。君は決して斯う言ふ話をしたことはない、ポトキンの所へ足を入れたことはない、階段に落ち乍ら叔母の病狀を友に尋ねたことはない、私の所へ苦狀を言ひに來ても、私は君を信じない。

悪い冗談だ。(と人々は私に言ふだらう。)罪のない嘘なんて、大したことではない。其は宇宙の組織に何等關係することもないのだと。宜しい。私は凡てが冤罪であることを認める。私は只此嘘を言ふ癖が表す性格の非常な缺點を言ふのだ。

此微妙なる相互の嘘言は、ロシア社會の運用上缺くべからざるものであると人々は尙付け足して言ふ。宜しい。諸君が幾エルストと言ふ程走り廻つたとか、ポトキンに奇蹟を行つて貰つたとか言ふ時に、諸君に反對を唱へる人間は、粗野な人間ばかりであるとは、私も思ふ。實際寛容すべき真理の變更の爲に、直ちに諸君を罰すると主張するものは馬鹿のみであらう。然し、此嘘を澤山つくと言ふことは、我國民的風習の重なる特徴なのである。私は我々ロシア人が真理を憎んでゐるのだとは言ふものでないが、真理をば、散文的な、退屈な、世俗的なものと考ふる傾向を有してゐることが之で解かる。然し、我々は明かに絶えず真理を避けてゐ乍ら、ロシア交際社會に、稀な尊い味のつきぬ長所をば作つてゐるのだ。真理とはもつと非常な意外の所にあるものであつて、思ひがけなくも一層空想的と考ふる凡ての物に又輪をかけたものだと言ふ喩話が、我國に廢れてから久しくなる。けれども、人々は凡てのものを變更して、最も信すべからざる嘘こそ一層ロシア人の魂にしみこむもので、生々しい眞實よりも一層眞實らしく見える程、さうしてゐるのだ。のみならず、私は、全世界にも、斯く

の如き人が少しはあることを信じてゐる。

此凡てを偽ると言ふ癖は、未だ我々が自分自身を恥ぢてゐることを示してゐる。ロシア人が社會に近づくや否や、實際ある所のものとは違ふやうに見せるべく全力を盡すのを見た時、人は如何して反對を言ふことが出来やう。

ヘルツェンが、外國に住んでゐるロシア人に就いて、ロシア人は社會に立つことを知らない、沈黙すべき時にも大聲で話をし、何か言ふかと期待してゐる時でも適宜な自然な方法で一語も言ふことが出来ないと言つた。其は確である。國外にあるロシア人が口を開くとなると、出来る丈ロシア風でないやうに見なされるやうな意見を吐かうと苦心慘膽するのだ。彼は明かに、ありのままにロシア人たることを現はすことは、變てこな人間と見做されると信じてゐるのだ。あゝ、彼がフランス人、イギリス人の態度、要するに外人の態度を借りてゐるのは、全く違つたことなのだ。彼は客間で隣客から凡ての尊敬を拂つて貰ひたいのだ。私はもう一つ小さい觀察をしやうと思ふ。此自己を恥ぢてゐる卑怯なものは、殆ど自ら悟らないのである。其時、彼は自分の神經、

一時的の出来心に従つてゐるのである。

——私は感情に於いても生活に於ても、全く英人である。(とあるロシア人は斷言する。彼は下の意味を含めて言ふのだ。)「それだから、凡ての英人を尊敬するやうに、私をも尊敬しなければならぬ。」自分の周圍が自分を作つてくれたやうに人前に出てもやることを恥ぢる獨逸人や英人や佛蘭西人もあるまい。ロシア人自身もよく其を心得てゐるが、是等の外人が自分よりも非常に傑れてゐて、其爲にドイツ人たり、イギリス人たり、フランス人たるやうに見て貰ひたいのだと、はつきりした信念ではないがさう思つてゐるのだ。

——然し、君の物語ることは、非常に解り切つた頗るありふれたことだと、人々は私に注意するだらう。宜しい。だが、こゝに、もつと性格をあらはしてゐる事柄がある。ロシア人は、凡ての人々よりも利巧だと見られることを、殊更に重きをおいてゐる。非常に謙遜な人でも、人よりも馬鹿と見られたくないと思つてゐる。「僕が普通人より馬鹿でないと言ひ給へ。僕は君が君のやり方で馬鹿でないことを認めてやる。」と

彼は言ふやうに見える。

歐洲の有名な人前に、彼は屈從をなすことを喜んでゐる。彼が試験することなく凡ての偉人を賞めることは、恰も、人が彼自身を餘り研究せずにはらい精神をもつてゐると見なすがやうである。然し、此有名な人物が流行しなくなり、其人物が立つてゐた土臺を失ふやうになると、此失墜した偉人を批評すること我ロシア人より厳しいものは世の中にゐないのである。彼の嘲笑的侮蔑は際限を知らぬのである。西歐が際物でない偉人を偉人と見做してゐることが、偶然我々に解れば、我々は非常に子供らしく驚くのだ。

然し、成巧の寵兒を盲目的に崇拜してゐる此ロシア人と雖も、彼が自分の崇拜した偉人より劣つてゐるものだとは、公然と同意することは決して欲しないのである。「グーテ、リエビツク、ビスマルク、大に宜しい。」と人々は全く同意する「然し、又、こゝに俺がゐるのだ。」

要するに多少修養のあるロシア人は、實際に言ふと、眞の偉人を認める程、偉大な

る精神を今迄持つてゐないのである。私の此バラドックスを餘り嘲笑してはいけない。リエビツクの競争者は、恐らく、中學校の課程をも終らなかつたであらう。

我ロシヤ人がリエビツクに知らずに汽車の中で會ひ、其學者が科學の話始めたを假定し給へ。我々の友はうまく其小ぼけな考を述べることゝなる。そして、彼は學者的に論ずることがないのは疑を容れない。——自分の話す事柄に就いて、化學と言ふ言葉より、他の語は知らないのだ。彼はリエビツクをして慥かに嫌惡を感せしめる。然し、聽衆の心に、彼が此大科學者を釘付けにして了つたと思はせないとも限らない。何故と言ふに、ロシヤ人は、殊に自分の取り扱ふ問題を知らない場合には、常に科學的言葉を素敵に使ふことを知つてゐるからだ。そして、我々は同時にロシヤ人の魂に特種なる現象を見る。修養をうけた階級の我國人の一人が「衆人」の前に姿を表はしたならば、彼は自分が深い智識を有してゐたことを疑はざるのみならず天賦の科學を持つてゐるやうに信じてゐる。

自分の本心に於ては、ロシヤ人は少し教育をうけたとか、無學文盲なることを嘲け

つてゐる。「だが、俺は實際あることを知つてゐるのか」と言ふ問をば、自分に下すことは稀の時ばかりである。

彼が自ら其を下したとしても、そして、實際初步の智識しか持たないことを自覺してゐても、彼は自分の虚榮心を満足せしめるやうな方法で答へをするのである。

最近、私にも、二時間の旅行の間に汽車の中で、古典語に就いての論をすつかり聞いたことがあつた。只一人で其旅行者は論じてゐて、凡ての他の人々は其言葉を飲みこんでゐた。彼は其室にゐる凡ての人々に未知の人であつた。彼は強壯で、いゝ年をした、傑れてゐるばかりでなく貴族的の容貌をした人であつたが、言葉に頼り乍ら話してゐた。彼に傾聽してゐるものでも、彼がこんな問題を論じたのは始めてあるのみならず、彼は我々に話したことを、實際一度も考へてゐなかつたことを慥めてゐるやうに見える。そこで、其は單純な華かな當意即妙の話でなければならぬ。彼は絶對的に古典語教育の必要を否定する。我國に於ける其論をば、「致命的な歴史的誤謬」と呼ぶのである。のみならず、其は彼の爲すことの出来る只一つの辛辣な論であつて、

無暗に熱すべきでないと言ふ程其問題を高尚なものとするのである。彼の考が據つて來てゐる基礎は、恐らく鞏固を缺いてゐるだらう。そして、彼の理屈は殆ど十三才の中學生か最も無能なるある記者の理屈をも出ない。「古典語は何等役に立つ所がない」と彼は言ふ。「例へば、ラテン語の凡ての傑作は、翻譯せられてゐるのである。そこで、我々に與ふべき何物をも有しない言語を研究して、何の爲になるか……」

汽車の中で彼の論は非常なる印象を與へる。そして、彼が汽車を降りる時は、多くの旅行者、大部分は婦人だが、彼の論を聞いて面白かつたと彼に感謝するのである。彼が天才であると信せられて列車から降りることは慥かなのである。

今日、(汽車の中でも外の所でも)公衆に話をすると言ふことは、昔とは大分性質が變つてゐる。今は人々は教育家を探してゐるやうに見える。多少なり社會の大問題に觸れてゐる會話であれば、人々は常に喜んで聞くのである。多くの互に知合でない人々が、一所に話し始めることは慥に不愉快である。議論には常にある困るやうな遠慮と言ふものがある。然し、話し始めた時は、對話者は屢々非常に壯嚴なものとなつて、

彼が出てゆくことの出来ないやうに止めることが、禮儀にかなつてゐると思ふ程である。話が財政とか政治問題に屢々及んでゆくことは實際であるが、斯様な高尚な見地に立つて論せられては、普通の公衆は何事も理解することが出来ない。此普通の公衆はつゝましい尊敬を以て傾聽する。そして、論者は益々落着きを増してくる。此平和な論者は互に信用をしてゐないのは明であるが、常にお互に知合になりたいと言つて、仲よく別れるものである。最も愉快に旅行する秘訣は、他人の虚言を丁寧聞くことを知り、出来る丈其を信するやうにすることである。かゝる條件の下に、人々は君の方から君の小印象を生せしめるやうになり、斯くして、相互の利益となるのである。

然し、既にも言つた如く、學のあるなしに係らず凡ての公衆の興味を起すものは、一般の問題であつて、最も無學なものでも、此問題に就いて大問題として急いで言葉を出すのである。其時は只、出来る丈、愉快に時を過すことばかりが最早問題ではないのである。私は繰り返して言ふが、今日の人々に教育をしなければならぬ。人々は近代生活の裏面を知り悟りたいと渴望してゐるのだ。人々は指導を見つけないと思つ

てゐる。此新しいことの豫言者を見つきたいと待ちこがれてゐるのは、殊に家庭の妻たり母たるものである。彼女達は社會の案内者、忠告者を要求してゐるのである。彼女は凡てのものを信する傾向がある。數年前、我ロシヤ社會にも正しい考が缺けてゐた時に、其の企ては殆ど目的を達しなかつた。然し、今日は彼女達の考究範圍は擴大してゐる。然し、殆ど外見の立派なやうに生れから備はつてゐる凡ての講演者（何故斯う言ふかと言ふと、態度が立派だと言ふことに迷はされて、凡てのロシヤ人は、容易に犠牲者となる致命的の迷信は、抱いてゐるからである。）押出しのいゝ華やかな言葉を馳驅する凡ての演説者は、自分の氣に入つて言ふ凡てのことを聽衆に信せしめる運を持つてゐる。是の爲に、彼は「自由主義者」であると言はれる意見を見せびらかす必要のあることを付け加へておくのが正しい。然し、此觀察は殆ど無益であらう。

ある日、——ほんの近頃のことであるが——私は汽車に乗つた。私は道づれの一人が、無神論をやつてゐるのを聞くことが出来た。辯論家は世なれた重々しい技師のや

うな頭をした人であつて、一見、改宗者たらんとする病的な要求に苦しめられてゐたらしい。彼は僧院の考案から論を始めた。此僧院に就いては彼が何事も知らないと言ふことを、私は容易に確めることが出来た。彼は僧院が、僧官的命令を以て我々に臨み、國家が其等に金を贈り、其費用に備へ、換言すれば、其等を保存してゐるに違ひないと思つてゐた。僧侶は獨立的の聯合を形づくつてゐるのだと彼に言つて聞かしたら、彼は非常にびつくりするだらうと思ふ。適法的に寄食してゐるものだと思ふところから押すゝめて、彼は自由主義たる名の下に、直ちに僧院を閉ぢなければならぬと要求してゐた。此考を淺薄に敷衍して行つて、彼はおのづと絶對的の無神論になるのであつた。彼は自分の考は正しい自然な數學的の科學に其基礎をおいてゐるものだと言つた。彼は自然科學と數學に就いて馬鹿々々しいことを言つた。斯う言ふ科學からは、一事實をも生ずる例を擧げることが出来ないことは、死を以て證明することが出来るのである。凡ての人々は敬虔に彼に傾聽してゐた『私の考では、私の子供には只一つのことしか教へないつもりです。』と彼は長たらしく言つた。『其は正直になること

で、其他のことは嘲笑すると言ふことです。』彼は人道の實地練習を導く教理よりも優れたる如何なる教理をも我々は要しないと信じてゐるのである。人は言はゞ、彼のふところの中に、博愛とか恩恵とか道義など、言ふ善の土地を開く鍵が這入つてゐると信じてゐるのだ。彼に取つて、疑惑は存在してゐない。私が上に言つた辯論家の如く、彼はすばらしい成功を博したことであらう。そこには、將校や老人や貴婦人や青年がゐた。彼が汽車を下りる時に、同じく素敵に面白く話して貰つたことを彼等は又感謝した。私の室の隣客の一人で、非常な立派な優美な身なりのいゝ婦人は、今後魂とは「煙のやうなもの」としか思はないだらうと迄言つた。疑ひもなく、此人づきのいゝ技師のやうな頭をした紳士は、這入つて來たときはうけなかつた多くの尊敬を身にあつめて、汽車を降りたのであらう。斯う言ふ流儀の多くの人々が彼自身の價値に尊敬をおくと言ふことは、私を驚かせるものゝ一つである。世間は馬鹿や駄辯家のゐることにさまで驚かない。然し、此紳士は全く馬鹿ではなかつた。疑ひもなく、彼は悪い人間でも、不正直な人間でもなかつた。私は彼が寧ろ家庭での善良な父であることさへ斷言

する。只、彼は自分が取扱つた問題に就いて何事をも知らなかつた丈である。彼は自分で斯う心に獨言を言つたことではないであらうか。『我人のいゝイワン、イヅノギッチ（私はこゝで彼に洗禮を與へる。）君は息もつがずに議論をしたが、君があそこで物語つた不信な言葉は、少しも知つてはゐなかつたのだ。君が學んだ所のものを凡て忘れたと、誰よりもよく自覺してゐるのに、君は數學や自然科学をこねまわした。君が勉強した専門學は今は何處か遠くへ行つて了つてゐるのに、如何して君は未知の人々をつかまへて、講義などを始めたのだ。其等の人々のある人々は、君の馬鹿話で改宗しやうと思ふ程感化をうけたのだ。君は徹頭徹尾嘘で固め通したことは、よく知つてゐるのではないか。然るに、君は成功して誇りに思つてゐるのだ。君は自分自身に愛憎をつかした方がいゝではないか。』彼は斯く言ふ咎め立てをした方がいくらいゝか知れなかつたのだ。然し、さあ、恐らくは、彼の日常の仕事は斯う言ふつまらないことを氣にかける暇がないかも知れない。私は彼がぼんやりと後悔を感じたに相違ないと信ずる。然し、此はつまり、『反省の場合ではない』と思ひ乍ら、もう外の事柄を考へてゐ

るであらう。ロシア人に、此善良健全な羞恥の心の缺けてゐることは、私に取つて奇妙に思ふ幻象である。此無反省は我國では、一般のことであると人は言ふかも知れない。然し、斯かる國民、かゝる社會の未來をば、私が時として絶望するのは、正しくかゝる爲なのである。

明かに、ロシア人は歐洲人たり、世界の市民たり、人權を擁護する武士となるであらう。彼が本心に於て自分が言つたことゝ反對のこと、確固として信せる全く違れる人間と思つてゐるならば、甚だ悪いことである。彼が家へ歸つて困つた時は斯う叫ぶだらう。「えゝ、意見や、自由なんぞは悪魔にやつて了へ。したければ、俺を叩きのめすがいい。俺は嘲つてやる。」

あのピロゴッフ中尉が、あのことの四十年前に、大ミチャンスカヤ街で、シルレルと言ふ錠前屋に叩かれたことを、諸君は覚えてゐるか。残念なことには、ピロゴッフなぞと言ふ男は餘り多すぎて、叩き切れない程なのだ。「甚だ悪いことだ。」とピロゴッフは獨語する。「人々は何も知りやしない。」鞭うたれた此中尉は、續けさまに叩かれた

後で直ぐに、立つた氣を靜める爲めに、焼き立ての菓子を食べに行き、夜になると、高官が催うした夜會に匹敵するものゝない踊手として名を著はすと言ふ事を諸君は思はないか。君達は其を如何考へるか。彼が舞踏をしてゐながら、あざのついた痛む手足を苦しめてゐる際に、打創をつけられて徴戒されたことを忘れたと君達は思ふか。否、慥かに、彼は其を忘れないのだ。然し、彼は疑ひもなく斯う思ふだらう。「なんだ、誰れにも何にも解りつこはない。」恥づべき不運に會つてさへも、凡てのことに容易に調和せんとするロシア人の性格は、世界の如く、偉大なるものである……。

ピロゴッフ中尉は、其問題の晩、其家の娘たる——踊手の女に愛の宣言をして、公的に結婚を申し込む程、其の馬鹿々々しい慚愧の念を超越してゐることを、私に斷言する。晝の間打ちのめされて、其に對して「何にもしなかつた」人間と、婚約を結ばんとする少女の境遇は、誠に悲しむべきものである。彼女の求婚者が笞刑をうけ、鞭うたれて満足した此將校が、それでも、愛の宣言をなさうと思つたならば、どんなことが起るか。諸君は思ふか。彼女は結婚したであらうか。悲しい哉。然りだ。……世

間に愛人が打たれたことを秘密にすると云ふ條件の下にだ。

然し、人々は一般にロシヤ婦人をピロゴッフの範疇に加へることをしないかも知れないと思ふ。我女性の間に、屢々自己犠牲をすることを忘れない所の、堅實なる眞の誠實、眞の名譽の感情、眞理を求めんとする賞讃すべき趣味が、次第に認められるのである。のみならず、ロシヤ婦人は、慥に、其點に於ては、男子よりも遙かに卓越してゐるのである。彼女達は、自分の兄弟よりも、夫よりも、遙かに、虚偽に對して恐怖をば示してゐる。そして、彼女等の多くの者は、決して嘘をつくことをしない。我國に於て、婦人は、其仕事に於て、一層堅實であり、一層辛抱強いのである。彼女達は男子よりも一層眞面目に、其仕事をなさんと渴望し、彼女自身で、仕事の愛の爲其を爲すことを望み、只にそう思はれんが爲にするのではないのである。我々はロシヤ婦人から、大なる援助を期待し得るやうに思はれるのである。

トルストイと露西亞の根本問題

最近の最も重要な問題

私が此の作者の手記を發表してから一年以上になる。讀者は、私
が一種の讚美的熱情に驅られた時の外は、ロシヤ文學の一般の現象
に就いて、話すことが非常に少かつたことを認めたと相違ない。私
は文學の事柄を避けやうと思つた。然し、此態度は如何に誤つたこ
とであらう。作者たる私は、何人よりも以上に、凡ての公けにせられた事に興味を感
じてゐるのである。だが、明かに、私は作者であるので、若し、私が不幸にして餘り
賞讃しないやうな意見を發表したならば、人々は私の態度を、嫉妬から出たもの、苦
しくは個人的興味によるものと言ふだらう。

然し、今日となつては、斯う言ふ取越苦勞を脱しやうと言つてゐる。のみならず、
私は全く文學批評の上から言ふまいと思ふ。私は最早沈黙を守り切れない程、最近、

非常な著るしい眞面目な重々しいものを讀んだのである。其傑れてゐること美文家の最高程度にある藝術家の著作に於て、私は現在のロシヤの政事社會問題に對する眞の危急なる非常に重要な頁を三四發見したのである。……私はトルストイの「アンナ、カレニナ」の數頁を言ふのである。斯う言つても、私は此小説に就いて只一言云ふのみである。私はすゝぶ久しい以前、私は凡ての人々と同じく讀み始めた。始めは非常に非常に興味を呼び起した。後になつても、私は讀むのを止めることが出來ない程、非常に興味ある或る描寫は私を囚へた。然し、全體から言ふと、私の氣に入つたことは餘り多くないのである。同著者の「幼年」「少年」及び「戦争と平和」の中で、一層生々とした筆でもつて、此凡てのことを既に私は讀んでゐる氣がした。其筋は疑ひもなく變更されてゐるけれども、其は同じくロシヤの貴族の家の話である。人物、殊にヴロンスキイは、仲間の中で馬の話ばかりしか出來ない。一階級の代表者として、其人物は面白いが、斯う長つたらしくなつては、單調である。例へば、私の友の一人が言つたやうに言へば、此「制服を着た種馬」の愛は、單純に、皮肉な形で現はされべきで

あつたかも知れないと言はれた。此が滑稽でなかつたならば、殊に作者は嚴しく其人物の靈を描いて見せたのであるから、根本的に退屈なものとなつたのである。然し、急に私の凡ての反對は出來なくなつた。其女主人公が死に頻する光景（其次ぎに全快して了ふがこは、私に作者の主要な目的の一を知らしめた。此怠惰者達の營む子供らしい無味な生活の中に、永遠の生命の眞理が開けてくる。そして、凡てのことは其で明にされた。是等の無意味な無益な虚偽者達は、突然、自然法の唯一の結果から、死の法則から、人間となる、眞の人間となるのである。彼等の眼は開けた、彼等は眞理を見たのである。最後の者は最初の者となる、最初の者（ヴロンスキイ）は悟つて、恥ぢる。一度恥を知れば、彼等は比較すべからざる程いゝ人間となり、一層氣高くなるのである。我々が崇高なるものと見做す情と同じく、凡ての我々のつまらぬ恥づべき情緒は、生々した眞の前に消え失せて了ふ虚偽の外見に過ぎないことを讀者は感ずる。大小説家が著作を計畫して我々に示さんと欲するものは、こゝにあると言ふ。かゝる不變の格言をロシヤの讀者に思ひ起さしむることは、餘りに必要すぎたことであ

る。我國の多くのものは、其を忘れかけてゐるのである。我々に之を思ひ浮ばせやうと努めた此作者、いゝことをしたもので、彼の書の如何なる文句に於ても、彼は此以上偉大な疊惑的な藝術家たることを示さなかつたのである。

そして、小説は尙續いてゐる。然し、驚いたことには、其作の第六章に於て、眞に「現在に關したる」描寫、少しも技棄的ではない無理になされた意識的ではないが、彼の小説の奥底、「藝術の奥底」から發したる描寫を見出したことである。私は作者が斯くまで主人公を遠くまで發展せしめることは信じなかつたから、私はびつくりしたことを繰り返し言つておく。是がなくては小説が不完全なことは本當である。彼は生活の一隅を描いたかも知れないが、最も重大なる肝要なものを逃すやうにもなつたかも知れなかつた。……然し、私は、明瞭に意志に反するにも係らず、批評をすることゝする。……然し、私は只、そこに表はれた二人の人物の爲め、及び、作者が此二人の人物を知らしめやうとして立つた見地の爲めに、非常に重要となつた光景を諸君に示さうと思ふばかりである。

彼等二人共、舊家の貴族で、數世紀前からの地主で、昔の農奴の所有者であつた。

何故斯う言ふかと言ふと、作者は彼等を農奴解放以後に取つたからである。此農奴解放の後、ロシア貴族の社會的生活は如何なつたであらうか。作者は一部分は其問題を解決してゐる。何故と言ふに、彼が選んだ二人のタイプは、ロシア貴族から切り離された二つの種類の代表者であつたからである。其一人なるステイヴ、オブロンスキイはモスコオに住んでゐる利己的な快樂主義者で、此町のイギリス俱樂部の一員である。人々は一般に此種の人を、人の妨げをしない無邪氣な愛想のいゝ娛樂者として、又、自己の快樂の爲に暮すことを知つてゐる機智のある人として見做すのである。——彼等は屢々多くの家族を有し、自分の妻と子供に親切であるか、彼等のことを考へることとは少い。彼等は薄葉な女に、少くとも、飾着つてゐる交際的な女に、非常な激刺たる趣味を有してゐる。彼等は教育はないが、美しいもの、藝術、其他のものを愛する。そして、あらゆることを御喋りする習慣を有してゐる。

農奴の解放以來、此貴族は、直に自分が何處に行くべきかを看取する。彼は、物の

價值を定め、計算することを知つてゐる。そして、成可多くの贅澤な殘物が始終あると決論するのである。彼は後は野となれ山となれと言つてゐる。妻と子供の運命をば、彼は注意を拂つてゐなかつた。彼の残りの財産を親類の爲に、一時のしのぎはつけた。然し、如何に彼の財産が全く無くであらう、そして自分の頸に枷をつけるやうになるであらう昔なら、勝負に負けた負債や、妾にめぐむ金をやる爲に、農奴を賣ると言ふこともあつた。然し、斯う言ふ思出も、彼を少しも困らせはしなかつた。彼は凡てを忘れた。彼は貴族であつたけれども、農奴解放以後は、貴族たることを何とも思つてゐなかつた。人々の中で、彼は必要な人とか、勢力ある官吏とか、金持とかの外は知り合ひがなかつた。銀行家や鐵道工事者が勢力を有するやうになつたので、彼は直に彼等の所へ行つたのである。

彼と、其親類で友達であるレギンとの會話は、此問題に於ける此後者の人の咎め立てたことから始つてゐる。レギンは矢張田舎の地主であるが、全く違つたタイプの人である。彼は其土地を視察し、自ら其土地の利用する。オプロンスキイは其を放浪と

見做して笑ふばかりであつた。話は夏の夜の狩獵の事になつた。此狩獵者は百姓の納屋の中に休みに這入つて行かなければならなかつた。そして藁の上に横になつた。レギンの實業家に對して、其權謀術數と成金的の利益に對して輕蔑するのは、愚かな偏見から生じたものであつて、金錢を事としてゐる此等の人々は凡ての人々と同様に働いてゐるもので、實行すべき眞の道を現はしてゐるのだとオプロンスキイは證明して言はんと思ふ。

——然し、彼等の利益は、其發見した勞働と比例をしてゐない、とレギンは言ふ。

——だが、其比例と言ふのは誰が定めるのですか、(とオプロンスキイは反問する)

——私は自分の配下にゐる事務長より非常に澤山の給料を取つてゐます。然し、彼は私より一層よく事務を知つてゐるのです。……そして、君の農業開墾に於ても君が働いて取る所のものは何でせうか。——君は五千留も利益を取るのに、百姓は五十留位の金をふところに入れるのでせう。君が彼に對する關係は、私が私の事務長に對すると同じやうな場合なのです。君は其を一層正直なことと思つてゐますか。

——宜しい。(とレギンは答へる) 私も其は不正當とは感じてゐるのですが……

——さうだ、君は感じてゐる。だが、君は財産を百姓に與へないぢやありませんか
(とステパン、アルカヂエギッチは遮つて、レギンに挑んだ。)

——私は人々が其を要求もしないし、私が返へさうと思つても誰にやつていゝか解らないのでやりません。

——其を此百姓におやんなさい。彼は拒みはしますまい。

——然し、如何して私はさうしなければならぬのでせうか。

——私も知りません。然し、君が正當でないと思つてゐるぢやないですか。

——そこです。君の言ふことを全然信じてゐない爲です。私は却つて、やるべき權利を持つてゐないと思つてゐるのです。私は土地と家族に對して義務を持つてゐることを知つてゐるからです。

——宜しい。そうして君が不正當であると思つたならば、君の良心に適ふやうに行動すべきです。

——私は行動をやりませんが、消極的にです。私は他人のものに損をかけて、尙職分を果さうとは求めてゐません。

——矛盾してゐます……ねえ君、二つの中の一つです。君が現社會組織が正當であると認め、君の權利を擁護するか、若しくは、私のやうに特權を受けて、愉快に其を享受するかと言ふことを自白するのです。

——其が不正當な特權であつたならば……私は愉快に享受することは出来ません。私に取つて大切なことは、私に罪があると思はないことです。……

時事問題

彼等の會話は斯うである。どの位其が時事問題に觸れてゐるか解るだらう。そして何と言ふ際立つた純ロシア式の特徴だらう——第一に斯う言ふ考は、四十年前の歐洲に於ては全く新しいことであつた。サン、シモンやフウリエ（譯者曰、フランスの社會主義者）

は未だよく知られてゐなかつた。斯う言ふ考を知つてゐるものは、我國には五十人位しかあるまい。そして、こゝでは、地主の貴族が、突然、其う言ふ問題をば、納屋の中で、社會の全然新しい制度を悪く言つて、ある種の權能を以て話すのである。是等の貴族は、イギリス俱樂部で無駄話をし雑誌を読む非常に高い地位にゐると言ふことは實際である。……然し、教師や専門家ではない人々の間に、オプロシスキイやレピンと言ふ人物の間は、空想的社會案が話の題になると言ふ只一つの事實は、ロシア現代の精神状態の非常に新奇なる徴候である。第二の著しき特徴は次のことである。

他の者以上に、下級民に興味あるやうに思はれる新奇の考に對して、ある程度まで論じた二人の談話者の一人は、労働者の運命をよくする爲には一錢も與へず、反對に、ある場合には労働者を掠奪すると言ふ人間なることである。ステヴの如き、ステバン、アルカヂエヰッチの如き人が、其讓歩に常に同意する第一の人なることを注意し給へ。かゝる人は凡てを棄て、キリスト的階級即ち家庭を惡口しても、其が何の役にも立たなかつたのである。此話の中に、尙著るしき文章がある。『二つの中の一つ。君が社會組織を正當なるものと認め、君の權利を擁護するか、若しくは、君が私の如く特權をうけて、愉快に其を享受するかである。』此起る所のことは、ステヴに關してはゐない。彼は自分の行ひが悪く、彼は愉快の爲めに、自分のつまらない舊習を墨守するのである。彼は未だ金を持つてゐるから落ち着いてゐる。彼に金がなくなると、彼は心から下男となつて了ふのだ。其は不幸にも非常にロシア式だ。「後は野となれ山となれ」と言ふ我國に流行る喩へがある。

其の中で最も面白いことは、オプロシスキイの傍に、ステヴのタイプと同じく全く

ロシア式のありふれた貴族のタイプを、もう一つ見出したことである。此は我犬儒主義のある形を現はしてゐる。斯う言ふタイプの代表者は、彼の如く、全く諸君に、「私に取つて重要なことは、自分が罪がないと思ふことなのだ」と言ふ。彼等は犬儒的だが正直なのだ。就中、彼等の良心がさうだ。且つ、此の人間は後になつて、正義と不正義を定めんとする時に、悲惨なる危機に當つて、自分の財産を分配するチクラゾフ（譯者曰、ロシア詩人）の「ヴァラス」のやうなことをするだらう。

「神の宮居を作り終へんとして、施物を乞ひにゆく……」

レギンが寺院を作り終へんが爲に、施物を集めに行かないとしても、彼は慥かに同じやうなことを同じ熱心を以て、したに違ひない。斯う言ふ種類の人間にあつては、何よりも、自個に巨大な真理の要求を抱いてゐる。おゝ、彼等の寛大ならざることも亦大なるものである。然し、私は、彼等が文句よりも、真理に一層ひきつけられてゐることを言はんと欲する。二十年以來、彼等の如き人々は次第々々に我國に多くなつた。彼等は凡ての我社會階級に入り、凡ての政黨派に入つてゐる。人々は彼等の如き

人を、貴族にも下級民にも、僧侶にも、不信仰者にも、金持にも、貧者にも、學者にも無學者にも、老人にも少女にも、スラヴ主義者にも西歐主義にも見出すであらう。人々は恐らく、私が馬鹿々々しく誇張してゐる、正直の探索に没頭してゐる人間はそんなに我國でゐないと言ふだらう。然し、私は、斯う言ふ人々が腐散した人間、享樂家と肩を比べてゐること、ロシアの未來はかゝる人々なること、今より、彼等の如き人々が著作の中に必然現はれるものなることを斷言する。消滅するやうな運命を持つた其種の見本たる利己主義者のスチゾをば、レギンの如き新しき人間に近け乍ら、藝術家はロシア社會を象徴化するやうになる。作者が亦完全に理解してゐることは、是等の問題がロシアに新奇であつて、彼等を近よらしめつゝ、二人の此貴族は歐洲は税金を拂つてゐることである。レギンは始め、キリスト的解決と、「歴史的權利」を混同してゐるのだ。

もつとはつきり言へば、次のやうな事を想像し給へ。

スチゾの想像以上に彼を困惑せしめた會話の後で、立つて考ひ込み乍ら、レギンは

自分の氣にかゝる問題を正直に解決せんと悲しくも言へる。「さうだ。」と彼はまだ不明瞭に氣高く考へる。「オブロンスキイの昨日言つたことは尤もだ。我々は食つたり飲んだり、狩をしたりして、働かうともしない。そんなのに、貧民は常に骨を折つてゐるのだ。何故さうなのか。さうだ、スチヴは本當のことを言つた。俺は財産を貧民の間に分配して、彼等と共に働かなければならぬ。」

レギンの傍には、「實際、我々にお前さんの財産を分つて、働きに行くのはお前さんの義務だ。」と言ふ貧民がゐた。レギンの言ふことは間違つてはゐないだらう。若し我々がもつと高い見地に立つて問題を考へたならば、貧民は眞理を言ふたのであらう。然し此問題をよく呈出すると言ふ事が問題である。然らざれば、凡てはロシヤ人の心に紛亂を起すしかないのである。歐洲に於ては、生活と實行とは矛盾であれ、眞である、最初の解決を齎らすものであるが、少くとも、道徳的見地と、歴史的権利の間には最早紛糾を生せしめることがない。私はなる丈少く言葉を用ゐて、もう少しはつきりした考を言ひ表はさうと思ふ。

三

歐洲に 於ては

歐洲には封建制度と騎士道があつた。然し、千年の間、中流階級が成長し、鞏固となり、遂に騎士の後裔と戦を開き、彼等を伐つて追ひ拂つて了つた。そこで、「私のある所から去れ」と言ふ諺が勝ちを占めた。——然し、貴族に代つた中流は、人民を明かに欺いたのである。彼は人民を同胞と取り扱はずして、自分を養ふ任務のある刑人としたのである。

我がスチヴは自分の悪いことをよく知つてゐる。彼が愉快や楽しみを見出す爲にしか、自分の道を進まうとは固執しない。外國のスチヴは同じやうに物事を見はしない。彼は自分の権利を自信し、一層論理的のやうである。彼は打ち勝つて貴族と代つたので、戦ひの際なまけてゐた民衆が、彼の代りに力を得るやうになることを知つてゐる。彼自身が騎士を奪掠したやうに、民衆が自分を奪掠するやうになるのは必然だと言ふこ

とをよく知つてゐる。権利は何處にあるか。そこには史的論理の外はない。彼が敵と仲直りすることが来たならば、中流人は多くの譲歩をするだらう。彼は調和せんと努力さへもするのだ。然し、彼は敵が分配することを欲しないことを知つてゐる。彼が其代りに凡てを欲し、譲歩が出来なくなることを知つてゐる。そして、遅滞ながら、彼は何物をも譲るまいと決心する。彼は今は戦闘の身構へをするのだ。

彼の地位は恐らく絶望的であるだらう。然し、勇氣が戦ふ度に加はる程、人間の性質を供へてゐるのだ。彼は絶望はしない。彼は凡ての抵抗の方法を運用し、敵を戦ふ前に疲れさせて了ふのだ。

此に就いて、歐洲に起る所のものは之である。今が此問題の道德状態を提供する時機なることは實際である。フウリエ派カベチアン派が起つて、各派の間に、雜誌で以て猛烈な戦闘が始まるのだ。人々はある非常に高い主義に就いて戦ふ。然し、今は、下級民の指導者は、凡ての物を遠ざけてゐる。彼等は物質的戦闘を欲し、軍勢を集め、給養車を組織し、勝利を必せんと思つてゐる。『例へ洪水の如き流血の惨事をして、

勝つた後凡てを整理しやう。』然し、指導者のある者は、貧民の道德上の権利と言ふ名義で説教をする。其運動の眞の首領は、是等の理想家をば、事業を飾つたこと、非常に高い正義をば、外見に與へたことの爲に許してゐるのだ。権利を要求する指導者の中には、陰謀者がある。然し、又眞の使徒がある。此後者の人は自分の爲には何物も欲しないのだ。彼は人類の幸福の爲にのみ働く。然し、中流人は、堅固な地盤の上に陣營を布いて、彼等を待つてゐる。何人の同胞となるにも、鞭や銃で打つて押し付けやうとはしはしないと宣言する。彼等の敵は答へて、中流人が民衆の同胞となり得ることを承認せず、彼等は中流人を全然博愛から除外すると言ふ。中流人は落つべき運動をもつた何億と言ふ人を代表してゐないと言ふ。『我々は人類の幸福の爲に君との間を御終ひにするのだ』と彼等は言ふ。他の指導者は、彼等は凡ての博愛を嘲笑してゐるのだ。キリスト教は冗談だ。人類は科學的根據によつて組織されたものだと言ふ。『科學的根據は廣大な僞りに外ならぬ』と中流人は言ふ。人々は、眞のありのまま、と非常に違つてゐるものとして、人類を再現して喜んでゐる。人々は財産の権利をば

斯うも容易には手離さない。家族と自由とは一致しない。此新しき制度は、探偵によつて助力された虐政の外はない。未來の人々は、突然、彼等の意志に反して、力によつて結びつけられるのだと言ふ。——然し、指導者は、有用、必要と言ふことを先きにして、人間は破壊から救はれるが爲には、凡てを承認する心組みだと斷言する。人々は尙個人的權利、暴力によつて調和せる社會を作るの不可能と言ふことに就いて彼等に反對するだらう。考へて見れば、彼等が何んであれ道德的動機を持つてゐると證明することでは、以て彼等を人々は輕蔑するのだ。最終の結論は彼等が攻撃して來てもしつかりした足で待つてゐるから大丈夫と言ふことになると言ふ。

社會問題の歐洲人の解決は斯うである。此相對せる二つの勢力は間違つてゐる。誤謬の中に死んで了ふであらう。

我國に於て、最も困難なことは、解決すべき問題に對して、レギンの如き人間が考へ深くて不決斷なることである。然し、唯一の解決はロシアから發するものだ。そして此解決はロシア國民にのみ適應するものではない。其は全人類の關係を規定するものである。其が道德的でキリスト的であることは言ふまでもない。西歐國民は流血の慘事をした後で何百萬と言ふ首を斬つた後で、其を採用することは明かであるとしても、歐洲に於てかゝる解決を發見すること出來ないである。此解決のみが只實行し得べきものであるから、人々はさうする外はなくなるであらう。

概問題の
露西亞的
解決

狩をしたり、飲んだり、食つたり、怠けることに、時を過すことを不正當と諸君が感じたならば、そして、貧民が澤山あることを其程強く嘆くならば、諸君の財産を返納して分け與へよ。凡ての人々の爲めに、労働しに行き給へ。神の仕事に動いて熱心に力を盡したグラスのやうに行き給へ。貧民の精神を教育することを考へ給へ。然し諸君の如く凡ての人々が自分の財産を民衆に分け與へたとしても、世界のあらゆる金持の凡ての富も、大海中の一滴の水に異らぬであらう。人間が互に懷抱してゐる愛を成長せしめんと努めなければならぬのは之が爲である。その時こそ、本當の富が大きくなるであらう。金や尊い飾りに宿つてゐる富ではない。自分は人々の完全なる融合と、不幸に際しては、彼等及び其家族凡てのものが助けられべきものであると言ふ確實とより、生ずる所の富である。財産を返納するものが餘り多くないと言つてはいけない。諸君

の如く振舞はんとする人は、可成多くあるに違ひない。そして、其仕事は進むであらう。實際に於ては、大切なことは財産の分配にあるのではない。心の命することのみをなさなくてはいけないのである。心が民衆に財産を返せと命じたならば、返すがいい。凡ての人々の爲に、労働すべく命じたならば、急いで其をし給へ。然し「俺は貴族たるを欲しない。百姓の如く労働せんと欲するのだ」と言つて、農具や車を直ちに握らんとする或夢想家の如く夢想してはいけない。若しも、諸君が學者として貢献をなすことが出来ると感じたならば、大學に行くがよい。多數者の爲に、有益なりと認むる所の事をなし、宇宙的愛の爲に、活動することが肝要なのである。「單なる労働者に變形せん」とする凡ての諸君の試みは、假裝舞踏に過ぎないのである。諸君は百姓となるには餘りに複雑すぎる。寧ろ百姓をば、諸君の如き複雑になるやうに教育するやうに努め給へ。「單純化」と言ふ凡ての喜劇よりも其方がいゝのである。絶望してはいけない。陣營中の一人は軍人ではないと言つてはいけない。眞に眞理を欲する人は只一人でも、既に恐しく強いものである。無爲にして過してゐる口實を得る爲に、人

々が自分の腕を縛つて動かさないのだと、常に呼ぶある饒舌家の眞似をしてはいけな
い。眞の活動的人間は、直ちに、自分の前に、企てべき多くの仕事があるのを見て、
其をば常になさんとして見て、成功するのである。諸君は凡てのものを愛した爲に、
償はれるであらう。諸君は愛せられると言ふ望みがなくても、「諸君自身を守る爲でな
くても働かねばならぬ。何故と言ふに、諸君が働くことを欲しないならば、人々は力
で其を押し付けるだらうから」と今は人々は諸君に言ひに来なくなるのだ。ロシアに
芽生させべきものは、かゝる信念ではないのである。反對に凡ての人々は斯う叫んで
貰ひたいのだ。「我同胞よ、私は君の爲、凡ての爲に働きたいと思ふのだ。私は君に對
して、他の人々に對して、自由になりたいと思つて其をするのではない。然し、私が
君の幸福、一般の幸福に貢献することを仕合せとするからだ。私が君を愛し、君達凡
てを愛するからなのだ。」

凡ての人々が斯様に言つたならば、彼等は眞に、利害關係からのみでなくして、眞
の愛から同胞となるのである。

人々は、斯う言ふことは凡て空想だ。此問題の「ロシア的解決」は、「天國の治世」
であつて、あの世で働いて、天國でなければ實現することが出来ないものだと言ふで
あらう。天國の世になつた來たならば、スチヅは、非常に怒つて了ふだらう。然し、
眞面目に言へば、此解決には、歐洲的解決よりも、空想と言ふ分子は甚だ少いのであ
る。ロシアに於て、「グラス」の如き者又他の者を以て、我國から出た「未來人」を既に
かいま見てゐるのである。歐洲に於てのみ只、其を疑つてゐるものがあるであらう。
私は、我「未來人」に無限の信仰を抱いてゐる。今迄は、彼等は恐しく散り／＼ばらば
らになつてゐる。然し、彼等は凡て眞理を探し求めてゐるのだ。彼等がはつきり眞
理を見るに至つたならば、彼等は其爲に生命を犠牲にする覺悟をしてゐるのだ。彼等
の一人が眞の本道に這入るや否や、凡ての者は其の後に従つて、彼と共に、我「處女
地」をば開拓するであらう。只一人でも模範を與へれば、凡ての者は前に進んで行く
であらう。

そこにそんな空想的なものがあるであらうか。——諸君は、我々が今は非常に惡變

しつゝある、我々は軟弱となつて、自己自身を嘲笑してゐるのだと言ふであらう。然し、其は今日のありのまゝの我々のことを言ふのではなくして、未來の民衆のことを言ふのだ。民衆は人々が信じてゐるよりも一層純潔であつて、彼等は只教育を欲してゐるに過ぎないのである。然し、我々教養をうけたものゝ中にも、純潔な心の人はある。彼等は暴力を用ゐずして、新しきよりよき社會を作らんとし、活動せんと欲してゐるのだ。是が尊い徴候なのだ。是等の人々に只一言忠告したい。君自身に打ち勝ち給へ。新しき道に第一歩を踏み入れる前に、君自身を征服することを知り給へ。他人を改めんと欲する前に、模範を示し給へ。こゝで始めて、諸君は前に進むことが出来るであらう。——一八七七年二月一作者の手記より——

ブーシュキンと新露西亞の使命

（一八〇年六月八日に於て、
八〇年六月八日になしたる演説）

ブーシュキンは稀代の天才であつて、恐らくはロシア精神唯一の現象であるとは、

ゴーゴルの言つた所であります。私も亦、彼は豫言者的天才であることを付け加へて言ひたいのであります。

ブーシュキンは、一度我々が自己自身を自覺するやうに見えた時代、即ちベートルの大改革後約一世紀に出來したのであつて、彼の出現は我々の進むべき道を切り開くに非常に與つて力があるのであります。

我大詩人の智的活動は三期に分れて居ります。今、私は文學批評を口にしようとは思ひません。私は只彼の作の中には、我々に取つて豫言的なものゝあることを考へてゐるのであります。此三期は、各々、餘り離れた區別がないことを私は認めます。そして私の考によれば、「オニエギン」の最初が第一期に屬し、其最後が第二期に屬してゐると思ひます。其時既に彼は、生れた土地に、自分の理想を見出してゐます。

ブーシュキンは、其初めに當つて、歐洲の詩人、バルニイ、アンドレ・シュニエ、及び殊にバイロンを模倣したと言ふのが慣例となつてゐます。勿論、歐洲の詩人は、彼の天才の發達に非常なる影響を及ぼしたのは事實であつて、彼等は此影響をばブー

シュキンの死ぬ迄、與へたのでした。然し乍ら、プーシュキンの最初の詩でも、單なる模倣ではありません。彼の天才の獨得なることは、既に其處に一貫して見られるのであります。單なる模倣の作物の中に、斯様な悲みの強さ、斯様な深い自己の自覺は見られるものではありません。例へば、私が彼の創作活動の第一期とする「ツイガン」と言ふ詩を御覽なさい。彼が單に模倣したのみであれば、斯くも力強くなることは出來ぬ其熱情のみを私は言ふではありません。其詩の主人公アレコと言ふタイプの中に、既に強い深い、すぐれてロシア的思想が現はれて居つて、後に「オニエギン」の中に完全に姿を現はすやうになるのであります。「オニエギン」の中には空想の姿でなく、手に觸れ目で知る現實の姿となつて、アレコが現はれてくるやうに思はれます。此アレコと言ふタイプの中で、プーシュキンは自分の天才の特性から、民衆から恐しく遠ざかつてゐる社會に止むなく生れたロシアの歴史の受難者、故郷に迷つてゐる不幸なる放浪者たる人物を既に發見し、示してゐるのであります。斯う言ふ人間は、イロンに出てくる人物ではありません。住むべき家のない斯うしたロシアの放浪者は、

今日も尙現はれてくるもので、永久にゐなくならないものであります。ツイガンに野生の放浪生活の理想と、自然の懷に抱かれてゐる平和とを見出す爲、彼がツイガンと一所に行かぬとすれば、アレコの時代には未だ存在してゐないかも知れませんが、社會主義に彼は投じたに違ひありません。彼は常に、自己の本能の満足を求めてゐるのみならず、尙、世界的の幸福を探し求めてゐるのであります。ロシアの放浪者は、心を安める爲めには、世界の幸福を必要とするのであります。

おゝ、ロシア人の大多數は、是程其を求めては居りません。彼の中の多くのものは官吏として、收税吏として、鐵道員として、會社員として、平凡に國に仕へてゐるのみで、如何かして生活費を得たいものと心配してゐるのみであります。或る者は、高かゞ、自由主義をば、ロシア人の御人よしで節制した廣漠たる「歐洲の社會主義」に押し進めて行く丈であります。然し、其は時の問題ではありません。前者が既に閉ぢた戸で額を叩つたのに、後者がやつと騒ぎ始めたとして何になりませう。凡ての他の者が不安に感ずる爲には、若干の者が騒がされ、ばいゝのであります。アレコは未

だはつきりと自分の煩悶を言ひ現はすことを知りません。彼には凡ての物が、ぼんやりした状態にあつて、彼は只、自然に對するノスタルジイを近代社會に對する恨みを、失つて見出すことの出来ない眞理に對する涙を、幾分世界的な傾向を持つてゐたに過ぎません。彼には少しジャン、ジャック、ルーソー的なものがあつたのであります。此眞理は何から成り立つて居りませうか。是を彼は言はないでせうか、然し、心から彼は苦しんでゐるのであります。……眞理は外にあるのでせうか。歴史的な確固たる組織、明かに決定した社會的生活を有する歐洲の地にあるのでせうか。彼は眞理が自分自身にあることを知つては居りません。如何して彼は其を知りませう。彼は自分の國にあつて外國人みたやうになつて、仕事を忘れ、修養をうけてゐないのです。彼は只空中に浮んでゐる塵に過ぎないのであります。彼は其を感じて苦しんで居ります。勿論、世襲貴族と生れ、恐らく農奴を所有してゐる彼は、法律を知らない人々と共に生活しやうと言ふ空想を抱いてゐるのであります。彼は見世物にしてゐる熊を遊ばせてゐるのでした。……女、即ち詩人の言葉を借りて言へば「野生的な女」が、如何に

正しく、彼に慰藉の希望を抱かせたであらませう。彼は盲目的にゼムフィラに熱中するのであります。「さあ、何處に慰藉があるのか」と彼は言ひます。「こゝだ、自然の懷ろに、文明や法律を持たない人々の中に、幸福があるのだ。」然し、彼が野蠻な生活を始めた時に、試験をやりそこなつて、血で手を汚します。ツイガンは彼を追ひ拂つて、復讐もせず、怒りもせず、正直に、立派に斯う言ひます。

誇れる者よ、我等を去れ、

我等は野蠻なり、我等は法を持たず、

我等は苦しまず、人を罰せず。

凡て斯う言ふことは當然空想に満ちたものであります。然し、野蠻な人間と對照して「誇れる文明人」が、始めて正しく現はされてゐます。そして、我國にあつて、ブーシェキンによつて始めて現はされたものであります。

誇れる文明人が侮辱されたと信するや否や、彼は侮辱した者を意地悪く打つたり罰したりするでせう。「貴族の第十四階級」に屬してゐることを思ひ出して、彼は大き

な呼び聲をあげ、彼を苦しめた人々を制する法律をば名残惜しく思ふであります。
そして、此立派な詩が、模倣の作に過ぎないと人は言ふのです。人は既に「忌むべき
問題」の「ロシヤ的解決」をば急いでゐるのです。

「誇れる者よ、身をへり下れ。先づ第一に君の誇りに打ち勝たなければならぬ。閑居
せる人よ、身をへり下れ、君の生れた土地を耕やせ。」是が民衆による解決であります。
「真理は君の外にあるのではない。君の中にあるのである。君を君自身に服従せしめよ。
君自身を征服せよ、さすれば、君は真理を知ることが出来るであらう。真理は君の知
れる嘘偽に反抗する君自身の全努力の中にある。一度君自身に打ち勝ち征服すれば、
今迄こんな自由な身になると想像も及ばないやうに自由となるであらう。君は君の同
胞をば奴隷から解放する大きな仕事をなすであらう。君の生命はよく満たされたので
あるから、君は幸福である。そして、遂に君は民衆と其健全な真理とを知るやうにな
る。君が世界的調和にふさはしくなく、意地悪く傲慢で、努力を拂はずに生命を得
んと欲するならば、世界的調和は君に取つては、ツイガンの所にも見出されず、何處

にも見出れないであらう。』

かゝる問題は、既に、ブーシキンの詩によく含まれてゐるのであります。其は、
何等空想の分子のない明白な寫真主義である詩、ユージエヌ、オニエギンの中に、
一層明白に示されてゐるのであります。此詩の中には、ロシヤの眞生活が、非常に巧
妙に現はされて居つて、かゝる生き／＼した何物もブーシキン以前には描かれたこ
とがなく、恐らく、彼以後にもないであります。

オニエギンはペテルブルグからやつて來ます。此詩に凡ての意味を含ませるには、
彼がペテルブルグからやつてくる方がいゝのであります。彼は矢張少しアレコ式であ
ります。殊に次のやうな煩悶を描く場合には尙更さうです。

何故に我はト。ラの判事の如く、

病にかゝり倒れざりしや。

然し、其詩の始めに、彼は少しの誇りを持つてゐます。彼は世間的であるが、人生
に幻滅を感ずるには、餘りに生きた時が短いのであります。然し、既に、

隠れたる倦怠の氣高き悪魔

が彼の心に現はれ始めたのであります。

彼の祖國の中にあつてすらも、彼は追放者のやうに感じてゐます。彼は如何していか解りません。彼は自分をば、「自分の客」の如く感じてゐるのであります。

それから、煩悶に捕はれて、彼が祖國や外國にさ迷ふ時に、彼は眞面目な人間であつたけれども、外國にあつて、一層自分自身から外國人になつたやうに信するやうになりました。彼は自分の故郷を愛してゐるのですが、其に信賴することは出来ません。彼はロシヤの理想の話を聞きましたが、其を信することが出来ません。彼は、故郷の地に於ては、何事をなすも全く不可能でと言ふことしか信することが出来ないのであります。そして、其時も今日の如く少數ではありましたが、ロシヤの土地に希望を抱いてゐる人々があるのを、彼は悲しくも嘲笑するのであります。彼は單に憂鬱から、恐らくは、世界的理想を憧れる所から、^レレンスキイを殺すのであります。

タチャーナは別であります。彼女はロシヤの土地に凡ての感情を以て結びついてゐ

る女であります。彼女はオニエギンよりも一層深い精神を有して居ります。彼女は一種の氣高い本能から、眞理が何處にあるかを豫感し、其詩の終りに於て、此問題に就いて思想を述べて居ります。彼女は積極的なタイプで、消極的なものではありません。ロシヤ婦人の尊敬すべきものであります。そして、タチャーナとオニエギンの出會した所の次の有名なくさりで、詩中の凡ての思想を發揮するのは彼女としやうと詩人は思つたのであります。此が恐らくツルグチーフの「貴族の家」のリーズでなかつたとしても、我國のあらゆる文學中で、此以上美しいタイプは一人も見出すことは出来ないと云つても宜しいのであります。

……彼女はオニエギンの生活に、誤解されて這入つて來ます。こゝに、其物語の中の悲劇は起るのであります。あゝ、若しも、彼等の出會ふくさりに、チャイルド、ハロルドやバイロン卿自身で、オニエギンにタチャーナの美を知らせるやうにイギリスからやつて來たとしたならば、疑ひもなく、オニエギンは彼女の前でほれ／＼として了ふことは誰しも疑はない所であります。何故と言ふに、かゝる悲める放浪者には、

屢々、魂の卑屈な所があるからであります。然し、そんなことは起りませんでした。そして、世界の調和を探し求めてゐる人は、タチャーナに一種の説教めいたことを吐露した後で、世界的煩悶を抱いて正直に去つて了ふのです。彼は彷徨を続け、力と健康に満ちて、瀆冒の言葉を叫ぶのであります。

我は若し、我が中に生命は強し、

而して我は何をか望む、倦怠ぞ、倦怠ぞ。

タチャーナは其を理解しました。其不朽の詩句に於て、詩人は、タチャーナに取つて尙謎である不可思議な此男の家を彼女が訪れる所を現はして居ります。此詩句が文學上から見て、すばらしく美しいなぞと云々するのではありません。彼女はオニエギンの書齋に這入つて行つて、謎を説かうとします。そして、彼女は、不思議な笑みを浮べて立ち止ります。彼女は眞理を豫感して、小さい聲で言ひます。

彼は狂詩の模倣家に過ぎざりしか。

然し、彼女はさう考へたに違ひありません。彼女は謎を説いたのであります。後に

なつて、ペテルブルグで、更らに始めて會つた時、彼女は彼を全然理解してゐたのであります。宮廷の生活が彼女の上に毒の如く染み込んで、ある點までオニエギンを拒絶するやうに決せしめたのは、彼女の新しい交際社會的な考へだと斷言した人は適當でありませうか。……否、其は誤りであります。タチャーナは常にタチャーナで、トニヤで、田舎娘であります。彼女は少しも墮落した所はありません。彼女は却つて、此餘りに華か過ぎるペテルブルグの生活に苦しんでゐるのであります。彼女は交際界の婦人と言ふ役目を嫌つて居ります。此外に解釋する人は、彼女を觀賞することの出來ない人で、ブーシェキンの考を理解しない人であります。彼女は、斷然、オニエギンに斯う言ひます。

妾は他人に身をば任せたり、

而して、其人に永へに誠を盡さん。

彼女はこゝで、ロシヤ婦人の眞の感情を言ひ表はしてゐるのであります。私は彼女の宗教上の考や、結婚に就いての考を云々するものではありません。私はそんなことに

觸れやうとは思ひません。『妾は御身を愛す。』と彼女が言つたけれども、オニエギンについてゆくのを拒んだのは、歐洲の女や、あるフランスの女のやうな爲ではありません、何故と言へば、斯う言ふ女は、自分の贅澤や富を犠牲にする勇氣を缺いてゐるからであります。……否、ロシア婦人には勇氣があります。彼女はついで行くべきものだと思つたならば、ついで行くに違ひありません。然し、『彼女は他人に身を任して、其人に永久に誠をつくす』のであります。

……而して、他人の不幸の上に形づくられた幸福は、何でありませうか。諸君は、あらゆる人間をば幸福にする秘訣を發見したと言つて、其爲に、ある男が少しくだらない人間に過ぎず、シェークスピア的の所が少しもないと言つて、只一人の人でも、老人なり、夫なりを犠牲にしてもいゝと思ひますか。かゝる價を拂ふことを、諸君は人類の幸福だと思ひますか。のみならず、諸君の幸福ならしめんと欲する人々が、只一人の人間をも苦しめて、かゝる幸福をうけ入れると思ふと信じますか。考へて御覽なさい、タチャーナの如き精神の高潔な、心にあれ程ひどい苦みをうけた女が、あゝ

するより外に決心の取りやうがないではありませんか。眞のロシアの魂は、彼女の如く、斯う解決を下すのであります。『私は只一人の人でも不幸に陥れるよりも、私は只一人幸福をうけない方が増であります。私は人に犠牲になつたことを知られたくないと思ひます。けれども、私は、他人を苦しめるやうな喜びは、どんな喜びでもしたくないと思ひます。』然し、オニエギンは不幸になつたでありますか。此處で、問題は別物になります。私は、タチャーナが例へ寡婦であつた所が、オニエギンと結婚はしなかつたと思ひます。オニエギンが嘗て拒んだ婦人に、華々しい社會で再會して、彼は彼女を飾り取り圍んでゐる華美に目がくらんだと言ふことを彼女は知つてゐるのであります。彼が誤つて拒んだ此少女を、人々は讚美してゐます。オニエギンに對して君主のやうな權威を有してゐる人々がであります。

『私の理想はこれだ、』と彼は叫びました。『是が私の煩悶の終りに來た救ひだ。そして、私は凡て其を失つたのだ。幸福は斯くも間近に得られる事が出來たのに。』嘗てアレコがゼミフィラに走つたやうに、彼は、凡ての疑問の解決をば、此新奇的空想の満足に

求め乍ら、タチャーナに走るのではありません。然し、タチャーナは、久しき以前から悟つて居らなかつたでせうか。彼女は、彼が心の奥底では、新しい出来心をしか愛さないのだ、同じやうに昔の臆病なタチャーナである自分を愛してゐるのではない、と言ふことを知つてゐるのであります。彼女は、彼があのまゝの女を愛しはしない。あのやうに見える女を愛してゐるのだと言ふことを知つて居ります。彼はどんな女でも愛することが出来ないのです。若し、彼女が彼について行つたならば、彼は幻滅を感じて、翌日になると、自分の前夜の熱情を後悔するやうになるのでありませう。彼は何等奥底を持つてゐません。彼は風のまゝに持つて行かれる浮草の芽です。彼女は之を全く違つた性質の人であります。彼女が自分の生涯の幸福が失はれたと自覺した時に、彼女は尙、平和な田舎の生活の子供の時の思ひ出を浮べて居るのです。過去の思ひ出は、彼女に取つて、今は何よりも尊いのであります。彼女にこれしか残つてゐるものはないのです。そして、其が彼女を全く絶望して了ふことから救つたのであります。然し、オニエギンには何が残つてゐるでせうか。それでは、單に外見の幸福に過ぎな

いものを彼に與ふる爲に、彼女は純粹に憐憫の爲に彼について行くことが出来るでせうか。否、憐憫によつてでさへも表はすことの出来ない強い魂があります。タチャーナはオニエギンについて行くことは出来ないであります。

此詩の中に、ブーシユキンは、彼以前及び彼以後のあらゆる人々よりも一層偉大なる一般的大詩人となつて現はれて居ります。ロシヤの放浪者のタイプを我々に示し乍ら、豫言的に、來るべき我々の運命の非常に重大なることを洞察したのであります。そして、此オニエギンの相並んで、我全文學中最も美しいロシヤ婦人の姿をおいたのであります。のみならず、彼は、我民族に發見する眞の美しいロシヤ的のタイプを凡て示した第一人であります。私はもう一度文學批評を云々するのではない。其爲に、彼の天才的作物の詳細なる試験を始めるものではないことを思ひ起して頂きたいのであります。ブーシユキンの描いた立派にロシヤ式の偉大なる人物の凡ての意見を説明するには、此人物の精神的美を凡て感せしめる爲には、非歴史的のタイプに就いて、本一冊でも何にも書くことが出来ないであらうと思ひます。此タイプは存在して居る

のであります。其詩人の單なる理想化ではありません。そして、其を生せしめた民衆の精神も亦存在してゐるもので、此精神の生々した力は無限なるものであります。プーシユキンの著作至る所に、ロシア魂の中に彼の信念を發揮してゐたことを諸君は見られるのでありませう。

光輝と善の希望を抱き、

我は前面を恐れなく見凝む。

と彼自身も言つたのであります。そして、此言葉は、彼の國民的創造の全活動にあてはめることが出来るのであります。ある種類に於て、如何なるロシアの作家も、斯様に民衆と親しみを現はすことを知りませんでした。慥かに、我國の作家には、我民衆をよく觀賞したものはありません。然し、彼等をプーシユキンと比較すれば、彼の直系の一二の後繼者を除いて、彼等は民衆に就いて書いた「紳士」に外ならぬのであります。彼等の中の最も才能を有してゐるものでも、私が話しました人々の中にさへも、民衆を自分の所までひき上げさせらるゝ事を示すやうな意志、傲慢なあるものをば突

然示すのであります。プーシユキンに於ては、眞實の民衆との調和があります。民衆に對して一種の愛情、眞實の打ち融けた人の善い所があります。熊の牝を殺した百姓と熊の物語を諸君は覺へて居られるでせう。其詩には斯う言ふことがあります。

イヴンは我々の祝父なり、

我々の酒を飲み始むる時……

斯う言へば、諸君は私が何を言はんとしてゐるか悟られるのでありませう。

凡て是等の藝術の實は、來るべき藝術家の教育の爲に残されたものとして存するのであります。我々は積極的に、若しもプーシユキンが現はれなかつたならば、彼の後に現はれた能才カレントは現はれて來なかつたやうと言ふことが出來ます。彼等は少くとも斯様な力と光輝とを以て現はれることは出來なかつたのでありませう。而して、其は單に詩のことをのみ言ふのではありません。彼なくしては、ロシア天才の出現に對する我々の信念は、現はすべき形を見出すことが出來ないのであります。

私がプーシユキンの藝術的活動の第三期と呼ぶ時を深く究めてゆく時に、人々は殊

に彼の心を理解するのであります。

私はもう一度繰り返して言ひますが、斯う言ふ期別は非常に劃然たるものではないのであります。第三期のある作物は、第一期の所産の數に入れることが出来ます。何故となれば、ブーシユキンは、常に、最初から自分の中に、天才の凡ての芽生を持つてゐた完全なる有機體であるからであります。外的生活は彼に於て、既に彼の存在の深みの中に存してゐる所のものを呼び起す丈でありました。然し、此有機體は進化しつゝありまして、彼の發達の現象をば他の現象とよく分つことは困難なことでありま

す。一般に、彼の魂が殊に宇宙的人類の魂に突き進んだ多くの作物は此第三期に屬せしめることが出来ます。是等の作物の或るものは、彼の死後にしか現はれなかつたのであります。

歐洲文學には、シエークスピア、セルヴンテス、シルラーの如き者はありました。然し、是等の天才の誰が、我ブーシユキンの如き、宇宙的同情の力を有してゐたものがありませうか。彼は、斯くの如き天性をば、我民衆と明かに分つてゐたのでありま

す。彼が國民的であると言つたのは、殊にこの爲であります。歐洲の他國の人々は、國境以外から主人公を選ぶ時は、其主人公をば彼等と同國人の如く假裝せしめ、彼等流のやりかたで並べます。シエークスピアでもあります。彼の描いた伊太利人は、全くイギリス人であります。世界の凡ての國人の中で、ブーシユキンのみは、あらゆる國人の魂の堂に入つてゐる唯一人であります。彼のドン、ジャンを讀んで御覽なさい。そこに、ブーシユキンの署名がなかつたならば、其はスペインの作家の作物であると諸君は思ふでありませう。のみならず、

ある時は野蠻なる谷にさまよつひつゝ……
と言ふ詩句で始つてゐる詩の一片を取つて御覽なさい。

諸君は私に斯う言ふでありませう。其は、イギリスの新教信徒が散文で書いた面白い本の三頁に當つてゐる文學的の騰寫であると。然し、其は騰寫に過ぎないでありませうか。是等の詩の悲しい憧れのある音樂には、北方新教派の魂、同時に、鈍い神秘的な哀れな征服すべからざる魂が貫いてゐるのであります。ブーシユキンと共に、諸君

は、人類の全歴史に參與して、眼前にいろ／＼の光景を思ひ浮べるが如くなるのみならず、恰も、事實其物が再び現出したと同じやうに思ふのであります。其信徒と並んでゐる前にあつて、彼等と共に讚美歌を歌ひ、彼等と共に神秘的な憧憬の中に泣き、彼等の信する凡てのことを共に信するやうに思はれるのであります。

次に、ブーシユキンは、コロンの溢い全精神を含んでゐる詩句を書きました。そこで、昔の世の中が、イジプト時代の夜となつて復活して來ます。其人民を導いた地上の神々は後には見捨てられて、其孤獨に氣も狂はんばかりになつてゐます。

ブーシユキンは、自分の中に、驚くべき程全民衆の魂を融かしこむことが出來ました。是こそ彼に特有のものであつて、彼に我民衆の進化を洞察せしめた豫言的天才と同じく、是彼の他人の企及すべからざるものであつたのであります。彼が全然國民的詩人となるや否や、彼は我々の中にある力を悟り、此力が如何に大なる運命を導くかを豫感したのであります。彼が豫言者であると言つたのは、こゝであります。

ペートル大帝の改革は我々に取つて何を意味したでありませんか。其は我國に歐洲

の習慣、歐洲の科學發明を輸入したに過ぎないではないでせうか。其事を熟考して御覽なさい。恐らく、ペートル大帝は、其をば、巧利的の目的の爲にのみ企劃されたのでありませう。然し、後には、彼は慥かに、ロシアの廣大無邊なる未來を準備するやうに至らしめた神秘の感情に従つてなされたのであります。ロシア民衆自身も、始めは、物質的巧利的の進歩の外は認めなかつたのです。然し、民衆の爲に人々が成し遂げた努力は、彼等を遙かに遠く高く導かなければならぬことを、彼等は間もなく悟つたのです。我々は間もなく、人類の宇宙的合致の概念まで、向上したのであります。

然り、ロシアの運命は、汎歐洲的で、宇宙なものであります。眞のロシア人となることは、恐らくは、凡ての人々の同胞となること、私に言はせれば、宇宙的人間となることのみを意味してゐるのであります。スラヴ主義者と、西歐主義者との不和は、巨大なる誤解の結果に外ならぬのであります。眞のロシア人は、ロシアの運命を掛念すると同じく、歐洲の運命、全アリアン大種族の運命を掛念するものであります。若し、諸君が、ペートル大帝改革以來、我國の歴史を深く究めんと欲するならば、かゝる事

が、私一人の單なる夢想ではないことを御解りになるだらうと思ひます。我國際關係の性質、我國家の政策の性質に於て、全歐洲民族と全然一致せんとする我々の欲望を諸君は實證されるであります。ロシアが自分自身以上に、尙一層、歐洲に仕へなかつたとしたならば、二世紀以來のロシアは何をしてゐたのでありませうか。而して、其は我政治家の無智の結果とすることは出来ないのであります。歐洲民族は、我々に取つてどれ程彼等が親しいものであるか知らないであります。然り、未來の全ロシア人は、眞のロシア人となる事が歐洲のあらゆる矛盾を調和せしめる眞の土地を探すにある事を了解するであります。我同胞なるあらゆる民衆をば、同一の愛の中に融かしこんだ世界的に一致したロシア魂、最後に、キリストの聖書によつて、あらゆる人間の結合の進ばしる言葉を發すべきロシア魂は、かゝることを心掛けるのでありませう。此私の言葉は、誇張と空想によつて汚されたやうに餘りに見えるかも知れませぬ。宜しい、然し、私は、是を發言したことを後悔しては居りません。我ロシアの天才を崇敬する時、斯う言はしめた思想を、最もよく現はすことが出来た人を崇拜する

時、殊に、斯う言はなければならぬのであります。然り、「新しい言葉」を發すべき運命を與へられたのは、我々であります。そう言ふ言葉は、經濟的の光榮、科學の名譽の爲に言はれる所のものでありませうか。否、其は只、最後にあらゆる人間の博愛を捧げる爲に、言はれる所のものであります。私はブーシユキンの天才の中に其を見たのであります。我々の土地は貧弱であるかも知れませぬ。然し、「粗末な身なりをしたキリストが、此土地を祝福し乍ら通り過ぎる」のであります。キリストは槽檻の中で生れたのではありませんか。そして、ブーシユキンの魂があらゆる人間の魂と相通するものがあることを認めることが出来るのは、我々の光榮であります。若し、ブーシユキンがもつと永く生きて居つたならば、我々が今示さんとした事を凡て、歐洲の爲に明かになしたであらうと思ひます。彼は、我々をもつと蔑んで見るやうなことをしなくなる歐洲の同胞に、此傾向を説明したに違ひありません。若し、ブーシユキンが天死をしなかつたならば、我々の間に争鬭や誤解はも早跡を絶つに至つたのでありませう。神はさうしては下さいませんでした。そして、ブーシユキンは天才が全く開

きかけた時に死んだのであります。そして、彼は、自分の墓の中に、その問題の解決を
持ち去つたのであります。我々の爲すことを得る凡てのことは、其問題を解決せんと
努むることでありませう。

手紙 二つ

兄 ミハエルへ

一八五四年七月三十日 セミバラチンスクにて

親しき兄上よ、私はあなたに手紙を書かなくなつてからもう二ヶ月になります。私
は書く事が出来ませんでした。さうすることが不可能でした。然し、あなたは、何故
沈黙を守つて居られるのですか、どうか仰つて下さい。私はあなたに幾通手紙を上げ
たか知れませんが。然し、あなたは一月に下すつた手紙の外に、只一通最初のものにし
か御返事を下さいませでした。此御返事、即ちあなたの名第二の手紙は、四月に御
書きになつたものですが、私は六月の始めに其を受け取りました。そして私はあなた
に未だ御返事を書きませんが、兄上よ、私は断言しますが、今まで殆ど暇がなかつたの
です。遂々、少しの暇が見付かつたとしても、いつも書けるやうになるまで待つて、
もつと工合のいゝ時まで延ばしてゐたのです。何故と言ふに、私はそゝつかしく取り

忙しいで手紙を書くことを欲しないからです。今私のしてゐる仕事はどんなものであるか、あなたは慥かに御承知の筈で、又、多分御推察なすつて下さるだらうと思ひます。演習、旅團や師團の指揮官の檢閲、是等の檢閲に對する準備。私は此處に着いたのは三月でした。私は隊に勤務があらうなどは殆ど存じませんでした。けれども、七月に他の人々と同じやうに檢閲をうけました。私は他の人々と同じやうに物事を覺えました。如何に是事が私を疲らせ、此爲に如何なる價を拂つたかは、言ふまでもありません。然し、神よ榮あれ、人々は私に満足してくれてゐます。全く此様な事を言つても、あなたには別に面白くもないこととせうが、少くとも、私が忙しくて他のことをすることが出来なかつたこと又はあなたは知つて下さるでせう。斯う筆で書いても、手紙では何にも證明することは出来ません。こんなことは全くあなたに不思議に見えるでせうけれど、軍人となることは遊び事ではないこと、いろんな勤務を持つてゐる軍人の生活は、私のやうにこんな健康、こんな不熟練な人間と言ふよりも、寧ろ、其仕事をこんな知らない人間に取つては餘り樂なものぢやないと言ふことを、あなた

は理解して下さると思ひます。是に熟練するには、非常な骨折を要します。私は不平をこぼしてゐるわけではありません。是は私の十字架です。私は其をうける價值があるのです。私はあなたが少くとも五六行の手紙でも書いて下さるやうにする爲に、斯う言ふのです。あなたの御手紙を頂かなければ、私の生活は非常に苦痛なのです。人が外に手紙を書かずに、其人に手紙をやる度毎に返事の來るのを待つてゐたとして、其手紙の來ない間が殆ど三月にもなると言ふことを想像して御覽なさい。如何して是に堪へ忍ぶことが出来ませうか。あなたから來る手紙が私に取つて如何に重要なものであるか。あなたは御存知です。私達は人の訪問を當てにするやうに、私達の手紙をも當てにしなければならぬのでせうか。もう御會ひしなくなつてから随分長くなります。そして、もう手紙を書かなくなつてからも随分長くなるのです。私は遂に妹のプランカや井エロツチカの手紙を受取りました。彼女達は天使です。彼女達が言つてゐるやうに、彼女達が私を愛してくれることは慥かだと思ひます。プランカは非常に物優しく書いてよこしました。彼女の魂の凡てが、此面白い手紙の中に躍動してゐます。私

は大急ぎで彼女達に返事をやらうと思ひましたが、もう三通目の手紙が來ても、私は未だ返事を延ばしてゐるのです。私は非常に忙しいので、少しばかり書いた手紙を送りたくはありません。私は彼女達に如何に愛情と注意を拂つてゐるか現はすすべがありません。主よ、彼女達を祝福し給はんことを。

あなたはもう私の重なる仕事を御承知になりました。本當に言へば、私は勤務の外に何にも仕事がありません。外部の事件もないし、生活の悩みもなく、これと言つて出來事ありません。然し、魂や心や精神に起つてゐること——燕麥と同じく芽を吹き、實のり、しばみ、再び芽を吹いてゐる所のものは、紙の端なんかで言はるべきものでもないし、語らるべきものでもありません。私は此處で孤獨に生活してゐます。私はいつもの如く隠れてゐます。其上に、五年間も私は監視の下にあつたのです。只一人であると言ふことは、私に取つて時に最も大なる樂みです。概して懲治監は私の中の多くのものを破壊し、又、多くの他の物を物を解化しました。例へば、私が病氣になつたことは既にあなたに申し上げました。癲癇に似た不思議な發作です。然し、其

は癲癇ではありません。私は他日詳しく申し上げます。

それから、私はベテルブルグにゐた最後の年のやうに憂鬱で疑ひ深くなつてゐると御想像はなさらないで下さい。すつかり過ぎ去つて了つた事です。それに私達を導くのは神様ですから。弟のニコラスから可愛い手紙を有難う。私は彼に返事をやりたいとは思つてゐたのです。然し、彼がもう少し待つて、哀れな不幸者の私を許してくれんことを願ひます。彼が或る物を慥かに思つてくれること、私の心に親しきものとなることを祈ります。私は最も眞實な情で、彼のことを考へてゐるのです。私の代りにどうぞ彼を接吻し、彼に宜しく御傳言下さい。又、子供達をも接吻して下さい。私からエミリー、フエオドロヴナに宜しく。あなたが捕はれてゐた間、彼女が只一人で暮したあの二ヶ月のこと、千八百四十九年のことを、私は時々思つて恐怖を感じます。あの人は御丈夫ですか、今御合わせですか。徴治監で私は過去や未來のことを澤山考へました。殊にあなたのことを考へました。ある思ひ出は私に痛みを與へ、苦みを與へました。然し、私は此思ひ出を追ひのけやうとはしません。其苦み丈でも私には快

と思はれません。

妹サアシャに宜しく。彼女に接吻して、私の代りにお祝を述べ、何か氣に入るやうなことを言つて下さい。先づ、いゝやうに私の話をしてやつて下さい。私の代りに非常な幸福をうけるやうに祈つて下さい。

兄上、あなたは金のことを言つて、私が必要ではないかと尋ねて下さいました。然し、あなたは私の境遇を御存じです。若し、送つて下さることが出来るなら送つて下さい。何故と言つて、あなたは私の只一つて希望です。私はあなたの外には誰も當てにしてはゐません。

兄上、お別れです。あなた御自身のことをもつと澤山書いて下さい。あなたの御健康は如何か、子供はどんなに育つたかを殊に書いて下さい。さよなら、これで手紙を終わります。私は澤山手紙を書かねばなりません。五年間も相會はずに、手紙の中に生活してゐると言ふことは辛いことです。これから、私はあなたに澤山手紙を頻繁に書きます。然し、あなたの方でも早速御返事を下さい。さようなら、また書きます。

アポロン、マイコフへ

一八〇年三月二十五日 ドレンスデンにて

善良にして尊敬すべきアポロン、ニコライギツチよ、始終あなたに手紙を書かう書かうと思ひ乍ら、返事を書くのを延ばしてゐたことを許して下さい。然し、其は第一に私の仕事の爲で、第二には私の健康の爲でした。私は神経病となつたのです。其は私の孤獨から來たのです。私は自分の健康に就いて心配した。私の心臓は不規則に脈をうつてゐます。そして眠ることが出来ません。私は其で醫者の所へ行きました。有名なプロフェツサアですが、私をすつかり診察して言ひました。「何でもありません、神経です。然し、神経が非常に亂れてゐます。ドレスデン以外の何處かへ行つて夏をお過しになさらないといけません。海に海水浴をしにいらつしやるのもいゝでせう。」と其は私の妻に取つてもいゝとなんです。また、田舎の空氣を呼吸しに行く程いゝこととはありません。此事に就いてあなた手紙に書いてくれた事は純粹の眞理、眞理中の眞理です。然し、アポロン、ニコライギツチ、あなたは、如何して私は歸ることが出

來ないか、外國を去ることが出來ないか、御存知ではありませんか。私が歸ると直ぐ負債の爲に牢獄に投せらるゝのをあなたには快しとするのですか。ある時が來るまで、歸國と言ふことを考へるのは全く不可能です。あなたは私が悲觀してゐない、ロシアに歸ることを心から望んでゐないと思ひですか。私の妻は如何に悲觀してゐるでせう。妻が斯く悲しんでゐるのを見るのは私に取つて氣持がいゝとあなたは思ひますか。それから、私は利益の點から見て私の仕事は今日よりも三倍もうまく進むと言ふことをいろんな事實から全然信じてゐます。親愛なる友よ、其事に就いて、私の考へてゐることをすつかり話して了はうと思ひます。私はあなたに誓つて言ふが、私はそんな事は考へない、一生涯、もう負債をしなくても私は必ず負債の爲に牢獄に入れられるのです。年月が經つて、私は放免せられるでせう。然し昔なら、(五年以前なら)私はさうしてもし、今は——はつきり解つてゐます——其は全く出來ない相談です。私の健康を以てしては、牢獄の地に六ヶ月も耐へることは出來ないでせう。殊にさうすれば仕事は出來ないでせう。然し、私は啓發すべき多くの問題を持つてゐます。こゝの私しの

仕事に就いて、あなたは金言を言つた。實際私が後れてゐるのは、時代の見地からではなく、我國に起る所の知識から見ていす。(私は其をあなたよりよく知つてゐる。何故と言ふに、毎日私は三つのロシア新聞を最後の行まで讀み、二つの雑誌を受取つてゐるから)然し、私は生活の生きた流から遠のいてゐます。概念から遠ざかつてゐるのではなく、其本體からです。如何に其は藝術的の仕事に關係することとせう。凡て其は本當です。けれども、如何しやうもありません。私の債權者と和解し、一年の猶豫を與へてくれることを彼等に願ひ、其時に凡てを支拂ふことにしやうか。彼等は同意してくれてせうか。半分支拂つたら、彼等は多分一年猶豫してくれるでせう。私は其事を夜も晝も考へてゐます。三千留拂つても彼等は多分猶豫してくれるでせう。然し、彼等と交渉することさへも、困難です。彼等がペテルブルグに居るか如何かは誰も知りません。皆ゐてくれなければなりません。そうでなければ方法がありません。つまり、今の所で、催促の烈しい借金、即ち四千留の證書があるに相違ないと思ひます。そこで、償還すべき金二千留と、こゝを立つてペテルブルグに歸る爲の一千留な

ければなりません。そこで私に必要なのは三千留となる譯です。何處で其を得ることが出来やう。然し、信じて下さい、それで私がペテルブルグを去つたとしても、二年間の中にすつかり支拂ふつもりです。然し、私が去つたのは、ペチャトキンが私を追跡し、人が其を私に豫め報らせてくれたからです。あなたは私が如何すればいいと思ひますか。やつと結婚したばかりなのに、私は牢獄には入るのですか。私はそんなことに堪へることは出来ないのです。私は飛び出したのです。——これですつかりです。

それで、ある事が成り立つてから、今年の夏其事を眞面目に考へやうと思ひます。今、私はルスキイ、并エストニク誌の爲に仕事をしてゐます。私は彼等に金を借りてゐます。「永久の良人」をザリア誌にやつたので、私はルスキイ、并エストニク誌と面して同じやうな境遇に陥りました。私は彼等の爲に書いてゐるものを如何しても完結させなければなりません。(譯者曰、これは彼の傑作「悪黨」のことを言へるなり) 私は其を彼等にしつかりと約束したので、文學に於ては、私は正直な人間です。私が書いてゐるのは、傾向的のもので、私は非常な熱心を以て自分の考へを表はしたいと

思ひます。(虚無主義者と西歐主義者が私は保守主義者であると叫んでゐるのは是が爲です。)然し、そんなことは頓着しない。私は考へてゐることを最後の言葉まで言はう。そして、あなたは私がどれ程苦しんでゐるか御承知ですか。私はこれがいい、か悪いにか全く決定することが出来ません。ある時は私は此が非常に成功して、再版には金を取ることが出来るやうに思はれますが、又ある時は、全然不成功に終るやうに思はれます。然し、平凡な成功を得るよりか、全々不成功に陥つた方が宜しい。あなたが、「永久の良人」を見て、「想像の努力」を注意して下すつたことは、私の心を粉碎してしまひました。如何に其は私に苦痛を與へたことでせう。然し神の恵みを望む。成功をあてにしないでは、熱心に働くことが出来ません。私は熱心に働いてゐます。それで、私は希望を持つてゐるのです。

然し、あなたが私に示してくれた好意をステロスキイ(譯者曰、彼の債權者の一人なり)其他の者を訪問して下つたことを私は未だお禮を述べませんでした。そうしてくれて、あなたはどれ丈のことを私の爲にしてくれたか自分で思ひはなさるまい。あ

あなたは私に心の平和を與へてくれた。私の傷をいやしてくれたのです。あなたに、(あなたにのみ只) 私は後で凡てを告白しやうと思ひます。ボオル(譯者曰、彼の繼子のこと)が私を欺いたと私は思つてゐます。如何に私は苦しんだか、如何に私は彼の爲に祈つたでせう。終に、あなたの御手紙で私の疑はすつかり晴れました。彼は輕卒な子供にすぎません。彼は善良で正直です。繰り返へして言ふが、あなたは私の心の傷を癒してくれました。ステロスキイなんぞのことは如何なつても構ひません。私はそれで或る程度までは満足してさへゐるのです。此する者と係はり合つたことは非常に苦しいのです。

然し、私は今は恐しい境遇にゐるのです。(Mister nieowber) 一錢もありません。私に金が出来るまで秋まで生活しなくてはなりません。ルスキイ、并エストニク社に請求することは殆ど不可能です。第一、人々は其を拒むでせうし、第二は際限もなく前借することになります。私は彼等から慥かに金は受け取れるのですが、其は只秋になります。然し、其時は非常な金額を受け取ります。今私があなたにどんな事を書い

てゐるか慥に知つてゐます。然し秋まで生活する金がないのです。あなたは私がこゝで消費してゐる、贅澤して暮してゐると思つてゐます。八ヶ月前私がドレスデンに着いた時から、あなたはさう思つてゐるのですか。私は殆ど月百ターレルで『永久の良人』で生活してゐたのです。然し、お産があつて、手當をしなければなりません。其で高くついたので、其爲に私は負債を契約して今日まで借金してゐるのです。一ヶ月前ニコラス、ストラホフがザリア誌に寄稿するやうに私にはつきり申込んで來ました。明年に私がカシユビレフに小説を送ると私は返事は出しました。然し、直ぐに五百留送り、百留づゝ五ヶ月間送り、すつかりで千留になるやうにとの條件です。私に取つて其は多くではありません。カシユビレフはステブニツキイに一年の前借で千五百留ばかりやりました。(前借をやらない雑誌を發行することは全く不可能です。何故と言ふに、さうすれば作者を凡て失つて了ひますから。)ニコラス、ニコライ并ツチはカシユビレフが承諾したこと、四月に金を送ること、然し、今年の秋に私の作を送らねばならぬと答へて來ました。私は今年中には不可能だと返事しました。それに

カシエビレフ自身は私に何とも言つて来ません。私は彼等の決定的の返事を待つてゐます。私がもう一度ルスキイ、并エストニク誌と契約したならば、私の將來の小説は永久にルスキイ、并エスト社に屬して了ふと言ふことを思つてもください。此度ルスキイ、并エスト誌に書いてゐるのは、屹度三ヶ月で終るでせう。それから一ヶ月間休息した後に、私はザリア誌の爲に働き始めます。私が仕事をしなくなつてから一年半にもなる。私は、書きたいと言ふノスタルジイを感じてゐます。(私は「永久の良人」は算へない。)ルスキイ、并エストに書いてゐるのは、私を澤山は疲らせない。それ所か却つていゝものを約束します。私はうまく書かうと思つてゐます。ザリア誌に書かうとするものは二年前から私の頭腦に熟してゐたものです。其は既にあなたに話したと同じ考へです。

此は私の最後の小説となるでせう。其は殆ど「戦争と平和」位の大きさとなるでせう。あなたは其思想を賞めるでせう。——若しも私が、我々の古い會話のことを思つたならば。此小説は五つの大篇から成り立つてゐるのです。(各十五綴です。)二年前か

ら凡ての計畫は熟してゐました。各篇は全くきり離れて居つて、別々に賣ることが出来るのです。私はカシエビレフに第一篇をやると定めます。其は事件がまた一八四〇年頃に起ることになります。(全作の題は「大罪人の一生」と言ふのです。然し、各篇は別々の題を取ることになります。)(譯者曰、此篇は後の「カラマゾフの兄弟」となりて表はれたり。然れども、此大計畫は彼の死したる爲未完了にて終れり)全部を通じて導かれたる主要の問題は、私が全生涯有意識的にも無意識的にも苦しんだ同じものです。即ち、神の存在のことです。主人公は其生活中或は無神論者となり、或は信仰家となり、或は狂信者となり、宗派論者となり、又、更に無神論者となるのです。第二篇は全部僧院で起ることになります。私は凡ての希望を此第二篇におきます。人々は私が駄作の外は書けぬだらうと言ふかも知れない。アポロン、ニコライ并ツチ、あなたにのみ私は告白する。私は此第二篇で主要人物としてチホン、ザドンスキイを表現せんと思ふのです。勿論、他の名で。然し、其は同じく僧院の中に引込んで生活してゐる僧正です。罪惡の共犯人なる十三歳の子供、利巧で墮落してゐる子供、(私は

此タイプを知つてゐる)が、勉強する爲に、我々の知識階級の親によつて僧院の中に閉ぢこめられる。此虚無主義の子供の小さい狼がチホンに會ふ。(あなたはチホンの性格と人物とを熟知してゐます。)私はチャアダエフを勿論他の名で此同じ僧院の中におく。如何して、チャアダエフが僧院の中で一年間暮すことが出来なかつたか。彼の最初の論文の爲に、彼は毎週醫者に試験されたのであるが、此論文を書いてから、外國で、例へば佛蘭西語で本を出版せすにはゐられなかつたと私達には思はれます。——此場合に、人々が彼を一年間僧院に送ると言ふことは有り得べきことでありませう。チャアダエフは例へばベリンスキイやグラノフスキイやブウシキユキンからさへも訪問をうけることになります。(何故と言つて、私か想像してゐるのはチャアダエフではなくて自分の小説の爲に彼のタイプを取つたのですから。)此僧院の中で、人々はプロシヤ主義のボオルやゴルボフやバルフェニ僧に會ふことになります。(私は此人々を見知つてゐます。私は子供の時からロシヤの僧院を知つてゐます。)然し、特に、そこにはチホンと若い子供とがゐるのです。どうぞ、後生ですから第二篇の筋が何であるか人に言

はないで下さい。私は自分が計畫してゐる筋を誰にも前には決して言はないのです。其は私を苦しめます。あなたから告白するのです。其は他人に對して何等價値のあることではないでせうが、私には尊いことなのです。それで、チホンのことは言はな

いで下さい。私はストラホフに僧院のことは言つたが、チホンのことは言ひません。私は大きな眞面目な聖い人物をうまく創造するか知れません。其はコスタンダオグラフィでもありません、オプロオモフの中の、(名前は忘れましたが)獨逸人でもありません。又、ロブコフやラクメトフと言ふ輩でもありません。彼は眞實の人物です、私は長い前から心の中に楽しく抱いてゐた眞のチホンを再現するしか何にも創造することは出来ません。若しも其が成功すれば、私は此を重要な作物と見做しませう。それで、人には言はないで下さい。然し、此小説の第二篇を書く爲、即ち僧院を描く爲に、私はロシヤに居らなければなりません。あゝ、それがうまく行けばいいが。第一篇は我主人公の少年時代です。勿論、描くのは子供達のことではありません。そこには物語があります。外國で幸ひにも其を書くことが出来るから、私は其をザリア誌にのせも

のです。彼等は私を拒むでせうか。それに一千留は大した額ではありません。彼等は
何と思つてゐるだらう。こんな風にしてゐれば、いゝ機会がなくなつて了ふ。其上、
此は彼等に關係してゐるのです。昨日私はストラホフに手紙を書きました。彼の決定
的の決心を私に早速報らしてくれるやうに頼みました。さうでなければ、時機を失せ
ずに、私は他のことを企てねばなりません。ルスキイ、并エストニクに言つてやつた
としても、時機は斯うして過ぎて了ふでせう。——せめて彼等がザリアの返事を遅ら
せてくれなければいゝが。何故と言ふに、私は小説を全部書き上げるには充分六年間
要すると思ひます。私の爲にあなたが一言ザリアに言つて下さることが出来れば、言
つて下さい。何故と言つて、今ルスキイ、并エストニク社に話を持ち出すのは非常に
困難ですから。三ヶ月過ぎれば別問題ですが。私は自分でザリア誌の爲に働きたいの
です。彼等の傾向は最も私に適してゐるものです。幾分か少し遠慮して言つても全く
其通りです。さあ、彼等は如何に思つてゐるでせう。私をせつばつまつた所まで押し
つけたのは私の貧困です。さうでなければ、申込をするに取り亂したりしません。い

ゝですが、私が一雑誌と關係するや否や、彼等は其を書き終るやうに私を急がせます。
彼等は最も短い期間で用意するやうに直ちに言ひます。然し、私は時期に煩はされる
よりか死んだ方がましです。ルスキイ、并エストニク社のみは只一人私を困らせま
せん。何と言ふいゝ人達でせう。

親愛なるアポロン、ニコライ并ツチ、何處からあなたはヤノフスキイに關する考を
引き出して來ましたか言つて下さい。私は其事を一度も一瞬間も考へませんでした。

あなたの手紙で其を読んで、私は非常に驚きました。それに、私は此事に就いてヤノ
スキイの話をすつかり知つてゐません。こんなやうな何かは彼に起つたのですか。

虚無主義に就いては何も言ふことはありません。ロシヤの土地から根こぎにされ
た此上つつらの卵は終には腐つて了ふから待つて、御覧なさい。此卑しい邪道の青年
中の多くは遂に純粹に祖國に忠實なるロシア人となるだらうと私は思ひ浮べました。
その時、他の者は腐つて了ふのだ。終には、彼等は中氣にかゝつたやうにまた沈黙し
て了ふでせう。然し、彼等は何と言ふ醜いでせう。

アンナ、イヴノヅナの考は非常にアンナグリゴリエヅナ（譯者曰、彼の第二の妻なり）を感動させました。我親愛の妻は野心家で傲慢です。然し、私が彼女と一所になつて如何に幸福であるかあなたが知つて下さつたら。其は只不幸です、其爲に未だ歸ることが出来ないのです。然し、それでも、多分私達は歸ることが出来るでせうか。リュバ（譯者曰、彼の子なり）は齒を悪くして苦しんでゐます。然し、彼女は非常に丈夫です。あなたは此子供を見てびつくりするでせう。然し、アンナ、グリゴリエヅナの母のアンナ、ニコライヅナがゐなかつたら、私達のリュバは死んでゐたでせう。彼女がゐなければ、私達は失はれて了ひます。

あなたにきゝたいことは何と言ふ澤山あるでせう。然し、また他日にします。私はすつかり忘れないで下さい。私を捨てないで下さい。何故と言つて、私はあなたの永久の誠實なものですから。

アンナはアンナ、イヴノヅナと同様あなたに宜しくとのことです。私はアンナ、イ

ヅノヅナに凡ての尊敬を捧げます。彼女がアンナに言つて下さつたい、御意見を心から私に感謝します。

時に、一ヶ月前、カシユビレフは私に四百留送つて来て、五十留から百留の額があるやうに付け加へて言つて来ました。然し、彼は未だ其を送つてくれません。若し、本當に少し残額があれば、何卒彼が送つてくれるやうに、少しほのめかして下さい。私に取つて五十留は非常に非常に大した額です。

ストラホフの批評はあなたの氣に入りましたか。私は其を非常にいゝと思つてゐます。

附

錄

弱

き

心

(アルペリン、カマンスキイ譯より)

同じ下宿の同じ屋根の下に、アルカアド、イヴノギッチ、ネフエドギッチとヴァシャ、シムコフと言ふ役所の同僚の二人の官吏が住んでゐた。

作者は何故此一人の主人公の名前を凡て並べて乍ら、もう一人の他の主人公の名は略稱だけ擧げたか、理由を説明する必要を感じるが、然し、さうするには、先づ、此等の人物の階級や年齢や社會的位置や職務や性格などを話さなければならぬ。多くの作家はこんなやり方で物語を始めるけれども、此話の作者は其に似せない爲、(多分人々はこんなことをする作者の傲慢なことや据傲なことを非難するだらうが)やつた動作から始めることにした。

ある晩、新年の前夜であつたが、六時頃、シムコフは宿へ歸つて來た。アルカアド

イヴノギッチは床についてゐたが、眼を覺まして、眼を半ば見開いて、友の様子を眺めると、友は立派ななりをして、燕尾服を着、垢のつかない眞白なシャツを着てゐるのを認めた。彼が驚いたのは當然のことであつた。

「こん變ななりをして、彼は一體何處へ行つたのだらう。それに、彼は家に夕飯もしなかつた」とネフェドギッチは考へた。

シムコフは蠟燭に火を點じた。アルカアド、イヴノギッチは急に自分呼び起さうとするに違ひないと直ぐに思った。實際、ヴァシヤは二度咳をしたり、室をぐる／＼二度廻つたり、又、全く偶然にしたやうに、煙草をつめやうと思つたパイプを落したりした。アルカアド、イヴノギッチは噴き出した。

「おい、ヴァシヤ、意地悪いことをするなよ」と彼は言つた。

「君は眠つてゐたのぢやないのか、アルカアシ」

「僕はそんなことはよく覺えてゐない。でも、眠つてゐたのぢやないと思ふ。」

「あゝ、アルカアシ、お早やう。君、おい、兄弟、つてば。僕がこれから君にお話し

やうと思ふことを知らないだらう。」

「知らないよ、ちつとも。さあ、こつちへ来いよ。」

ヴァシヤは此招ぎを實は待つてゐたのだ。彼は直ぐに近いて來た、アルカアド、イヴノギッチが悪戯をすることなどは氣になかつた。アルカアドは忽ち彼の兩手を捉へて彼の身體を仰向けにし、自分の下に投げ倒して、よく人々の言ふやうに、此犠牲の人間の押しつぶしを始めた。其は大笑ひするやうな冗談であつたのである。

「そら、この通りだよ、この通りだよ」と彼は叫んだ。

「アルカアシ、アルカアシ、つたら。何をするんだ。離してくれ、どうぞ、離してくれ。着物が臺なしになつて了ふぢやないか。」

「なあに、構ふもんか。ぢや、如何して燕尾服なんか着てゐるんだ。何故そんな馬鹿なことをしたんだい。さあ、話すんだよ。何處へ行つた？ 何處で飯を食べた？」

「アルカアシ、後生だから、離してくれ。」

「何處で飯を食べた？」

「だから、今話さうとしてゐるんぢやないか。」

「ぢやあ、話せよ。」

「先づ離さなくちや駄目だよ。」

「いゝや、話すまでは離すもんか。」

「おい、アルカアシキ、其ぢや如何したつて駄目だよ。」とワアシヤは友の硬い足の下になつて藻掻き乍ら叫んだ。「其れは斯う言ふ事だ……」

「如何言ふこと？」

「ぢやんとしなくちや、こんな様子をしては話せない事だ。駄目だよ。こんなことをしてゐては馬鹿々々しくなつて了ふよ。此話が決して馬鹿々々しい事柄ぢやないんだから尙更だよ。そして、其は非常に重大なことなんだよ。」

「よく重大だ〜と言ふ男だな。作り物なんだらう。僕が可笑しくなるやうに話すんだ。眞面目臭つたことなんか聞かうとは思はない。友達甲斐がない。えゝ、友達甲斐がないと言ふもんだらう。」

「アルカアシヤ、其では如何しても駄目だよ。」

「僕も聞かんよ。」

「それぢや、アルカアシヤ」とワアシヤは床の中に眞直になつて、出来る丈言葉に重みを添へやうと努め乍ら言つた。「いゝよ、話すよ。」

「ぢやあ話し給へ。」

「いゝかい。僕は今婚約をして來たのだ。」

アルカアド、イヴノギチは物も言はず、ワアシヤを子供のやうに腕の中にかゝへた。彼の友は小男ではなく、却つて幸にも丈高く疲せ細つた男であつたけれども、彼は乳母のするやうに、彼をゆすぶり乍ら、室の隅から隅へと抱いて歩き出した。

「おい、許嫁君、僕は君におべゝを着せて上げるよ。」

然し、ワアシヤが彼の腕の中におつとして一言も言はずにゐるのを見ると、彼は餘り冗談が過ぎたと思つた。彼は彼を室の眞中においた。そして、友情のある眞實な態度で、彼の兩方の頬を接吻した。

「怒つてゐるんぢやないのかい。ヴァシヤ。」

「そんなことはない。」

「ねえ、怒つちやいけないよ、今日は年の新まる前の日だ。」

「いゝよ、怒つてなんかゐはしない。でも、如何して君はさう氣狂じみて軽々しいんだらう。僕は幾度も繰返して言つたぢやないか、アルカアシヤ、其は誓つて意地悪るでも何でもないんだ。」

「いゝよ、然し、怒つちやいけない。」

「勿論、怒るなんてことはあるもんか。只君の言ふことが悲しくなつたんだよ、ねえ解つたかい。」

「悲しくなつたつて？ 如何して？」

「僕は親友と思つて、自分の心持も現はしたし、此幸福も話したい氣にいつばいになつて君の方へ行つたんだ。」

「幸福つて何だ。如何して君は其を僕に話さないのだ。」

「だつて、僕は約婚したのだよ、」とヴァシヤは心持を悪くして始め乍ら、不氣嫌に言つた。

「君が、君が、結婚するつて？ 冗談ぢやない、」とアルカアド、イヴノギッチは力いつばいに叫び出した。「いや、いや、そんなことは有り得べからざることだ。……然し、此は如何したもんだ。彼は何と言ふ様子をしてゐるだらう。然も眼に涙さへ浮べて。ヴァシヤ、おい、ヴァシヤ、それぢや其は本當かい。」

彼は彼を腕に抱きしめた。

「そんなことをして、僕を厭がらせるばかりだと言ふことは解つてるぢやないか、」とヴァシヤは言つた。「僕は君が親友だと思つてゐる。そこで、君に此幸福を打明けやうと喜んで夢中になつて君の方へ行つた。すると、此喜びや夢中になつてゐることを、床の中で争ひ乍ら威嚴も何もなくて了つて話さなければならなかつた。……ねえ、解つたかい、アルカアシヤ、」とヴァシヤは微笑をして續けた。「そんなことをすると、僕を滑稽にして了ふと思つたんだよ。それに、僕の威嚴が如何斯うと言ふのばかりが問題

ぢやない。僕は斯う言ふ事柄を滑稽化して堪らない……僕がこんな變な風をしてゐるのに、君は彼女の名前を聞かなければならない筈だ。それで、僕は誓つて言ふが、君が僕を殺すとも返事をしたくないと思つた。」

「だつて、ヴァシヤ、何故早くそう言はなかつたんだ。そう言ふ事が、直ぐに解れば、僕だつてこんな馬鹿げた事はしやしない」とアルカアド、イヴノギッチは眞面目に後悔して言つた。

「よし、よし、これでお終ひにしよう。もうそんなことは考へるのは止めやう。……それに、如何してそれをこんなに氣にしたか君だつてよく知つてゐるのだ。僕が人がいゝからだ。僕が君を愛し、君が僕と一所に喜んでくれるやうに、いろんなことをすつかり君に話したいと思つたからだ。……ねえ、アルカアシヤ、僕は君がゐなければ、結婚もしまい、生きてもゐまいと思ふ程、非常に君を愛してゐるんだ。」

アルカアド、イヴノギッチは非常に感じた。彼はヴァシヤの言ふことを聞き乍ら、泣いたり笑つたり一所にした。ヴァシヤも同じだつた。彼等は再びお互に腕の中に飛びついて、凡てを忘れて了つた。

「では、如何してそうなつたんだ。すつかり話してくれ。ヴァシヤ。」

「待つてくれ、だつて、僕は雷が落つこちたやうに、すつかり面食つて了つたんだよ」

「いや、如何してもそんなことはない。君は作り出したんだらう。其は作り話なんだらう。」とアルカアド、イヴノギッチは考を變へて、疑つた様子をしてヴァシヤを見つめ乍ら言つた。然し、ヴァシヤの顔の表情が、今にも直ぐに結婚したいやうな非常な晴やかな確信を表はしてゐるので、彼は自分の寢床の上に身を投げ、氣狂ひじみたやうに轉がり廻つたので、壁はぐらく／＼慄ひ出した。

「ヴァシヤ、こゝへ座れよ。」と少し氣が靜まつて自分自身も床の上へ座り乍ら彼は言つた。

「僕は何處から如何始めていゝか、全く解らないのだ。」

二人は喜びを包み切れないで顔を見合はした。

「彼女とは誰れのことだ。」

「アルデミイシヤ……」とヴァシヤは幸福に和げられた聲で言つた。

「ねえ、僕は今迄君にするぶん彼女の話をしたね。然し、後では黙つてゐたから、それで君は何にも知らなかつたんだ。あゝ、アルカアシヤ、君に隠してゐて、悪いことをしたね。けれど、僕は話すのが恐ろしかつたのだ。逆も成功はすまいといつても氣遣かつてゐたので……けれども、僕は非常に愛してゐたのだ。それでね、それでね、遂々斯う言ふ風になつて了つたんだ。」と彼は幾度か身内に寄せてくる情に喋れなくなつて言つた。「彼女は始め他の許嫁があつて、一年前に職務の爲に派遣せられて行つたのだ。其男は僕はついぞ見かけたこともなかつた。彼は長い間手紙を少しも書かなかつた。死んだか、それとも行方不明になつたと言ふ噂さだつた。彼女は徒らに待ち暮してゐたが、ちつとも消息がない……如何したんだらうと思つてゐると……突然、四ヶ月前に、彼は結婚して歸つて来て、辯解に來やうとさへもしないのだ。實に下劣な不正直な奴だ。そして、此若い女の味方をするものは誰もなかつた。彼女は泣きに泣いてゐた。可愛さうに。そこで、僕は愛するやうになつた。……實際は、僕は随分前から

う愛してゐたのだが、度々彼女を訪ねて行つたり、慰めてやつたりして……遂々、如何してそうなつたか解らないが、彼女も僕を愛するやうになつた。八日前に、もう堪へ切れないので、僕は泣き乍ら、彼女に愛を告白した……「あたしだつて、あなたを愛してゐるのよ、ワシリイさん。でも、私は貧乏な娘なんです。私を慰み半分にしちや厭ですよ。本當を言へば、私はもう愛するやうになるとは思はなかつた。」お解つたかい、解つたかい。一刻も躊躇せず、僕達は夫婦の約束をした。然し、彼女のお母さんには如何話をしたものだらう。彼女の言ふことには其は大變難しいことだ。少し時期を待つた方がよからう。お母さんはおいそれと承知はすまいとのことであつた。彼女は斯う言つて泣いた。僕は、彼女には何にも知らせずに、今日現在婆さんに自分の意志を發表したのだ。リザは膝まづき、僕もさうして婆さんに祝福して貰つた。あゝ、アルカアシヤ、アルカアシヤ、ねえ、僕達は皆一所になつて暮さうぢやないか。だつて、世の中にどんなことがあつたつて、僕は君と離れる譯にはいかないんだから。」

「ヴァシヤ、あゝ、如何したつて、信することが出来ない。如何してもそう信すること

が出来ない……だつて、さうぢやないか、僕が知らずにゐて、君が結婚して如何するんだ。おい、ワアシャ、僕だつて結婚しやうと思つてゐたんだが、君が結婚するなら同じ譯だ。ぢやあ、幸福になれよ、幸福になれ……」

「ねえ、僕はどんなに、すつきりした嬉しい氣持であるか。」とワアシャは立ち上つて室を横ぎつて歩き乍ら言つた。「君も嬉しく思つてくれるかい。勿論、僕は貧乏して暮らすんだ。然し、僕達は幸福だ。此は妄想ぢやない。僕達の幸福は夢ぢやない。此は全く正直正明の現實だ……」

「ワアシャ、ワアシャ、まあ、聞けよ。」

「何を？」

「ある考が浮んで來た。然し、僕は言ふことが出来ない……一寸、待つてくれ、僕の疑を晴らしくれなくちや困る。……君は如何して生活して行くのだ。ねえ、僕は君が結婚するのは嬉しくて堪らない。嬉しくつて、自分乍ら包み切れない程だ。然し、如何して食つて行くつもりなのだ。」

「まあ、君は何と言ふ男だ。アルカアシャ」

とワアシャは深く驚いてネフェドギツチを見凝め乍ら言つた。「君は今日は如何かしてゐるね。あの婆さんだつて、僕が斯う／＼と説明したときは、ちつともそんなこと考へなかつた。寧ろ、「彼女達が何食つてゐるか」考へて見ろよ。彼女達は五百留の死んだ亭主の半恩給しか収入がないんだ。其上尙、中學に行つてゐる子供の費用を取り上げられて了ふのだ。でね、資本家は僕達丈なんだ。僕だつて、一年に七百留位は取るよ。仕事は甘く行けばね。」

「一寸、待つてくれ、ワアシャ、其事はうまく成功させたいものだ。僕は思つてゐるが三百留しか取らない癖に、何故七百留なんて言ふんだ。」

「三百留が如何した。ジュリアン、マスタコギツチを君は忘れたのかい。」

「ジュリアン、マスタコギツチだつて。でも、それは定つたことぢやないよ。其は一枚々々の留が忠實な友達のやうな三百留の定収入のやうには行くまい。ジュリアン、マスタコギツチはい、人だ。僕だつてそりや尊敬もしてゐるし、非常に高い地位の人だけ

れども理解もしてゐる。そして、愛してゐるよ。彼は君を愛してゐるし、自分の費用となるべき金を君にくれたり、拂ふ必要のない勤人を直ぐに助けたりするんだもの。だけど、君だつて同意しなくちやならんさ、ヴァン……一寸待つてくれ、僕が言ふことは決して無駄口ぢやない。ペテルブルグ中を探しても、君位上手な書家を得られつこないことはよく知つてゐる。然し、將來、君がジュリアン、マスタコギッチの御氣に入らないとか、うまく一所にやつていけないとか、君の手を借らなくてもいゝやうな時がないとも限らぬ。まあ、一口に言へば、いろんな事が起つてくるんだね。ジュリアン、マスタコギッチが今日生きてゐても、明日になつて死ぬとか。』

『そんなことを言つて、アルカシア、こんな風に推論して行けば、天井が頭の中に今にも落ちて來はしやしないかと絶えず心配してゐなくちやならない譯だ。』

『全くだ、全くさうだ。僕はもうそんなことは言ふまい……』

『いや、まだ話がお終ひぢやないよ。あの人が僕の手を借らなくていゝやうになるなんて、そんなことが出来るかい。いや、終ひまでいはせろよ。僕は皆念に念を入れて』

やつてゐるんだよ。あの人は僕にはすつかり満足なやうな風をしてゐる……見給へ、先程も僕に現金で五十留をくれたよ。』

『君、ほんとうかい。ちや、君は、賞與金を貰つたんだね。』

『賞與金だつて？ 此金はあの人が自分の懐から出してくれた金だ。彼は僕に斯う言つたよ。』君に金をやらなくなつてから、もう五ヶ月にもなる。さあ、取つとき給へ。俺は君に非常に感謝するよ。俺は君に非常に満足してゐる。さあ、君は無駄骨を折つて働いてゐるのぢやないよ。』これが、あの人自分で言つたことなんだ。君、僕はほんとうに涙が流れたよ。』

『一寸、待ち給へ、君はもう書類を書き終へたのかい。』

『いゝや、まだいよ。』

『君、まあ、如何したんだ。』

『まあ、聞けよ。君。そんなこと心配しなくてもいゝよ。僕はまだ二日暇を貰つたんだ。其で澤山だよ。』

「でも、そんなに遅れてもいいのかい。」

「まあ、いゝさ、そんな厭な顔付をして僕を見るなよ。僕の腸がすっかり引くりかへつて、心臓がしめつけられるやうだよ……さあ、何如したのだ、君はいつでもそんな様にするね……今にも、あゝ、あゝ、と叫び出しさうにしてゐる。然し、少し、氣を落ち着け給へ。大變なことなんかあるもんか。僕はすっかり書き終へるよ。屹度書き終へて見せる。」

「でも、若し出来なかつたら如何する。」と突然彼は立ち上り乍ら叫んだ。「丁度今日と言ふ日、君がお金を貰つて来て、結婚しやうとするなんて。あゝ、あゝ、餘りよくないやうだね。」

「心配するな、直ぐに僕は仕事を始めるよ。心配するなよ。」

「然し、如何してこんなに遅くなつたのだ。」

「おい、アルカアシャ、僕が彼女の所へ行くのを控目にするなんか出来るもんか。事務所席についてゐるのも苦しいが、自心の心を抑へつけるのは非常な苦痛だよ……あ

ゝ、あゝ、僕は今晚を過すとする、明日は二日目の晩とそれからあさつての晩と、それでお終になるのだ……」

「寫し直すものは澤山あるのかい。」

「おい、邪魔をしちやいけない。邪魔をしちやいけない。」

アルカアド、イヴノギッチは床に近いて、上に座る爲に身を動かしたが、すぐにまた身を動かして立ち上つた。然し、友の邪魔をしてはいけないと思つて、遂々座ることに心をきめた。彼は心を落ち着ける爲に、この世のあらゆる苦痛を嘗めた、大喜びで彼は友の結婚の報せを迎へたが、此喜びは未だ静まらなかつた。彼はシムコフに眼差を投げた。シムコフも彼を見て、微笑を見せ、指で脅かす眞似をしたが、突然、眉を恐しく顰めて（此濫面の中にシムコフのありつたけの心の力と仕事の成功が潜んでゐるかの如く）彼は書面の上に眼は戻した。

彼も亦其情を抑へることが出来なかつた。

彼はペン尖を取り換へ、席の上で身を動かして、樂に腰をかけ、仕事をついた。

然し彼の手は慄へて、仕事が出来なかつた。

「アルカアシャ、僕は君のことは彼女達に話したよ。」と突然急に思ひ出したやうに彼は言つた。

「ほんとうかい。」とアルカアドは言つた。「僕も其を聞かうと思つてゐたのだ。それから？」

「それから……あゝ、さうだ、今すぐに其事を語つて聞かせるよ。そら、間違ひだ。

僕は四頁書かない中は、話しする筈ぢやなかつたつけ。でも、僕は君のことや、彼女達のことを考へてゐる……僕は書くことさへ出来ない。僕は始終君のことばかり考へてゐるのだ。」

ヴァシヤは笑つた。

再び沈黙。

「ちえ、何と言ふ悪いペンだ。」とシムコフは卓子の上に輕蔑して叩きつけ乍ら叫んだ。彼はもう一つのペン尖を取つた。

「ヴァシヤ、聞いてくれ、ほんの一寸だ……」

「さあ、早く、もうこれつきりだよ。」

「まだ澤山書かなければならないのかい。」

「あゝ、君、(と言つて、ヴァシヤはこんな間程忌々しいものはないと言ふやうやうに響め面をした。)非常に澤山だよ。」

「ねえ、僕は考へたんだが……」

「何を？」

「いや、いゝ、いゝ、其よりか書けよ。」

「でも、何なのだ。」

「もう六ヶ月前のことなんだよ。」

ネフェドギチは微笑して、意地悪い眼付をして、眼をしばた、いたが、友が此注意を如何取つたかは餘り知らなかつた。

「え、何だつて？」と遂々ヴァシヤはペンを抛り出して、友がどんなことを言ひ出すか

と待つてゐて青くなつて、言つた。

「僕がこれから言はうと思つてゐることが解るかい。」

「後生だ、大急ぎで言つてくれ。」

「君は非常にちれてゐるね。ヴァシヤ、そして、今晚はちつとも仕事をしないぢやないか……待つた、待つた、待つた、待つた、解つた、解つた、ぢやあ、聞いてくれ。」とネフェドギッチは烈しく床から起き上り乍ら叫んだ。「第一、心を落ち着けないといけないよ。冷静にならなくちやいけない。」

「アルカアシヤ、アルカアシヤ」と此度はシムコフの方で長椅子から跳り上つて叫んだ。

「僕は今晚徹夜だよ、屹度徹夜するよ。」

「それがいゝ、それがいゝ、朝になつて眠つたらいゝだらう。」

「いや、決して眠らないよ。」

「いや、そいつは餘りだ。君は五時頃寝るといゝ。さうすると八時頃になれば、僕が起すから。明日は祝日だ。君は再び仕事にとりかゝつて、終日さうしてゐるがいゝ。」

……それから次の日君は……然し、君は未だ澤山書くのがあるのかい。」

「そら、そら、これ丈あるよ。」

ヴァシヤは喜びにふるゝ身を慄はして、一冊の帳面を示した。

「そうら。」

「一寸、君、餘り澤山もないね……」

「君、未だ、其處にもあるんだよ。」とヴァシヤは、外出の出来るか出来ないかは主として此物に關するのだといはんばかりに、ネフェドギッチをおぶくくと見乍ら言つた。

「幾枚。」

「二……冊……」

「え、何だつて。それぢや屹度書き終へることが出来るだらう。」

「アルカアシヤ。」

「ヴァシヤ、今日は大晦日だよ。皆家族團欒して集つてゐるのに、僕達ばかりは、可愛さうに、淋しく獨身で暮してゐるのだ……おゝ、ヴァシンカ。」

そして、ネフェドギッチは獅子のやうな腕の中にヴァシヤを抱きしめた。

「アルカアド、其は定り切つたことぢやないか。」

「ヴァシヤ、そう僕も君に言はうとした所だ。ねえ、ヴァシヤ、聞いてくれ、聞いてくれ」
アルカアドは喜の餘り喋れなくなつたので、口を開いて立ち止つた。ヴァシヤは彼の肩をつかんで、眼の中に見入り、自分自身友の考へをつつけやうとするかのやうに唇を動かした。

「何だい。」遂々彼は言つた。

「今晚其婦人達の所へ僕を連れてつてくれ。」

「アルカアド、あそこへ茶を飲みに行かう。だけど、いゝかい、いゝかい、十二時迄新年になるまでそこにゐちやいけないよ。」とヴァシヤは熱くなつて叫んだ。

「さうすると二時間だね。それより長くも短くもゐないよ。」

「それから、僕がすつかり書き終へるまで、追放の終つた後にだよ。」

「ヴァシンカ。」

「アルカアシヤ。」

三分間にして、アルカアドは趾先から頭まで身仕度をした。ヴァシヤは急いで仕事について、着換へをしなかつたので、少し着物を刷毛をかけたばかりである。

彼等は喜びに夢中になつて、外に駆け出した。ペテルブルグ區からコロンナ迄、長いことを道を歩かなければならなかつた。アルカアド、イヴノギッチは、しつかりと強く歩いた。彼の歩き振りばかりでも、友の幸福から満足を味つてゐることが察せられる。ヴァシヤは長い細い足で小刻みに早足で歩いたが、立派な様子を失はなかつた。アルカアド、イヴノギッチは今迄斯様ないゝ日の下に、立派な彼を見たことがなかつた。此時彼をいつもよりはもつと多く尊敬した。

讀者には未だ言はなかつたが、ヴァシヤは片輪であつた。(彼の半身は他の半分より短かつた。)此はいつもアルカアド、イヴノギッチに深い憐憫の情を起させ、限りなく悲しめてゐた。アルカアドは今は幸福で泣きたいやうだつたが、ちつと耐へた。

「何處へ行くんだ、何處へ行くんだ。ヴァシヤ、こつちを通つた方が近道ぢやないか」

とチズネセンスクの方へシユムコフが曲らうとするのを見て彼は叫んだ。

「言はなくなつていしよ、いしよ。」

「こつちの方が本當に近いんだよ。」

「アルカアシャ、僕が何をするのか解る。」と隠事をするやうな調子で、情に息づまらせ乍ら、ヴァシャは言つた。「おい、僕はリザに贈物を持つて行かうと思ふんだよ。」

「どんな贈物？」

「こゝにルルウ夫人の綺麗な店がある。」

「あゝ、それで……」

「帽子だよ、君、帽子だ……僕は今日素敵にいゝ小さい帽子を見かけたんだ……僕が此風は何だと聞いた時に、マノン、レスコオと言つたやうに思はれた。……素敵なんだ……桜色のリボンがついて……で、若し高くなかつたなら……全く高くなかつたならだ……」

「君はえらい詩人だね。ヴァシャ、ちや、行かう……」

彼等は早く歩き始めた。二分間の後、彼等は店に這入つた。長い捲毛をした黒眼の佛蘭西婦人が、彼等の所へやつて來た。

彼女は此等の青年に一瞥を投げるや否や、彼等と同じやうに快活に愛想よくしてゐた、本當はさうでなかつたけれども。もう少して、ヴァシャはルルウ夫人を接吻しやうとした程、彼は夢中になつてゐた。

「アルカアシャ、」と彼は小さい聲で言つた。何げない風に装つた眼を、曲つた木の帽子掛の上にかけてられた美しいいろくの冠り物の上に向け乍ら。「素敵だね。え、これは何だ。そら、その寶石を見ろよ。」とヴァシャは綺麗な小さい帽子を指し乍ら囁いたが、其を買はうとは思はなかつた。何故と言ふに、他の本當の素晴らしいマノン、レスコオは勘定臺の端の所にあつたから。彼は這入ると直ぐ店の中で其を見つけて、人が其を盗みはしないか、或は帽子自身が飛んで行きはすまいかと恐れ乍ら眼で監視してゐた。「そら、これがね。」とアルカアシャは一つの帽子を指し乍ら言つた。「これが自分の考では一番綺麗な。」

「お、アルカアシャ、君の趣味は高いよ。それだから、非常に君を尊敬するんだよ」
どヴァシャは意地悪い笑みを浮べて答へた。「君の帽子は綺麗だ。然し、もつとこつちへ
やつて来て見給へ。」

「ぢや、君はもつと綺麗な奴を見つけたのかい。」

「こつちの方を見給へ。」

「これが？」と疑はしい様子をしてアルカアドは答へた。

然し、ヴァシャが堪らなくなつて、帽子掛からマノン、レスコオを取ると、此帽子は、
いゝ趣味を有する客の所有となるのを喜ぶが如くに手の中に一人で落ちて来たやうに
思はれ、凡てのリボンや飾り帯や薄紗が指の中に慄へた時、喜びの叫びが、アルカア
ドの力ある胸から送り出た。

アルカアドも、判断力と威厳とをそなへた婦人として其迄尊大な沈黙を守つてゐた
ルルウ夫人さへも、「あ、あなたは正しくあてた、あなたは今あなたを待つてゐる幸
福に價する人だ。」と言ふやうな眼付や身振や微笑をして、ヴァシャを賞めた。

「此隅つこで、こいつ媚を見せてゐる。媚を見せてゐる。」とヴァシャは其小さい帽子に
凡ての愛を注いで叫んだ。「此づるい奴、小さい鳩め、わざと隠れてゐやがる。」

そして、彼は離れて接吻した。何故と言つて、彼は其に觸れるのさへ敢てしなかつ
たから。

「斯くして眞の價值と徳とは姿を隠せるものなり。」とアルカアドは、毎朝讀む精神的
な新聞から文章を借りて付け加へた。「如何した。ヴァシャ。」

「愉快だ。君。君は今日はいゝことを言つたね。君はあの婦人達にはもてるよ。僕は
豫言しておく。ルルウさん、ルルウさん。」

「何か御用でございますか。」

「親愛なるルルウさん。」

ルルウ夫人はアルカアド、イヴォギッチを見た。彼は寛大な様子をして微笑した。

「あなたを今どんなに敬愛してゐるか解らない。どうぞ接吻させて頂きたい。」
無作法にも、ヴァシャは此佛蘭西婦人を接吻した。

此狂じみた青年の奇妙な抱擁をうけて、ルルウ夫人は、威嚴を失はぬ爲に、自分の堂々たる様子を取り直さなければならなかつた。彼女は、此難局を切り抜ける爲に、あらゆる優美と愛嬌を出して、ヴァシャの出来心に對する準備をしなければならなかつたことと思ふ。彼女はそれで彼を許した。且つ誰でもヴァシャに對しては眞面目に怒れないのである。

「ルルウさんいくらですか。」

「それは五留でございます。」と彼女はもう一度微笑を見せて答へた。

「ルルウさん、ルルウさん、こちらの方は？」とアルカアア、イワノギッチは自分の注意を與へた帽子をさして言つた。

「此は八留でございます。」

「それぢや、見て下さい、見て下さい、ルルウさん、どつちが綺麗で優美で素敵ですか。とつちがあなたによく似合ひますか。」

「あちらの方は高いが、あなたのおよりになつたのは、あちらより可愛らしいござい

ます。」

「それぢや、これを貰ひませう。」

ルルウ夫人は非常に綺麗な紙を一枚取つて、帽子を包んだが、其れは此軽い包紙よりも、一層軽く思はれた。

ヴァシャは其を用心深く息もつかないで取つた。彼はルルウ夫人に挨拶をして、尙何か愛想を言つて店を出た。

「僕は浮氣者だね、アルカアシャ、僕は浮氣者だ。」と彼は神経質なうす笑ひを表はした喉で笑ひ乍ら叫んだ。彼は通行人が此大切な帽子を取らうと思ふかと疑がつて、通行人を避け、非常な廻道をして歩いた。

「一寸、聞いてくれ、アルカアシャ。」と直ぐに後で彼は再び言つた。……彼の聲は柔しい嚴かな調子を帯びた。「アルカアシャ、僕は幸福だよ。ほんとうに幸福だよ。」

「僕だつてさうだよ、可愛い可愛い、ヴァシャ。」

「全くだ。君に對する愛は無限だ、僕はよく知つてゐる。然し、君は今僕が味つてゐ

る愛の百分の一も感ずることは出来ない。僕の心は幸福に満ちてゐる。幸福にいつばいになつてゐるのだ。見給へ、如何に多くの生活か一日も楽しい日もなく涙と悲みと卑しい心配とに満たされてゐるかを、……それなのに、僕はあんな美しい女から愛されてゐるのだ。僕は。……君は間もなく彼女に會つて屹度彼女が貴い心を持つてゐることを賞めるだらう。平民に生れながら、僕は階級も得たし、定収入もあるやうになつた。片輪に生れついたが、彼女はいつでも、このまゝで僕を愛してくれる。それに未だある。ジュリアン、マスタコギッチは今日は僕に對して非常に柔しく親切にしてくれた。今迄一度だつてこんな風に彼が話したことがなかつた。彼は傍へやつて来て僕に斯う言つた。「それちや、ヴァシヤ、(全くだ、彼は僕をヴァシヤと言つた)祝日の中に結婚式を擧げるやうになる譯だね。は、あ。」そうして、笑ひ始めたよ。そこで、僕は自分のしなければならぬことを答へて言ひ、「閣下、多分私は楽しく暮すでございませう」と言ふことさへも敢てしたのだ。誓つて言ふが、僕はさう言つたんだよ。未だ何か言つた後で、彼は僕にお金をくれた。君は信じはすまいな、僕は泣き始めた。涙が僕の

眼から迸り出た。そして、彼も亦感動したやうに思はれた。彼は私の肩を叩いて、「ヴァシヤ、斯う言ふ感情をいつでも持つてゐ給へ。」と言つた。……」

ヴァシヤは突然黙した。アルカアド、イヴノギッチが振り返へつて、彼も亦感動の涙を拭つた。

「それから、それから……」とヴァシヤは續けた。「僕は今迄君にこんなことを話したことはないが……アルカアド、君は友情を以て大變幸福にしてくれたので、僕は君がゐなくては生きて行くことは出来ない。……いや、いや、辯解しなくてもいい、アルカアド、僕に君の手を握らせてくれ、君に感……謝……させてくれ……」

また、ヴァシヤは言葉を言ひ切れなかつた。アルカアド、イヴノギッチは彼の頸に飛びつかうと思つたが、此時、彼等は街を横らうとしてゐたので、御者が一生懸命に、しつと彼等に叫んでゐた。二人は驚きあはて、向側の人道まで走り出した。アルカアド、イヴノギッチは此變化を喜んだ。彼はヴァシヤが非常の場合の起る時は、感謝を迸り出すことを知つてゐたが、彼は何にも斯様な熱情に償するやうなことはしてゐ

なかつたので、ひどく困つてゐた。幸にも二人の前には未来があつた。アルカアド、イヴノギッチは其を思ひ乍ら、慰むるやうな嘆息を發した。

二

アルテミエフの家では、まさしく彼等が來るとは待ち設けてゐなかつた。其は婦人達がもう既に茶の卓子の前に座つてゐたのでも解つた。年老つた人達は、時として若い者よりも利巧なものである。リザンカは本氣になつて彼は來ないだらうと言ひ切つてゐた。

『あの人はいらつしやいませんわ、お母さん。』と彼女は言つた。『私の心がさう言ふのよ、あの人はいらつしやらないつて。』

母親は反對に彼女の心は彼が來ると言ふことを豫感してゐる。彼はさうするに何も妨げあるまい。新年の祝日の爲に仕事なんか今はないだらうから、屹度駆けつけてくるだらうと答へた。

實際、彼女が戸を開けやうとして行くと、直ぐに許嫁が姿を現はしたのを認めた。彼女は男の前に息を切らしてゐた。心臓は櫻のやうに赤い穿に捕はれた小鳥のやう

に鼓動した。實際彼女は櫻によく似てゐた。

おやおやとか、びつくりしたわとか、喜ばしいあゝと言ふ聲が、彼女の小さい唇から洩れて出た。

「あなたは嘘つきね。」と彼女は呼んで、ワアシャの頸に飛びついた。

然し、彼女が、許嫁の後ろに、アルカアド、イヴノギッチが非常に當惑して姿を隠さうとしてゐるのを認めた時の其驚き、不意の恥ぢらひをば想像し給へ。

彼は婦人のゐる所では、拙づかつた、非常に拙づかつたと自白してゐるのは尤もなことである。ある日も斯ういふことがあつた……が、其は後で話すことにしやう。でも、彼が席につくの、何も滑稽なことがあつた譯ではなかつたことは解る。彼は入口の中に、ゴム靴を穿いて、マントオを着て、耳まである毛の帽子を冠つて立てゐたが、此帽子を出来る丈け急いで取つて了ひ、黄い大きな頸巻は、嬉しくて堪らないやうに、背中の後にもつれてゐた。見とつもないなりをして、人の前に出やうと思ふ人はないから、見苦しくない様子をして出るには、すつかり是等の物を解いて引つこま

せ片づけて了はなければならなかつた。この危い瀬戸際で、忌々しい嫌なワアシャ、然し、本當は嫌な意地の悪いものではない可愛い、善良な人間のワアシャは斯う叫んで氣の毒なアルカアドを益々當惑せしめた。

「リザンガ。これだよ、これだよ、僕の言つたアルカアドと言ふのは。お前如何思ふ。僕の一番の親友だよ。接吻してくれ、リザンガ。先づ接吻してくれ、さうすれば直ぐに見直ほすやうになるよ。さうだ、お前に接吻してくれと言ふ必要はなかつたつけ。お前は、そんなことを言はなくても接吻するのだから……。」

それで、未だ半分しか頸巻をほどかなかつたと思ふアルカアド、イヴノギッチは如何なつたと諸君は思ふ。

自分は諸君に、ワアシャの並み外れの熱心さに、時として恥ぢ入ることがあると誓つて言ふ。儘かに其は人の善いことを現はしてはゐるが、然し……其はぶしつけで、よくないことだ。

遂々、彼等はアルテミエフ夫人に挨拶しに行くやうになつた。老婦人はアルカアド

イヴノギッチに知合になつたことを喜んだ。彼女は其程幾度となく彼の噂を聞いてゐたのだつた。……然し、彼女が話を續けてゐると、隣の室から、嬉しげなあゝと言ふ聲が響いて、其言葉を断ち切つて了つた。さうだ、リザンカは、包紙から出した帽子の前に立つて、腕を組み合せ、嬉しげな様子で微笑し乍ら、其を眺めてゐた。ルルウ夫人が、もつと綺麗な帽子を持たなかつたのは惜しいことだ。然し實際を言ふと、これよりも綺麗な帽子は何處にもありはしない。自分は決して満足することを知らない戀人の忘恩に腹を立てたり悲しんだりする。でも見給へ。此小さい帽子の愛よりももつと愉快なものは何處にあるか。さあ、見給へ。いや、いや、如何に君が骨折つたつて駄目だ。其はもう自分の言ふことゝ一致してゐる。其にもう／＼した雲か、霧か、軟かな水蒸氣みたいなやうなものだ……自分は彼等を許さうと思ふ。……然し、反對に、君は自分を勘辨してくれ給へ。自分は此小さい帽子のことばかり話してゐる。可愛いふは／＼した網布があつて、底と褶布との間には櫻色をした大きなリボンがあつて、其二つの端は頂^{うなじ}よりも下顎の上に垂れ下るのだ……只、少し後目に帽子を冠らなければ

いけない……

よく見給へ。あゝ、自分は君に尋ねるが、いや見なくてもいい。其はどつちでも同じことだ。君は反對の側を見給へ。天鵝絨のやうに黒い二つの眼から忽ち迸る眞珠のやうな二つの大きな涙のやうなものに眼を送り給へ……此涙は長い睫毛の端でゆらゆらしてゐたが、次ぎには頂の上に落ち、まるで、ルルウ夫人の美術品はエエテルで出来上つてゐるやうだつた。……

戀人は客間の中に這入つて各々茶の卓子の周圍の席を占めた。會話は始つた。アルカアド、イヴノギッチは友が賞め揚げた噂を落さなかつた。喜んで自分は期う言ふ判断を下す。ワアシャのことを少し話した後で、彼はうまく恩人ジュリアン、マスタコギッチの方へ會話を持つて行つた。會話の興味が一瞬間も無くならなかつた程、彼は大變すらく／＼と話をした。ワアシャの運命と直接間接の關係を持つてゐるジュリアン、マスタコギッチの詳しい性格を、彼は如何にうまく利巧に髣髴させたかを、知らなければなら

それで、老婦人は全く氣に入つて了つて、ヴァシヤを引張つて遠のき、彼の友は眞面目で眞剣で若い人の中で最も親切な人であると斷言した。ヴァシヤは危く吹き出さうとした。彼は此評判のいゝアルカアシヤが、直ぐ前に自分を轉がしたりしたことを思ひ出した。

アルテミエフ夫人は彼の所へ行くやうにヴァシヤに注意をした。彼等は一所に隣室に這入つた。彼女は自分の娘に對しては餘り宜しく振舞はなかつたと言はねばならぬ。彼女は善良な心で娘を裏ぎつた。彼女はリザンカが彼に新年の贈物にしようとしてゐたものをヴァシヤに見せた。其は面白い圖案をした金と眞珠で縫ひ取つた紙挟みで、一方には全くありのまゝの鹿を表はし、他方では、立派な様子をしてゐる有名な大將の肖像を描き出してゐた。ヴァシヤが夢中になつて喜んだことは勿論のことである。

此時、客間では、リザンカはアルカアド、イヴノギッチと一所になつてゐた。彼女は彼の兩手を取つて、非常に感謝の言葉を言つてゐる。

アルカアシヤは初めは何が何やら解らなかつた。だが、後で其は矢張かの親友のヴァシヤに關してゐることだと悟つた。リザンカは非常に幸福であつた。彼女はアルカアドイヴノギッチが自分の許嫁の親友であつて、非常に彼を愛しいろくろく忠告して保護してくれてゐるのを知つてゐた。リザンカは實際アルカアド、イヴノギッチに感謝せざるを得なかつた。少くとも彼がヴァシヤに示した愛情の半分なりとも、彼女は報いたと思つた。

ヴァシヤが餘り難かしい體格を持つてゐるので非常に其健康を氣付かつてゐたので、後で彼女は彼に其事を聞き始めた。彼女は後には彼に最も優しい注意を拂つてやると言つた。それから、アルカアド、イヴノギッチが自分達を見離さないやうにしてくれるばかりでなく、自分達と一所に仲よく暮したいと言ふ希望を述べた。

『私達は別れ／＼になることは出来ませんわ。だつて、三人は只一人の人間のやうなものですもの。』と彼女は子供らしく夢中になつて叫んだ。

遂に、別れると思はなければならぬやうになつた。勿論、彼女達は二人の友を止めた。然し、ヴァシヤは是以上此處にゐることは出来ないときつぱり言つた。アルカア

ド、イヴノギッチは彼の言ふ事は本當だと言つた。彼女達は其理由を尋ねた。ヴァシヤがジュリアン、マスタコギッチに頼まれた大急ぎの仕事を持つてゐること、翌々日までに其を書き終へねばならぬこと、未だ爲なければならぬ仕事が澤山あると言ふことか解つた。

母親はおや／＼と言つた。リザンカは雄々しくもあきらめて、彼等を出してやることにした。少し急いだ最後の接吻は一層熱いものであつた。人々は別れて、二人の友達の出掛けた。

街へ出ると直ぐに二人は自分の受けた印象を言ひ交した。アルカアド、イヴノギッチは全くリザンカを死ぬまでも愛し抜くやうになつた。仕合せなヴァシヤ程彼の心をよく悟り得るものはなかつた。それで、アルカアドは其を彼に自白した。

ヴァシヤは其を非常にをかしく嬉しく思つた。彼はこんなことは何等いざこざを起すやうなものでなく、却つて二人の友情を増すものであると言ひさへもした。

「君は悟つたんだね。」とアルカアド、イヴノギッチは言つた。「僕はあの人を君と同じや

うに愛してゐるんだよ。あの方は君を守る天使であると同じく、僕を守る天使ともなるのだ。君の幸福は僕の生活を輝かしてくるのだ。それから、あの方は僕のおかみさんとなる譯だ、君の世話もするし、僕の世話もするんだから。さうだ、君に對する愛とあの人に對する愛と、君達は僕の心の中で分かつべからざるもので、僕の心はこれから一人の人でなくて二人の人に屬するのだ……」

アルカアドは感情で包み切れなくなつて言葉を途切らした。其時ヴァシヤの方では心の底までも動かされるのを覺えた。彼はアルカアドからこんな打明けた話を聞かうとは思つてゐなかつたことを言はなければならぬ。彼の友はいつも咄辨で話をし、空想を好んではゐなかつた。が、突然、彼女は最も心を引き入れられるやうな空想的な夢の中に包まれた。

「僕は一生懸命に注意して君達二人の兩側を見るよ。」とアルカアドは續けた。「第一、僕は君達の凡ての子供の教父とならう。すつかり。それから將來のことを考へねばならん。室を借りて、道具を買つて、あの人と君と各一間づゝ持つやうにするんだ。ね

え、ヴァンシャ、僕は明日貸家を探しに行くよ。三間、いや二間で澤山だ。それより澤山はいらない。僕達は十分の金が取れまいと思つて、僕は今日馬鹿なことを言つたと思ふね。僕はあの人の眼を見ると直ぐ、人々は自然とあの人の爲にどんなことをしてもいゝと思ふやうになると言ふことが解つた。僕達は働かう。ヴァンシャ、今でも僕達は二十五留の屋賃が拂へるんだ。貸家つていゝもんだよ。いゝ室に這入つてゐると、人間は變つて了つて、快活にすつきりとなるよ、リザンカさんは我々の共通の會計係りとなるのだ。一錢だつて無駄に使つちやいけない。トラクチルなんぞへはもう決して行かん。そして僕達は、月給が上るし、賞與を貰ふんだ。何故と言つて耕作する牛のやうに僕達は熱心に働くのだから……』と此幸福を遠く描いたアルカアドの聲は弱くなつた。『斯うして、二十留か二十五留の金が僕達の頭に突然落こちてくると思はないか。そして、此の賞與は時には可愛らしい帽子になつたり、頸巻になつたり、靴下になつたりする。あの人は僕に如何しても頸巻を編んでくれなくちや困る。見給へ、僕のしつてゐる頸巻はこんな、こんな汚なく、黄くなつて古ぼけてゐる。今日はするぶん恥し

かつたよ……それに、君は人が悪い、僕がまだ汚いなりをしてゐるのに紹介するなんて。まあ、そんなことは如何でもいゝ。銀製の道具を僕は買ひたいと思つてゐる。僕は君に贈物をしたいと思つてゐる。名譽から言つてもさうしなくちやならないし、自惚も手傳つてゐるのだ。僕は君の爲に、銀のスプーンやナイフを買はう。勿論ナイフだよ、それからチョッキを買はなくちやならん。これは僕の爲にだ、だつて僕は結婚式に参列する男なんだからな。君、よく氣をつけ給へ、僕は一分間だつて君の傍を離れはしない。君が濟むまで、朝から晩、晩から朝まで、君の傍にくついてゐるつもりだ。それから、夜會をあの人達の所でする爲に歸るのだ。僕達は幸福となつて、ロト（遊戯の一種）をやらう。あゝ、素敵だね。でも、君の仕事の手助けが出来ないのは困つた事だね。僕は君の代りになつて澤山書いてやりたいのだが。僕達の筆蹟が違つてゐるのは困つたことだ。』

『さうだ。』とヴァンシャは答へた。『急いでしなくちやならん。もう十一時になつたんだらう。大急ぎで行かう。仕事だ。』

ヴァシヤは今迄微笑んだり、非常に元氣づいてゐる友の言ふことを熱烈な感動で止めやうとしたりしてゐたが、斯う言ひ乍ら、突然黙りこんで了ひ、殆ど駈け出すやうに歩き始めた。苦しい考が彼の頭腦を冷し、彼の心臓を引きしめたやうに思はれた。

アルカアド、イヴノギッチは心配した。彼がいくら聞いても、最早返事を引き出すことが出来なかつた。ヴァシヤはもう何も言ひたくないと言ふやうに途上切々に物を言つて、それから逃げるやうなことにした。

『おい、如何したんだ、ヴァシヤ』とアルカアドは叫んだ。『何を心配してゐるんだ。』

『あゝ、君、もう馬鹿々々しいことは澤山だ。』とヴァシヤはいやく／＼乍ち答へた。

『おい、おい、心配しちやいけない。君は幾度も、もつと澤山仕事を一時にやつて了つたぢやないか。君はさう言ふ特別の才能を持つてゐるのだ。つまり、君はそんなに勉強したり、清書したりする必要はないのだ。只、僕が心配することは、君が餘り落ち着いてゐるそは／＼してゐることだ。それぢや仕事をするのが難しいよ。』

ヴァシヤは何も答へなかつたと言ふよりも、寧ろ何やら譯の解らないことをうなづ

た。

やがて、二人の友達は二人とも心配を抱き乍ら家に歸つて來た。ヴァシヤは直ぐに仕事に取りかゝつた。アルカアド、イヴノギッチは着物を脱いで黙つて床に就いたが、眼を一瞬間も友から離さなかつた。一種の恐怖が彼を襲つて來た。

『彼は如何したんだらう。』とヴァシヤの青い顔や、熱した眼や、素振にあらはれてゐる不安を見乍ら彼はつぶやいた。『あれを持つて、彼の手は慄へてゐる……さうだ、彼に二時間位眠つたら如何だとすすめた方がいゝだらう。興奮を沈めるにはそれがいゝ。』

ヴァシヤは一頁書き終へた。彼は眼を上げて、アルカアドに眼差を投げたが、直ぐに又眼を下げた。彼は又ペンを取つた。

『ねえ、ヴァシヤ、君は少し眠つた方がよくはないかしら。君は熱に浮かされてゐるやうだぞ。』

ヴァシヤは厭々乍ら、寧ろぶり／＼して友を見たが、何もへ答なかつた。

『ねえ、ヴァシヤ、こんな風に行けば、君は如何かして了ふぞ。』

數分間の沈黙の後、ヴァシヤは遂に口を開かうと決心した。

「少し茶を飲みたいものだね、アルカアシヤ」と彼は言つた。

「如何したんだ。何故そんなことをするんだ。」

「そうすれば力が出てくる。僕は眠らないよ。眠らうとは思はない。夜中書く。お茶を飲んで少し休むとしよう。そうすれば厭な氣は何でもなくなる。」

「よし來た。それがいい。僕も今さう言はうと思つて居た所だ。もつと早く考へ付かなかつたことには自分ながらあきれる。然し、女中は如何しても起きてくれまいよ。」

「さうだつたな。」

「構ふもんか。何でもいゝ。」とアルカアド、イヴノギッチは床から起き上つて叫んだ。

「僕が自分でサモヴルの仕事をしよう。始めてやる譯でもないんだから。」

アルカアド、イヴノギッチは臺所に駈けつけてサモヴルに火を點じた。

此間ヴァシヤは書いてゐた。アルカアドは着物をつけた。そして、ヴァシヤが十分元氣を出すやうにする爲に、パンやに走つた。

十五分の後にサモヴルは卓子の上に載つてゐた。彼等は茶を飲んだが、會話ははづまなかつた。ヴァシヤはもうがつかりしてゐた。

「さうだ。」と彼は、自分の氣掛りの對象を忽ち發見したかのやうに言つて了つた。「明日新年の挨拶を述べに行かねばならん。」

「そんなことしなくてもいゝぢやないか。」

「いや、さうしない譯にいかないよ。」

「だが、僕が君の代りに帳面に署名しに行つてもいゝ。さうすれば、君は仕事を止めないで済む。さうして、僕が先きに言つたやうに、朝の五時まで終夜仕事が出来る。」

それから、君は少し眠るんだ。さうしないと、君は人間の形をなくして了ふよ。明朝八時に僕は君を起してやるよ。」

「でも、君は僕の代りになつて署名しても悪くはないか。」とヴァシヤは半分疑つて言つた。

「悪いことなんかあるもんか。誰だつてさうする。」

「僕は知らないが、何だか悪いやうな気がする。」

「如何してだ。如何して。」

「だつて、君、他の人なら構はんが、ジュリアン、マスタコギッチにはいけない。僕の恩人だのに、あの人が僕の筆蹟ぢやないと気がつけば……」

「そんなこと気がつくもんか。君は何と言ふ子供なのだ。いゝぢやないか。それに、君は僕が君の筆蹟を真似るのがうまいことをよく知つてるぢやないか。僕は君と同じやうに君の花押を書くよ。心配するな。解りつこはない。」

ヴァシヤは答へなかつた。彼はコップを乾して、疑つた様子で頭を振つた。

「君、あゝ、僕達がうまく行つたら……だが、如何したんだ、ヴァシヤ。心配になつたぞ。僕は床につくのはよさう。其は不必要だ、眠らないとしやう。まだどれ丈残つてゐるか見せ給へ。」

ヴァシヤはアルカアド、イヴノギッチがびつくりしたやうな變な様子をして彼を見つめた。

「如何したんだ、ヴァシヤ。如何した。如何してそんな風に僕を見つめてるんだ。」

「アルカアド、僕は明日新年の挨拶しにジュリアン、マスタコギッチの所へ行くよ。」

「それぢや、行けよ……さあ、ヴァシヤ、早く書くんた。こんな拙いことはないね。ジュリアン、マスタコギッチは、君の筆蹟が非常にいゝと言ふのは、非常に読み易いからだと言つたぢやないか。宜しい。君に言つても仕方がない。僕は心配だ……君が悲しげな風をしてゐるので、僕は苦しくなるよ。」

「何でもないのだ、何でもない。」とヴァシヤは疲れて後に身を仰げにし乍ら言つた。

アルカアドは彼の傍に駆けよつた。

「水が欲しいかい。水が欲しいのか。」

「いゝよ、いゝよ。」とヴァシヤは彼の手を握り乍ら言つた。「何でもないんだ。只、少し悲しいんだ。何故だか知らないが。もう、他の事を話さうぢやないか。」

「氣を落ちつけろよ。仕事を済ませて了ふんだ。だが、それが終らなかつたとしても大變なことになる譯はない。つまり犯罪でも何でもないんだから。」

「アルカアド」とヴァシヤは非常に眞面目な様子をして友を見つめ乍ら言つたので、彼の友はびつくりした。何故なれば彼はこんな様子をした彼を今迄見たことがなかつたから。「若し、僕が前のやうに獨身であつたなら……いや、其は僕が言はうと思つたことぢやなかつた。僕は君を親友として打ち明けやうと思ふ。それに、如何して、君は悲むのか。ねえ、アルカアド、或人は偉大な生活をしてゐるのに、僕のやうな者はつまらない事はかしてゐる。若し君が此處に感謝しなければならぬことがあつて、それでありながら其意を表はすことが出来ないとしたら如何だらう。」

「君の言ふことは全く解らない。」

「僕は決して恩を忘れやしないよ。」とヴァシヤは獨言を言ふやうに低い聲で續けた。然し、僕は感じてゐることをすつかり言ひ表はすことが出来ないとしても、さう思はれても仕方がない……僕が忘恩者と思はれても仕方がないさう思ふと死にたい位だ」
「おい、何でもない。何でもない。感謝は定められた期限内にすつかり寫し取ることになるんぢやないか。感謝を表はす方法はそこにあるんだよ。」

ヴァシヤは答へずに、アルカアドの眼を限りなく開いて見つめた。恰も、此最後の論が凡ての彼の疑惑を拂らしてくれたやうに。彼は微笑することさへしたが、一瞬間後には考へ深くなつた。アルカアドは、此微笑を聞き入れてくれたものと見て取り、此引きつけられたやうな様子をきつぱりと元氣を出した記しと見て取つて、喜んで氣を落ちつけた。

「アルカアド、君が眼を覺ましたら、僕に眼を注いでくれ。若し眠つてゐたら起してくれ。さあ、僕は仕事にかゝるよ。」

數分間の後、ヴァシヤは再び、「アルカシヤ」と言つた。

「何だい。」

「いや、何でもない。……僕は只……」

ヴァシヤは全く仕事にとりかゝつて黙つて了つた。アルカアドは床に就いた。

彼等はアルテミエフ家を訪問することは少しも話さなかつた。多分、彼等は夜中を過ぎなかつたことは少し誤つてゐたと感じたのであらう。

間もなくアルカアド、イワノギッチは眠りに落ちた。

三

翌朝彼は八時頃びつくりして目をさました。ヴァシヤは青ざめてつかれて、椅子の上に乗つてゐた。彼は手にペンを握つてゐたが、蠟燭は、全く消えてなくなつてゐた。

マアヅラは臺所でサモヅルの支度で忙がしかつた。

「ヴァシヤ、ヴァシヤ」とアルカアドは驚いて叫んだ。「どうしたのだ。君は寝なかつたのかい。」

ヴァシヤは目を見ひらいて急に椅子から立ち上つた。

「あゝ」と彼は云つた。「僕は横にならないで眠むつてしまつた。」

彼は急に紙の上を見た。幸ひにもインキや手垢で汚れたところもなかつた。皆ちやんとしてあつた。

「僕は六時ごろ眠むつたのだと思ふ。」とヴァシヤは云つた。「夜中はすいぶん寒いね。それでは茶を飲んで、また仕事に取りかゝらう……。」

「眠むつたので心がさつぱりしたかい。」

「うん、もう書き續けていけるよ。」

「君、新年おめでたう。」

「僕も君の爲めに新年を祝ふよ。」

彼等は互ひに接吻した。ヴァシヤの眼はふるへて居り彼の目は濕うてゐた。

アルカアド、イヴノギッチは沈黙を守つてゐた。彼は悲しいやうな感じがした。二人は茶をぐつと飲みほした。

「アルカアド、僕は自分で、ジュリアン、マスタコギッチのところへ行かうと決心した」

「だつて、彼が何にも知る氣遣ひはないと僕は云つたぢやないか。」

「うん、でも君、僕の良心が落ちつかないからね。」

「だつて君はあの人のために仕事をしてるんだからね、あの人のために骨を折つてるんだもの、さあ……それから、僕もあそこへ行かう……」

「何處へ？」と、ヴァシヤは聞いた。

「アルテミコフ家へさ。僕はあの人達のところへ君の分も僕の分も年賀に行くんだ。」

「よし、よし、そんなら、そうして、僕は此處に居ることにしやう。それは非常にいゝ思ひつきだ。僕が此處に居て仕事をして居る間は時間を無駄につぶすわけではない。だが、一寸まつてくれ、僕は手紙を書いて、君に持つて行つてもらひたい。」

「さうだ、書くが、書くが、まだすいぶん暇があるからね。僕がまだ顔を洗つて、髻を剃つて、着物にブラシをかけなくちやならない……さあ、ヴァシヤ、さあ僕達は嬉しい、仕合だ、接吻をしやう。」

「あゝ、君、大變に都合がよく行くね。」

「官吏のシムコフさんは、此處へ御住ひですか。」と階段の所で小供の聞く聲がした。

「兄さんこちらよ。」とマアヅラが彼を内に入れて云つた。

「何うしたんだ、何んだ。」とヴァシヤは急に椅子から立ち上がつて入口の方へ駆け寄りながら叫んだ。「ベチンカ、お前かい。」

「お早やう、新年お目出度う、ヴシリイ、ペトロギッチさん。」とちやれた黒い髪をした

十ばかりの小さな子供が云つた。「姉さんがあなたによりしく、お母さんもよろしくつて云ひました。姉さんの代りに僕があなたを接吻するやうに云つて來ました。」

ヴァシヤはこの小さい使者を腕の中に持ち上げた。そしてリザによく似た彼の唇に長い味のある接吻をした。

「君も彼を接吻してくれ、アルカアド。」とヴァシヤは云つて、ベチンカを地にふれさせないで、アルカアド、イヴノギッチの逞ましい手に彼を渡した。

「お茶を飲むかい。」

「ありがたう、僕達はもう飲んで來ました。僕達は早く起きたのです。お母さんや姉さんは彌撒に行きました。リザンカは二時間も僕の世話をしてくれました。姉さんは僕の髪の毛を縮らせたり、油をつけたり、顔をふいたりしてくれました。昨日サアシ、カと町の中で雪合戦をしてズボンをはころばしたのを繕うてくれました……」

「それから、それから。」

「姉さんは、あなたをお訪ねしに行くやうに僕に支度をしてくれました。それから姉

さんは幾度となく私を接吻して斯う云ひました。「ヴァシヤの家へ行つて、新年お目出度うと云つてあの人が元氣で居るか、夜はよく眠つたかどうか聞いて來ておくれ、……それからいろんな事をまだ澤山云ひました……あゝそうだった、あなたが、昨日果してしまわなければならなかつた仕事はおしまひになりましたかどうかつて、僕はわかりませんが……だが此處に書いてあるのがそうなんでせう。」と子供は彼のポケットから一枚の紙を出して言つた。

「そいつは書き上げてしまふと姉さんに言つてくれ、まちがひなく約束する。」

「あの、それからね、まだありますよ……あゝそうだった、僕は忘れた……姉さんが一通の書附と贈り物をあなたに送りました。僕は忘れるところだった……」

「おや、おや、あゝ、そうかい、だが何處に？ あゝそれだ、見ろよ、君、彼女がどんな事を書いてよこしたか見ろよ。何といふやさしい心だ！ 僕のなつかしい可愛い者よ！ ねえ、僕は昨日彼女の家で彼女が僕に紙挟を作つて居るのを見た、それがま

だ出来上らないので、彼女は僕に自分の毛を一房贈ってくれたのだ、もう一つの贈り物は出来上つたら送つてくれるだらう。見ろよ。君。」

そして熱中の餘りがたがた慄へて、ヴァシヤは、この世にこんな黒い厚い毛はないやうな一房の髪を見せた。それから彼は大喜びでそれを接吻し、心臓に眞近の着物の横ポケットに隠した。

「ヴァシヤ、僕はその髪にメタルを君に作つてやらう。」とアルカアド、イヴノギッチは彼に言つた。

「今日は僕のところでは、ロースビフの御馳走があります。明日はセルゲルの御馳走があります。」とベチンカはいひつづけた。「お母さんはまたビスケットをこさへやうとして居ます……しかし麥菓子はありませんが」と子供は少し考へた後で言つた。

「まあ、何といふきれいな可愛い子供だ。」とアルカアド、イヴノギッチは叫んだ。「ヴァシヤ、君は人間の中で最も仕合せ者だ。」

子供はお茶を飲んだ後でヴァシヤから小さい書附と多くの接吻を受取つた。それが

らは入つて来たと同じやうに忙がしさうに、また嬉れしさうに出て行つた。

「どうだい、君」とアルカアド、イヴノギッチは言つた。「ねえ、この通り皆うまく行くぢやないか。心配するのはよせよ、何にも怖がつてはいけない。前へ進むんだ。仕事を終へるんだ。ヴァシヤそれを終へてしまへ。僕はあの人達の家と、ジュリアン、マスタコギッチのところへ行くよ。二時になつたら歸つて来る。」

「それぢや、さよなら、君、さようなら。もうきめた。僕はジュリアン、マスタコギッチのところへ行かない。」

「さよなら。」

「一寸、君、一寸、あの……それぢや、言ふべき事はすつかりうまく言ってくれ。そしてリザンカを接吻してくれ。君は僕にすつかり歸つてから其事を話してくれるだらうね。」

「よし、よし、僕はどんな事を言はねばならないかよく知つてゐる。可愛そうなヴァシヤ、君は思ひがけない幸福に逢つて動願してゐるんだ。昨日から君は全くいららば

かりしてゐる。まだ、君が受けた新らしい感情から脱してゐない。さあ落ち付くやうにしないといけない。それぢやさうなら。』

友達は相別れた。

朝中、アルカアド、イヴノギッチは上の空で居た。彼はヴァシヤの弱い、いらいらした性格を熟知して居るので彼の事ばかり考へて氣をもんでゐた。

『そうだ、こんな風に彼を變化させたのはあの幸福の爲だ。それは間違ひがない。』と彼は思つた。『それだから、彼は悲觀して僕を心配させるのだ。彼はどんなつまらない事でも悲しく思ふのだ。あゝ、彼を救はなければならぬ。どうしても救はなければならぬ。』とアルカアドは自分も又つまらない事を際限なく誇張してゐると氣がつかないで叫んだ。

彼はやつと十一時ごろジュリアン、マスタコギッチの家へ着いて、朝から署名しにやつて來た立派な人々の名が書いてある、長い張面へあやふやな、彼の名を書き加へやうとした。ところが彼の目はヴァシヤ、ジユムコフのまがいもない署名のしてある上に

落した時の彼の驚きはどんなだつたらう。

『これはどう言ふ譯だ。』と彼は考へた。アルカアド、イヴノギッチはいまのさきまでまだ希望に満たされてゐたが、すつかりあたふたして出て來た。彼の考への中には疑ひもなく一つの不幸が起るのを感じた。しかし其はどんな不幸であらう？

彼は暗い豫覺に頭を滿たして、カロンナに着いた。彼は始めのうちには、リザンカと話をしながらそれを忘れてゐた。しかし、だんくゝ友達の事が心配になつたので目は涙が出て來た。彼は出来るだけ早く歸るために走り出した。ネヴ川の上で彼はやつぱりかけてやつて來たシユムコフとぶつかつた。

『何處へ行くんだ。』とアルカアド、イヴノギッチは叫んだ。

ヴァシヤは現行犯に不意打ちを食つたやうに、面くらつてあたふたして立ちどまつた。

『何處へも行きやしない、僕は散歩しに出かけたのだ。』

『君は自分を制する事が出来なくなつたのだ、君はカロンナへ行かうとしてゐるのだ。』

あゝ、ヴァシヤ、ヴァシヤ。君もどうしてジュリアン、マスタコギッチのところへ行つたのだ。」

ヴァシヤは始めは答へなかつた。彼は絶望したやうな身振をしてそれから言つた。

「アルカアド、僕は自分でどうしんだかわからない、僕は……」

「ちや、煩悶するのはよせ、ヴァシヤ、ほんとにせよ。そうだ、僕はどうしたんだか知つてゐる。君は昨日からあたふたしてるんだ。實際を言ふとあんまり深山な感情が一緒にごた／＼とやつて来たやうだ。さあ、氣を落ちつけろよ。誰れもかれも君を愛してゐるんだ。誰れもかれも君の事を氣にしてるんだ。君の仕事ははかどつてゐる。君は期限までそれを終はれるに違ひない。それなのにどうして身の苦しめてゐるのだ。僕はよく知つてるよ、君は馬鹿な事を、おそろしい妄想を考へ出したのだ……」

「いや、いや、何でもないんだよ。」

「君は覺えてゐるだらうね、ヴァシヤ、君が職にありついた時にこんな事がやつぱり一度あつた。幸福と感謝の情が君を強く熱しさしてしまつて君があんまりいら／＼し

てるものだから、仕事がぞんざいになつたことがあつた。今度もやつぱり同じ事なのだ……」

「そうだ、そうだ、アルカアド、だが、全く同じ事ではないよ。」

「何だつて、同じ事ではないつて、それでは今度の仕事は君が思ふほど急ぎの事ではないかも知れない、君は急いで仕上げて了はうと思つて自分で自分の身を殺してるんだ。」

「何でもないんだよ、何でもないんだ。それちや歸らうちやないか。」

「君はあの人達のところへ行かないのかい。」

「いや、僕はそこへ行かうとしてゐるんぢやない。君の留守の間、僕は一人でちつとしてゐる事が出来なかつたのだ、僕は非常に苦しかった。だが君は僕のそばに来ようと思つて来たのだらう。それちや僕は再び仕事に取りかゝらうと思ふ、さあ行かうよ。」

彼等はだまつて歸途に就いた。ヴァシヤは急いでゐた。

「君があの人達の話の聞かないのはどうしたんだ。」とアルカアド、イヴノギッチは言つ

た。

「あゝそうだつて、それぢや、アルカアシャ、あの人達の事を話してくれ。」

「君にも驚くね、ヴァシヤ、一體どうしたんだい。」

「何でもなんだよ、何でもないんだ。すつかり話してくれ、アルカアシャ。」とヴァシヤはこれ以上長い辯解を避けやうとするかの如く哀願するやうな聲で言つた。

アルカアド、イヴノギッチは嘆息した。彼は最早考へることが出来なかつた。彼がカロナの人々のことを話すと、彼は少し元氣づいて多辯にさへなつた。彼が暇乞をする前に老夫人は彼にポケットいっぱいビスケットをくれた。其を食べ乍ら、此二人の友達は少し愉快になつた。それから彼等は晝飯を食べて、ヴァシヤは終夜徹夜しやうと思つて寝た。

朝の中から、アルカアド、イヴノギッチは友達に晩に茶を飲みに来るやうに招かれたので、其を拒むことは出来なかつた。彼は出来るだけ早く、八時きつかりに歸つてくるやうに約束して出掛けた。三時間の別れてゐた間は彼に三年のやうに思はれた。彼

は遂々逃げるやうに歸つて來た。

家に歸ると、彼は室の中がすつかり眞暗なのを見た。そして、ヴァシヤの姿はそこになかつた。アルカアドはマアヅラに尋いた。彼女はヴァシヤが終始書いてばかりゐて一分間も眠らなかつたこと、それから室の中をあちらこちらと歩き廻つて、半時間過ぎたら歸つてくると言つて出掛たと答へた。「アルカアド、イヴノギッチが歸つて來たらお前、僕が散歩に出たと言つてくれ、そう三四度繰り返して言つたと言つてくれ。」と付け加へたことも彼女は言つた。

「彼はアルテミエフの家にゐるのだ。」とアルドカア、イヴノギッチは考へた。

一瞬間の後に、彼は希望の光に向つたやうに烈しく起き上つた。

「彼は靴度仕事を仕上げたに違ひない。それで押へ切れなくなつて、あそこへ行つたのだ。」と彼は考へた。「けれども、いや、彼は僕を待つてゐなかつた。如何言ふ風になつてゐるのか見てみやう。」

彼は蠟燭をつけて、ヴァシヤの机に近寄つた。仕事ははかどつてゐたが、未だく

書かねばならないことが澤山残つた。アルカアド、イヴノギッチがもつと近寄つて調べて見やうとした時に、ヴァシヤは這入つて来た。

「あゝ、君は歸つたのかい。」と彼は叫んだ。

アルカアド、イヴノギッチは何にも言はなかつた。彼はヴァシヤに何にも尋かうとはしなかつた。ヴァシヤは眼をふせて、此度は一人で黙つたまゝ紙を繙し始めた。遂々二人の眼は出會した。ヴァシヤの眼が非常に哀願するやうな、がっかりしたやうなので、アルカアド、イヴノギッチはびつくりした。

「ヴァシヤ、如何したのだ。」と彼は腕の中に彼を抱き緊めて叫んだ。「言つてくれ、君が如何して悲しんでゐるのか僕は解らない。君、ほんとに、如何したんだい。隠し立てしないですつかり言つてくれ。仕事のことばかりで君がこんなに苦しんでゐる譯はない。」

ヴァシヤは一言も言はないで、友達に對して身を固くしてゐた。

「おい、おい、ヴァシヤ……それでは、君は仕上げることは出来ないんだね。それつ

切りだらう。如何とも仕方がないぢやないか。僕は君の心持が解らない……心を打ち明けてくれ……さあ、さあ。」とアルカアド、イヴノギッチは、室の中をあちらこちらと歩き乍ら、ヴァシヤを慰める薬を探してゐるかのやうに、いろ／＼辻褃の合はないことを言つた。「僕は君の代りに明日ジュリアン、マスタゴギッチの家へ行つて、君にもう一日猶豫を與へてくれるやうに願つてやる。僕はすつかり、すつかり話してやる君がこんなに苦しんでゐるんだもの……」

「有難がたう！」とヴァシヤは叫んだ。そして眞蒼になつた。彼は足で立つてゐるところが殆ど出来なかつた。

「ヴァシヤ！ ヴァシヤ！」

彼の唇は慄へてゐた。彼は何か言はうと思つたが、自分の前に不安な期待で立つてゐるアルカアド、イヴノギッチの手を唯握り緊めるばかりであつた。ヴァシヤは彼を見上げた。

「ヴァシヤ、如何したんだ。君は僕の心を殺して了ふよ。」

涙はヴァシヤの顔を満たした。彼はアルカアドの腕の中に身を投じた。

「僕は君を欺いた、アルカアド。」と彼は言った。「彼は君を欺いたんだよ、許してくれ許してくれ。」

「何だつて。君が如何したんだ。」とアルカアドはびつくりして尋いた。

「僕がしたことはこれだ……」

そして、ヴァシヤは、絶望したやうな身振をして、引出しから、大きな六冊の手帳を出して、机の上に投げた。

「これが如何したのだ。」

「明後日まで寫さなければならぬのが是丈あるんだ。それで未だ四分の一もやつてゐない。……如何してこんなことをしたか尋いてくれるな、僕は言ふことが出来ない……アルカアド、君、僕は夢を見て覺めたやうだよ。僕は三週間全部空費して了つたのだ……僕は毎日彼女の家へ行つてゐたのだ……僕は悲しかった。僕がちゃんと極らなかつたので僕は苦しくつて仕事をする事が出来なかつた……僕はそんなことさへ

考へてゐなかつた。今になつて、漸く僕の幸福がちやんと定つたので、恐しい現實が解つて來たのだ。」

「ヴァシヤ。」とアルカアド、イヴノギッチはきつぱりした調子で言った。「ヴァシヤ、僕は君を助けてやる。すつかり解つた。これは可成重大なことだ。然し、僕は君を救つて見せる。いゝかい、明朝、僕はジュリアン、マスタコギッチの家へ駆けつけてゆく……悪むいと言つちやいけない、いゝかい……今迄のことをすつかり話する……さうさしてくれ……すつかり話して、どれ程君が苦しんでゐるか、どれ程がつかりしてゐるか話する。」

「然し、君はそんなことをして却つて僕を心配させると思はないか。」とヴァシヤは恐怖に襲はれて言った。

「ねえ、ねえ、ヴァシヤ、君は恥しいとは思はないか。だが、いゝかい、僕は君が苦しんでゐるのを見て、どんなことが君の身に起つてゐるか、よく知つてゐる。我々が一所に生活をしてからもう五年にもなる。君はお人善しで温和しいが、また弱い、非

常に氣が弱いのだ。リザエタさんも其事に氣がついてゐることは君だつて知つてゐる。其ばかりではなく、君は夢想家だ、其は非常に悪いことだ、何故と言つて、其事は、物事を誇張するやうに導くからだ。よく聞けよ。僕は君が望みを知つてゐる。君はジュリアン、マスタコギッチに君の結婚を喜んで貰ひたいと思つてゐる……よし、よし、君は眉を擡めてゐるね、君のジュリアン、マスタコギッチのことを言ふと、君は怒るね。そんなら、其事を言ふのは止めやう。然し、君は結婚する時あらゆる人が幸福になるのを見たいと思つてゐることは疑ひがない。さうだ、儘かにさうだ。君は自分が幸福だから、全世界が幸福になればいゝと思つてゐる。君は自分一人斯様な幸福を味ふことを厭に思つてゐる。君は其に價する爲に、本當の立派なことを成し遂げやうとさへ心掛けてゐる。君は多くの犠牲を拂つても、自分の熱誠や智識やまた恩人に對しての感謝を表はしたいと思つてゐることも、僕は知つてゐる。君が期日までに、仕事を仕上げないで約束を守らないから、ジュリアン、マスタコギッチが君に對して不満足に思つてゐると思つて君は苦しんでゐるのだ。ほんとにさうぢやないのかい。」

アルカアド・イヴノギッチは、斯う話してゐたが、終りになつて聲がふるへて來て、口をつぐみ、深い息をもらした。

ヴァシヤは、なつかしやうに彼を見つめてゐた。嬉しげな微笑が彼の唇の上に漂つた。彼は希望の光りに元氣ついたやうにさへも思はれた。

「それから、いゝかい。」とアルカアド・イヴノギッチは、感服させるやうな調子で再び口をきつた。「ジュリアン、マスタコギッチが君に示して居る恩恵を續けてゆけばいゝんだ、ねえ、君、すべての問題はそこにあるんだ。そんなら、問題がたゞそれにすぎないのだから、僕は自分を犠牲にする。僕は明日、ジュリアン、マスタコギッチの家へ行く。彼は善良で寛大で君よりもよく物事を知つてゐる。彼は僕達の話をよく聞いて罪を赦してくれるたらう。これで心が落着いたらう。」

ヴァシヤは目に涙を浮べて彼の手を握つた。

「そんなら承知した。」と彼は言つた。「僕は仕事を仕上げなかつた。つまりそれだけなんだ。君がジュリアン、マスタコギッチの家へ行かなくつてもいゝ、僕は自分で行つて

めの人にすつかり話して丁ふ。もう心が落ち着いた。只君が行く必要はないのだ。」
「えらい！」とアルカアドは非常に喜んで叫んだ。「君が道理がわかつてくれたのでどんなに僕が嬉しいか知れやしない。僕が、ジュリアン、マスタコギッチの家へ行くとするれば、君が困まるといふ事は解つてゐる、それぢや、君自身で話しに明日行き給へ。……それよりか、君は行かないで此處に居て書いて居給へ、いゝかい、僕は、これが急ぎの仕事であるかどうか聞いてくるから。考へて見給へ、急ぎの仕事でなかつたら、ほんとうに救はれる譯だ。ジュリアン、マスタコギッチは、君と定めた期限すらも忘れてるかも知れない。」

ワアシャは、疑ひ深い様子をして首を振つた。彼の目には、常に同じ様な限りない感謝の表情があつた。

「よし、もうその事を話すのはよそう。僕は實際くたびれた、もうこんな事を聞くのがいやになつたほどくたびれた。他の話をしやう。それに、僕は急いで仕事に取りかゝろうとはしてゐない、僕は只次の項に移る爲にもう二頁書くんのだ。いゝかい……僕

は、久しい以前から君が如何してこんなに僕を理解する様になつたか、君に聞きたいと思つて居たのだ。」

「ワアシャ、僕がどんなに君を愛して居るか知つてくれたら、君はこんな事を僕に聞かない筈だ。」

「だから、アルカアド、君はどうしてこんなに僕を愛してくれるのかわからないから僕はきくのだ。君が愛してくれるので、僕は苦しい位だ。僕は寝ながら、そして君の事を思ひながら幾度涙で枕を濡したか知れやしない、だつて……だつて……だつて……君は僕を愛してくれ、僕はどうして感謝の念を表していゝかわからないんだもの。」

「君は随分妙な人だね、ワアシャ！ まるでまるで氣狂ひだ……」

「そうだ、僕は知つてゐる、君は僕の氣を静めやうとして居るのだ。だが、僕は今程落ち着いて幸福な時はない。いゝかい、アルカアド、僕は君にすつかり話そうと思つてゐるが、何時も君に心配をかけるのが辛い……君は絶えず心配してゐて、僕を注意してゐてくれる。それでも、僕はどうなるかわからない。ねえ、君、今日まで僕は自

分の事がよくわからなかつた様なもの。他人の事でさへも、やつと昨日からわかりかけた様に思はれる。今まで僕は物事を知る事が出来なかつたのだ。僕の心は閉ぢてゐたのだ。僕は決して世界の誰に對しても善をなす事は出来なかつた。其の上僕は、外見上不愉快な人間だ。それにもかゝわらず、君から始め、凡べての人は僕の爲めにしてくれる。もう久しい前から、僕はそれを知つて居る。僕は今まで君にさういふ事は出来なかつたが……」

「よせよ、ヴァシヤ、よせ。」

「何故だ、アルカアシヤ、僕は昨日君に、ジュリアン、マスタコギッチの事を話した。君はあの人がどんなに嚴格で、どんなに氣難かしいか知つて居る。何故つて、君だつて時々あの人か叱りつばい人間だといふ事を言つた。それなのに、昨日あの方は僕に冗談を言ひ出した、そしてあの方が誰れに對して表はした事のない、善良な心に表してくれた。」

「それは、そうされる價值があるからなのだ。」

「おゝ！ アルカアシヤどうしてもこの仕事を仕上げたい！ ねえ、君、僕の幸福は實現しないやうに今から思はれる……いや、いや、その爲めぢやない。」とヴァシヤは、アルカアドが、卓子の上に、積み上げられた書類の上に、流し目を注いで居るのを見て叫んだ。「そんな事は何でもない。それは只紙片に過ぎない、そんな事はいゝ……だが……僕は今日彼女達のところへ行つた……そして僕は入らないで来た、それが非常に苦しい。彼女はピアノを奏してゐた。そして僕は、は戸口でそれを聞いてゐた。」とヴァシヤは聲を低くして言つて、「只僕は入らうとはしなかつた……」

「おい、どうしたのだ、ヴァシヤ……どうして僕を見つめてゐるのだ……」

「何だつて？ 何でもない。僕は只少し氣分が悪いのだ。足が慄へる……終夜、徹夜してゐたせゐだ……だが目がまわる。そして此處が、此處が……」

彼は指で心臓のところを指して氣絶して倒れた。

彼が我に歸つた時に、アルカアドは力を出して助けやうとした。彼はヴァシヤを寢かさうと努めた。ヴァシヤは激しく抵抗した。彼は泣いて、あとの二頁をどうしても

書き終りたいのだと、斷言した。過度に彼を怒らさない爲めに、アルカアドは彼のなすまゝにまかした。

「おい、君。」とヴァシヤは友の前に立ちながら言つた。「僕にいゝ思ひつきが、或る希望が浮んだ。」

そう言ひながら彼は微笑した。

「僕のしやうと思ふ事は斯うなのだ、僕はあの人のところへ書き終つた分だけ持つて行き、残りの方は話で何かごまかしを言つておく。澤山紙を水に濡らしたり、焼いたり、なくなしたり、その他何でも言ふのだ……いや、僕は嘘をつく事は出来ないからむしろまだ書き上げないのだと白状しやう。僕はすつかり言はう、僕は書き終へる事が出来なかつたと言はう。僕の戀や結婚の事までも話さう……あの人だつて最近結婚したばかりだから、僕を理解してくれるだらう、それから、あの人は僕の涙を浮べて居るのを見て感動してくれるだらう……」

「勿論、間違ひがない、行けよ、ちや行け、そしてすつかり言ふんだ……涙なんか必

要ぢやない、何だつてそんな事を？ さあ、間違ひがない。ヴァシヤ、君も僕の氣を狂はせてしまふよ。」

「そうだ、そうだ、僕は行かう、だが今は僕に書かしてくれ、アルカアシヤ」

アルカアシヤは自分の床の上に寝ころんだ。彼はヴァシヤに對してもう何を言つてもだめだと思つた。彼は彼が全く精神錯亂して氣狂ひになりはしないかと思つた。彼はヴァシヤが自分自身の良心に對して罪があるものとして已をせめ、運命に對して恩知らずで、自分自身には不満足で、そして自分が價してないと信じてゐる幸福のために氣が動顛してゐる事を悟つた。

「彼を救はなければならぬ、彼を自分自身と調和させるやうにしなければならぬ」と彼は考へた。

彼は長い間考へを廻ぐらした、そして最後に翌朝となるやいなや、ジュリアン、マスタク、ボッチのところへ行かうと決心した。

ワアシヤは始終書いてばかりゐた。弱つて了つたアルカアド、イヴノギッチはもつと樂に考事をしやうとして床の上に横はつてゐた。彼は遂々眠むつてしまつて曉方になつてやつと彼を醒ました。

「あゝ、しやうがないな、」と常に書きつゞけてゐるワアシヤを見ながら彼は叫んだ。彼は友達の方へ走つて行つて、兩腕で抱きかゝへ力づくで彼を寢かした。ワアシヤは微笑しながらなすがままにかせてゐた。彼の目は疲れきつて閉ぢて居り、口を開くのもやうやくであつた。

「僕は今寢やうと思つてゐたところだ、」と彼は言つた。「だがね、アルカアド、僕にいゝ考が浮んだ。僕は書き終れる。僕はもつと非常な速さで書くのだ。しかし今はあまり疲れきつて書き續けることが出来ない。君は八時に僕を起してくれ。」
彼は斯う言ふやいなや、熟睡してしまつた。

「マアヴラ」とアルカアド、イヴノギッチは低聲に茶を持つて來た女中に言つた。

「彼は一時間過ぎると起してくれと言つたが、僕は絶対にそれを禁ずる。そのまゝにしておけ、自分で目がさめなかつたなら、十時間も續けて眠むらしておくんのだ。」

「かしてまりました。」

「今日は晝飯の支度をしなくてもいい。音をたてないやうによく注意するんだよ。彼が僕の事を聞いたら、僕は役所へ行つたと言つてくれ。いいかい。」

「かしてまりました。御随意にお眠むりになるとよろしう御座います。私はちつともかまひません。かへつてお休みになつてゐる方がよろしう御座います。あなたの仰しやつた事はよく注意致しておきます。でも、昨日破れた茶碗の事であなは私をお叱りになるのは御無理ですわ。だつて私の誤ちではなく猫のせゐですもの。畜性、お前は逃げるのかえつて。私はあんなに叱りつけたのですのに。」

「しつ、しつ、おだまり、おだまり。」

アルカアド、イヴノギッチは、マアヴラを臺所へ追ひやつて鍵をもち込めた。それか

ら彼は役所へ出かけた。道すがら彼は彼がどんな風にして、ジュリアン、マスタコギッチの所へ姿を表はすかその有様を考へた。彼は非常にこわごわして役所に着き、恐る怒る閣下が来て居られるかどうかと尋ねた。閣下は来て居られず又出でがないだらうとの御返事であつた。アルカアド、イヴノギッチは、始め、ジュリアン、マスタコギッチの私宅へ赴むかうと思つた。然し彼が自分の家に居るとすれば大變忙がしい事があるに違ひないと思つた。彼はそこで、役所に止まつてゐた。彼には、時間のたつのが、果てしがないやうに思はれた。彼はシムコフが頼まれた仕事の事を人に聞いて見た。すべての人々は、彼がどんな仕事に取りかかつてゐたのか忘れてゐた。遂々三時はうつた。アルカアドは歸らうと思つた。彼は控所を通り過ぎると一人の筆耕者が彼を止めて、ヴァシリイ、ペトロギッチが一時に來たと言つた。彼はアルカアド、イヴノギッチと、ジュリアン、マスタコギッチが其處に居たかどうかとたづねたのだつた。

此報せは、アルカアド、イヴノギッチを驚駭させた。彼は急に外へ出て馬車に乗り、自分の家に走せつけた。シムコフは其處にゐた。彼は非常にいらいらして室の中を

歩いてゐた。彼の姿を認めると、彼は我に歸つて感情を静めやうとした。彼はだまつた自分の机の前に坐つた。彼はありありとアルカアド、イヴノギッチの質問を避けやうとしてゐた。アルカアドはそれを認めて心が引きしめられるやうであつた。

彼は床の上に坐つて自分の持つてゐる只一つの本を開いた。しかしあはれなるヴァシヤの、頑固な沈黙をまもつて額も上げずに書きつゞけて居るのを眼から離さなかつた。

斯して數時間は過ぎた。アルカアドの不安は際限がなかつた。遂々十一時頃、ヴァシヤは頭を上げてぼんやりしたきつぱりした様子で彼を見つめた。彼の友は非常な心配に耽つて待つてゐた。二三分又過ぎたが、ヴァシヤは始終何にも言はなかつた。

「ヴァシヤ」とアルカアドは叫んだ。

ヴァシヤは答へなかつた。

「ヴァシヤ」と床から激しく起き上つて彼はくり返した。「ヴァシヤ、どうしたのだ。」
彼は彼の所へ駆けて行つた。

ヴァシヤの顔は、不可解な恐ろしい同じ表情をつとけてゐた。

彼は又氣を失つたのだとアルカアドは全く恐怖にふるへながら考へた。

彼は纏を取つてヴァシヤの顔の上へ水を注いだ。彼は彼の顛顛をぬらして、小鼻を摩擦した。

ヴァシヤは我に歸つた。

「ヴァシヤ、ヴァシヤ」とアルカアドは目に涙を湛へて叫んだ。「ヴァシヤ、そんなにがっかりしてはいけない。」

彼は言ひ終る事が出来ずに友を腕の下に抱きしめた。

ヴァシヤは自分の額をこすつて恰も理性を失ふ事を恐るゝかの如くに両手で頭をかへた。

「僕はどうしたのか知らない」と、遂々彼は言つた。「僕は非常に疲れたやうだ。もういゝ、いゝ。心配するな、」と彼は悲しげな淋しい様子をしてゐる友を眺めながらつけ加へた。「如何して君は心配するのだ。」

「今度は君か、君が僕を慰めてゐるのか、」とアルカアドは興奮して叫んだ。「ヴァシヤどうぞ後生だから横になつて少し眠むつてくれ。そしてつまらない心配をしないでくれ。その後で君は仕事についた方がいゝ。」

「そうだ。そうだ。よろしい。僕は横にならう。それがいゝ。ねえ、僕は書き終らうと思つたが、考へた、そうだ、そうだ……」

アルカアドは彼を寝かした。

「よく聞くんだよ、ヴァシヤ」と彼はきつぱりした調子で言つた。「決心をしなければいけないよ。君の考はどんなことか僕に言つてくれ。」

「あゝ、」とヴァシヤは絶望した様子をして頭をそむけながら言つた。

「さあ、ヴァシヤ、少ししつかりしてくれ。君がこれから決心をきめなかつたなら、君は眠むる事が出来ないのだよ。」

「君の言ふ通りにするよ。」

「彼は遂々同意した、」とアルカアドは思つた。

「僕の言ふ事を聞くんだよ、ヴァシヤ、」と彼は言った。「僕が君に言った事を思ひ出すんだ。そうすればこれから君は救はれる。君の將來はたしかとなるんだよ。だが、將來の事つて、僕は何を話さうとしてゐるのだ？君は僕を非常にびつくりさせた。それで僕も君のやうな考へ方を始めたのだ。將來つてどんな將來なのだ。それは、みんな馬鹿々々しい事だ。君はジュリアン、マスタコギッチの恩恵を失ひたくないと思つてるのだね。そんなら君はそれを失はないやうにするが、……僕こそ……」

もしも、ヴァシヤが彼を妨げなかつたならばアルカアド、イヴノギッチはまだまだ長く話し續けたらう。彼は立ち上つて、アルカアド、イヴノギッチの首の廻りに自分の二本の腕をまわして接吻した。

「もう澤山」と彼は弱々しい聲で言つた。「澤山だ、もう話してくれるな。」

彼は枕の上に再びころがつて頭を壁の方へ向けた。

「あゝ、困つた、」とアルカアドは考へた。「彼はどうしたのだらう。彼は全くどうかしてゐる。理性を失はうとしてゐるのだ。そして彼がもしも病氣になつたなら、そんな

事がないとも限らん、そうすれば返つて好くなるかもしれない。病氣をして心配がなくなるだらう。その後で、彼の仕事を片づけてしまふ事も出来る……」

然しヴァシヤはうたゝねをしてゐるやうに見えた。アルカアド、イヴノギッチはそれを喜んだ。

「これは好い兆候だ、」と彼は考へた。

彼は一晩中友の側で徹夜しやうと思つた。

ヴァシヤは落ち着いてゐなつた。始終彼は顫へたり、動いたり、目を開いたりした。終に疲労がうち勝つて彼は全く眠むつてしまつた。

それはもう午前の二時であつた。アルカアド、イヴノギッチは椅子の上にうたゝねをしてゐた。彼の眠りはさわがしい不可思議なものであつた。彼にはそれが眠むつてゐなかつたやうに思はれた。そして、ヴァシヤが始終眠つて、否むしろ、眠むつたふりをしてゐたが、ぬすみ目に彼を見ながら、そつと起き上り、少しづつ、机の方に、いざりよつたやうに思はれた。

するどい苦痛が、アルカアドの心臓をつらぬいた。ヴァシヤが彼に對して信用をおかず、彼を欺かうとしてゐるのを見るのは、彼には悲しく、切なかつた。彼は彼を捕へて叱りつけて再び寝かさうと思つた……その時ヴァシヤは、叫び聲を發した。そして、アルカアド、イヴノギッチが床の上に寝かしたものは一つの死骸であつた。

冷汗が彼の額に流れた。彼は目を醒まして、眼をみひらいた。ヴァシヤは彼の前に居て書きつゞけてゐた。

まだ夢にもてあそばれてゐるのだと思つて、アルカアド、イヴノギッチは床の上を眺めた。ヴァシヤは其處に居なかつた。

彼は、魔夢がこびりついてゐるのを振るひ落そうとして烈しく起き上つた。

ヴァシヤは身動きもしなかつた。彼は書きつゞけてゐた。突然、アルカアド、イヴノギッチは彼の友が、あらかじめ、ペンをインキの中に浸さないで、ペンを使つてゐるのを見とめた。恰も紙の上に、目に見えない字を書いて居るやうに、紙は眞白のまゝであつた。けれども、彼は眞に仕事を書き進めてゐたかのやうに、大急ぎで書いゐた。

「いや、これは、夢ではない、」とアルカアド、イヴノギッチは考へた。

「ヴァシヤ、ヴァシヤ、自分の言ふ事に答へてくれ、」と彼の肩をかつまへながら叫んだ。ヴァシヤは返事をしなかつた。そして、紙の上に目に見えない字を書きつゞけた。

「遂に僕は早く書く事が出来るやうになつた、」と頭を上げずに、彼はつぶやいた。

アルカアドは彼の腕をとらへて、手からペンをぬき取つた。嘆聲がヴァシヤの胸から出た。彼は腕を落して、目でアルカアドを見上げた。それから、非常な失望の様子をして、恰も、全身にのしかゝつてゐる重荷を拂ひのけやうとするかのやうに、額の手に手をやつた。そして黙つたまゝ胸の上に頭をうなだれた。

「ヴァシヤ、ヴァシヤ」とアルカアド、イヴノギッチは失望に満たされて呼んだ。

ヴァシヤは彼を見つめた。涙は彼の目からはとばしつた。彼は何事かを言はんとするかの如く唇を動した。

「何を言つてるのだ」とアルカアド彼の方にかゞみながら聞いた。

「どうして、どうして？」とヴァシヤは靜かに言つた。「像は何をしたのだ。」

「ヴァシヤ、どうしたのだ。何を心配してるのだ。」

「どうして僕は軍隊に編入させられるのだ、」とヴァシヤは友を正面から見ながら聞いた。「僕が何をしたのだ」

アルカアドは髪の毛が頭の上でおちけ立つたやうに思った。恐ろしい疑惑が彼の心を貫いた。然し彼は直ぐに我に歸つた。

「それは何でも無い、一時の惱だ、」と彼は考へた。そして青くなつて、あはてふために、彼は醫者を迎ひに走り出さうとした。突然ヴァシヤは彼を呼んだ。アルカアドは彼の方に走つて行つて自分の子を奮はれんとする母親の如くに彼を腕で抱きしめた。

「誰れにも言つてくれるな、アルカアド、いゝかい、これは不合せな事だ、だが僕は一人で負ふのだ……」

「何を言つてるのだ、氣を静めろ、ヴァシヤ。」

ヴァシヤは嘆息した。

「どうして彼女を殺すやうなことをする。それは彼女の過失ではない、自分のだ……」

自分の過失だ……」

彼はしばらく沈黙を守つてゐたが、やがて低くつぶやいた。「さようなら、親はしい女よ、さようなら……」

アルカアド、イヴノギッチはこの有様を見て苦しんで居たが、最早堪へしのぶ事が出来なかつた。彼は醫者を呼びに行かうとして立ち上つた。

「さあ、もう時刻だ、」とヴァシヤは同じやうに立ち上がりながら叫んだ。「さあ、兄弟さあ、僕は支度が出来た、君も一緒に行つてくれるだらうね。」

彼は口をつぐんで、非常に氣ぬけたやうな、又不満足な様子で、アルカアド、イヴノギッチを見つめた。

「ヴァシヤ、後生だから、僕の後について来てくれるな。此處で待つてゐて來れ。僕はすぐに歸つてくるから、」とアルカアドは、帽子をとりながら言つた。

ヴァシヤは納得したおとなしい様子をして再び坐つた。然しながら彼の目には絶望した決心がありありと見えた。

それは八時であつた。アルカアシャが醫者を迎ひに行つた時にはもう晝になつてゐた。然し、彼が戸をたゞいた醫者の所では皆、先生は往診にお出かけになつたと言つた。彼は一時の間、何等の結果も得ないで彷徨つた。遂に絶望して、醫者の事はほつたらかして、ワアシャの事を非常に氣づかつて、大急ぎで家に歸つた。彼が歸つた時に、マアヅラは何にも出来事が起らなかつたかの如くに、部屋を掃いてゐた。そして、暖爐に火をつけやうとしてゐた。ワアシャは其處に居なかつた。

「彼は何處へ行つたのか。あの氣の毒な者は何處へ逃げてゐたのだらう」とアルカアドは悪寒に襲はれて考へた。

彼はマアヅラに聞いたが彼の女は何にも知らなかつた。人が出かける音さへも聞かなかつた。

アルカアド、イヴノギッチはすぐに、アルテミエフ家へ走せつけた。ワアシャは其處にゐるに相違ないといふ考へが起つたのは、如何言ふ譯だかわからなかつた。

彼が其の婦人達の所へ着いた時に、十時が鳴つた。人々は彼が來るとは思つてゐず、

そして又何事も知らなかつた。アルカアド、イヴノギッチは全くあたふたして彼女達の前に立ち止まつて、ワアシャを見つげなかつたかどうかと猶くどくどくたづねてゐた。

老婦人は氣を失つた。リザンカはぶる／＼顫へて何事が起つたかと尋ねた。アルカアド、イヴノギッチは人の信ずる事の出来ない物語りを作り出して言つた。それから二人の婦人が失望落膽してゐるのもかまはずに外へ出て行つた。

彼はそこで、役所へ走せつけた。道すがら彼は、ワアシャが、ジュリアン、マスタコギッチのところへ行つてるかも知れないと考へた。そして閣下の家の前を通つて彼はそこへ立ちよつて行かうといふ考へを起した。然し彼は始め役所に行かう、もしくは、其處へ行つて何にもわからなかつたならば、ジュリアン、マスタコギッチのところへ歸つて來やうと決心した。

彼が控所へ入るやいなや、友達が皆彼を圍んで一齊にワアシャは如何したのかと聞いた。皆彼が氣狂ひになつたと言つてゐた。ワアシャは仕事を終へなかつたので、自分を罰するために、軍隊に編入されやうと、しつこく思ひ込んでゐるのに皆が驚いて

めた。アルカアドは答へるひまがなかつた。彼は事務所に飛び込んだ。處に行く前に、彼は、ヴァシヤが、ジュリアン、マスタコギッチ及び多くの上役の部屋にはいつたといふ事を知つた。彼は、其處に走つて行つて半ば開いた戸から、あはれなヴァシヤがあるのをみとめた。彼は閣下の室へ飛ぶやうに這入つて行つた。其處には非常な椿事と騒動が起つてゐた。ジュリアン、マスタコギッチは非常に心痛してゐるやうに見える。一番上役の官吏は彼を取りかこんで小田原評定をしてゐた。此の群からあまり遠くない所に、ヴァシヤが大將の前に立つてゐる新兵の如くに身體と頭を眞すぐにして眞蒼になつて立つてゐた。彼はジュリアン、マスタコギッチの眼を眞直ぐに見つめてゐた。忽ち人々はアルカアド、イヴノギッチが來たのをみとめた、其處に居た一人の人が、彼がシムコフと一緒に住んでゐる事を知つてゐたので、彼を閣下のもへつれて行つた。人々はすぐにアルカアドに尋ねた。彼は答へやうとしたが、ジュリアン、マスタコギッチを見ると、彼の顔に非常な眞面目な憐憫の表情が浮んでゐるのを見て、彼は顫ひ戦のき涙にむせんだ。それから彼は自分の長官の手を取つてそれに顔をあて、泣いた。

ジュリアン、マスタコギッチは急に身をのいて言つた。

「よし、よし、君。自分は君が善良な心を持つてゐることを知つてゐる。だが一體如何してこんな事になつたのだ。如何して彼は氣狂ひになつたのだ。」

「感恩の情からでございます。」

人々は感恩の情が斯くまで過激になるものと非常に驚いた。それは不思議で本當でないやうにさへ思はれた。如何して人々は感恩の情から氣狂ひになる事が出来るだらう。

アルカアドは一生懸命で辯解した。

「あゝ、何といふ氣の毒な事だ、」と途々ジュリアン、マスタコギッチは言つた。「自分が彼にやつた仕事は、重大な事でも、急ぎの事でもなかつた。あたら、一人の人間をくだらない事になくしてしまつた。だが彼をつれてつてもらひたい……」

次いで再び彼はアルカアド、イヴノギッチに物を言ひかけた。

「彼は」とヴァシヤを指しながら言つて、「何だか若い女にこんな事を言はないでくれ

と言つてゐた。それは誰れなのだ、それは彼の許嫁なのか。」

アルカアド、イヴノギッチは彼にすつかり話した。けれども、ヴァシヤは、この時必要な重大な事を思ひ起さうとするかの如くに非常な精神を張りつめて考へてゐるやうに思はれた。だれか自分を助けに來てくれ、ばい、がと思つてゐるやうな眼で皆の人々をたづねてゐた。それから、アルカアド、イヴノギッチをみると彼の顔は元氣づいた。彼は出来るだけ軽く三步進んだ。そして自分を呼んで居る士官に近よる時兵卒がなすやうに右の長靴で、床に音をたてた。すべての人々はどんな事になるかと心配して待つて居た。

「閣下、私は兵役には不適當であります。私は身體が弱く、小さくあります、」と彼の言葉を一言、一言切つて、はつきり言つた。

室の中に居たすべての人々は悲しく思つて、心がさしせまつた。ジュリアン、マスタコギッチは意志の力でこらへてゐたにもかゝらず涙を押さへる事が出来なかつた。

「彼をつれてつてくれ、」と絶望した様子で彼は言つた。

「兵役に合格した、」とヴァシヤは低い聲で言つた。

それから、軍隊式に固くるしく廻つて室を出て行つた。

彼に關係を持つてゐる人は、アルカアド、イヴノギッチまで皆直ぐに彼の後について行つた。病院に彼をつれて行く事になつてゐる馬車が、到着するのを待ちながら人々は病人を座らせた。彼は口をつぐむで心配に堪へないやうな風をしてゐた。彼は自分の見知つてゐる官吏に皆お別れを告げるやうに頭を動かしてゐた。彼は出發の合圖を待ちきれないかのやうに始終門の方を見てゐた。彼を取りまいてゐたすべての人々は彼の運命を哀れんだ。人々は彼が前途有望な非常な謙遜の青年であること、ジュリアン、マスタコギッチが彼にくれてやつた階級と利益は、彼自身の價值によるものであるといふことなどを言つた。

遂々、看護人と、醫者の助手がやつて來た。彼等は、ヴァシヤに近づいてもう出發すべき時刻だと言つた。ヴァシヤは急に立ち上つて、身を動かし、自分の廻りを見ながら行つた。

「ワアシャ、ワアシャ！」と彼の後から、アルカアド、イヴノギッチはすゝり泣きながら叫んだ。

ワアシャは立ち止まつた。アルカアド、イヴノギッチは彼の方に進んで行つた。彼は最後に互に腕で抱き合つた。

「さあ、これを持つて行つて、藏つておいてくれ、」とシムコフは友の手に小さな紙包を渡しながら言つた。「君は後でそれを僕に話してくれ。彼奴等が自分からそれを奪つてしまふといけないから！よくそれをかくしておいてくれ……」

ワアシャは言ひ終らなかつた。人々は彼を呼んでゐた。彼は全ての人々に挨拶をしながら、急に、段を下りた。人々は彼を馬車の中に入れた。そして彼は出發した。

アルカアドは小さい紙を開いた。それにはリザンカが前にシムコフに與へた一房の黒髪があつた。

「おゝ、氣の毒なりザ、」とアルカアドは苦しく考へた。

役所が閉ぢるやいなや、彼はアルテミエフ家へ走せつけた。自分は其處で如何言ふ

事が起つたか物語る必要はない。善良なワアシャに如何な事が起つたかわからなかつた。ベエチャでさへ隅の方に身をかくして、小さい手で顔を覆ひながら涙に咽んだ。

アルカアド、イヴノギッチは自分の家に歸らうとして、カロンナを出た時はもう夜になつてゐた。ネバ河のそばを通らうとして彼は一寸立ち止まり、河の上、夕日の血まみれた光りで眞赤になつてゐる水平線の、煙つた腦ましい遠方に、探りを入れるやうな眼差をなげた。夜は落ち、穏やかな町とふくれた河の幅をすつかり冷たい雲でだんだん覆うた。その雪は太陽の最終の光りと、數知れざる霜の眞砂の光りにてらされて輝いてゐた。それは氷點の二十度を越へてゐた。澤山の湯氣が走つてゐる馬や人から立ち上つてゐた。非常に濃厚なる空氣が音をする度に動めてゐた。兩方の堤防に立つてゐた巨大に似た全ての家々からは煙りの柱が道で溶け合つたり、別れたりして、凍つた空の方にたち上ぼつてゐた。人々は新しく建つた家が昔の建築物よりも高くなつてゐると思ふかも知れなかつた。

やゝ神秘的のこの黄昏の時に、凡ての人々、弱き者や強き者と共に、又全ての住家